

---

らしく。

五十崎由記

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らしく。

### 【Nコード】

N6798C

### 【作者名】

五十崎由記

### 【あらすじ】

友人に誘われて社会人の合コンに参加した今日は、そこで出会った6つ年上のケージに惹かれていく。

だけど、彼は担任教師の元恋人で……

年の差系恋愛小説です。

第1回アルファポリス恋愛小説大賞で特別賞を頂きました。

\*2008年に出版され、契約のために本文の半数を削除しなくてはならなくなりました。  
御理解のある方のみご覧下さい。

## 1. プロローグ

彼女は少しスレた女子高生だった。

母子家庭で、母親がスナックを経営している典型的な家庭環境。もちろんその家は田舎のスナックに相応しく、1階が店、2階から上が居住エリアになっている。

彼女は部屋の出窓から海を眺めるのが好きだった。そこに化粧品を並べ、装いながら。

それは母親が昔口ずさんでいたラブソングの、その歌詞を真似ているのだ。

そうやって恋に憧れる彼女は、スレているわりに意外と真面目で。周囲の評判のわりには純情だった。

そんな彼女はある日恋に落ちる。

この小説はその恋物語。

彼女は篠原今日子、17歳。高校2年生。

## 1・プロローグ（後書き）

こんにちは。作者の五十崎と申します。  
このたび年齢制限事項にあわせて2話以降を削除し、書き改めること  
にいたしました。

又、本作は2008年に一度完結を迎えている作品です。  
新連載ではございません。御了承下さい。

2010・03・15 五十崎由記

## 2・里美の誘い

今日子の朝は早い。

母親の世話焼きを期待できない彼女の一日は、弁当作りからはじまる。もちろん自分用だ。

朝からしみつたれた家事に追われながら、かといってオシャレにも手抜きはない。

あらかた家事の終わった後、部屋の出窓から海を眺め、片手間に髪を巻くのが今日子の日課になっていた。

オークル10の白肌に、30分も時間をかけて巻いたエクステ。そして？キスしたくなる？という売り文句に惹かれて買ったグロスは、まだ結果こそ出していないが、口唇をぼってりと厚く演出している。

今日子は鏡に向かって微笑みかけ、キメ顔を作ってみせた。笑顔も、OKだ。

今朝の風は梅雨の重さをはらみ今日子の夏服を湿らせた。

元々が新しいわけではない校舎は暗く灰色がかっていてどこことなく陰気だ。

そこから聞こえてくる陽気な声が逆に不釣り合いな感じさえる。

2年生から進学希望か就職希望かで分けられる、ここ、愛媛県立八幡高校での今日子の所属は2 E、就職クラス。

全体の30%しかない就職希望者用の校舎として与えられている

のが、目の前にそびえる3階建ての校舎だ。

下駄箱から階段へ、そして廊下へと移動する間も、いかにも進学する気のなさそうな生徒がそこかしこにたむろっているのが見える。彼らはそばを通る他の生徒たちを眺め、SHRまでの時間をつぶしているのだ。

今もホラ、見られているのが気配でわかる。

無遠慮にジロジロと観察してくる奴もいれば、まるで見ていない風を装ってチラ見してくる奴まで、タイプは色々。

そして人が通りすぎたあとに、噂話を始めるのだろう。

コソコソと何か言い合っているのが聞こえてくる。

今日子の方も慣れたもので、自分がどんな風に言われているのか大体把握している。

？まあまあ可愛いけれど特定のカレシは作らない、スカした女？

これがイメーシらしい。

人は自分の好き勝手に想像して、決めつける。

話したこともなくせに、その人格までをも外見と結びつけて。

まあ、好きに噂すればいい。と、今日子は鼻を鳴らした。

実際のところ、今日子の人間性については噂ほどクールなわけではない。

？スカした女？は一理あるかもしれないけれど、カレシが欲しくないわけではないのだ。

今日子にはかつて、長い間思いを寄せていた先輩がいた。

いわゆる片想いってやつだ。しかも、一方的な。

その先輩を追いかけて同じ高校に入学したはいいが、二度にわたる告白は、その二度とも芳しい返事をもらえず。

そして残念ながら先輩が選んだのは、清楚で真面目な子で。

つまり先輩の好みは、今日子とは限りなく真逆に近いタイプだったわけだ。

今日子も振られてしばらくの間は引きずりもしたが、それからすでに1年以上経っている。

今では未練らしい未練もないし、ラブレターを送ったエピソードは笑い話として披露できるほど立ち直っているのだ。

噂話で言われているようなイメージは、所詮人が作り上げたイメージ。  
ジ。

本当は、もっと熱い奴だったりする。

恋は追いかけるよりも、追いかけたいのだ。つくされるよりも、つくしたい。

たまに告ってくれる男子もいるけど、どうもその気にならないのは、きっとそのせいだ　と今日子は思っている。

ただ、？いつかハマるような人と出会いたい！？と願いながらも、きっかけを作る努力は一切していない。

それがいつまでたってもカレシのできない、一番の原因かもしれない。

廊下の窓から吹きこんだ風に今日子の長い髪が泳いだ。

それに誘われた男子生徒が、また一人振り返っている。

何となく薄汚れて埃っぽい教室は、携帯をいじってる子、DSをやってる子、様々だ。

窓際のカーテンはすぐそばの海から吹いてくる風に煽られ、大きく膨らみ、波打っている。

そのカーテンの横、後ろから2番目の席が今日子の指定席。

校舎と校舎の隙間からわずかに海の見えるそこは、隣に一番仲のいい友達もいて、その点も気にいつている。

「今日子！ オハヨ」

「オハヨ」

彼女は川口里美。

2年になってから出来た同じ人種、同じレベルな友達。

1年の時はモロに金髪だった髪を、2年になってから黒髪のアトリエに変えたらしい。

『男ウケがいいからね』

そう含み笑いをする黒目がちの瞳は、メガネのレンズ越しだ。

もちろんメガネだって実用性などまるでないオモチャで、メガネっ娘路線のウケ狙いに決まっている。

「今日子さあ、今夜暇ー？」

媚びるような上目遣いは、その角度まで計算されたような可愛いら

しさを今日子の顔を覗き込んだ。  
ふわりと鼻を掠めるのは、里美のなめている飴の匂いだらう。甘い  
匂いが辺りに漂っていた。

「暇だよ」

里美の誘いは、どうせ駅前のカラオケ屋だらう、と今日子は予想し  
ていた。

そこで働くバイト君に、このところ里美はハマっているのだ。

男ウケだけを狙ってイメージまで改造する里美は、そのくせ片想い  
には滅法弱い。

パターンは、いつも大体同じだ。

暇を見つけては目当ての店に通いつめ、ほんの一瞬だけ触れ合える  
チャンスに胸をときめかせる。

そしてドキドキしながらドリンクを注文し、その店員が運んでくる  
と、恥ずかしさのあまり歌うのもやめてしまう。

里美はギャップが激しすぎる。

でもまあ、そんなところも可愛い一面　とのんびり構えていた今  
日子はしかし、予想とは違う里美のプランにうろたえることとなっ  
た。

「やったね！　ひとりじゃ気が引けると思ってたんだよねえ。初合  
コンだしー」

「は？　合コン？」

「うん、合コン」

まさか、と思っただが、やはり聞き間違いではないらしい。  
里美は本気で合コンに誘っているようで、「早速参加のメールを送らなきゃ！」と携帯をいじっている。

「ちよつと!」

今日子は慌てて手を伸ばし、メールを打つ手を邪魔した。  
このままでは合コンのメンバーに加えられてしまう。  
早合点して、ろくに話も聞かないまま返事をするのではなかった  
と、今日子はすでに後悔していた。

というのも、今日子は合コンに良いイメージを持っていないからだ。

「え？ カ、カラオケ屋のバイト君は？ 里美、あんなに……」

今日子は里美が熱をあげていたバイト君の件を持ち出し、話の流れをかえようとした。  
が、どうやらそれも失敗に終わったようだ。

「その話はもうやめて!」

聞き終わる前に顔をそむけ、里美は話を遮ってきた。

「あの人、彼女いるんだって。あたしにうるちよろされるの、迷惑だ、って昨日言われたの。だから憂さ晴らしに合コン行くんじゃない？」

「え、」

今日子にしてみれば、里美が一番大切な友達である。  
振られたというのなら、もちろん慰めてあげたい。

しかし、その手段が合コンというのはどうなのだろう。  
納得できるようで、できない。

「でも、どうして合コン……」

「春休みに派遣で知り合った友達から誘われてさ、女の子がふたり  
足りないから、友達とどう？ って。会費も相手もちらしいんだ。  
タダだよ！ 出会いもあるし」

「ふうん」

派遣の話なら、以前里美から聞いたことがあった。

あまり大きな声では言えないが、里美は姉の保険証を使って本人に  
なりすまし、派遣会社に登録をしたことがあるらしい。  
高校生でもできるアルバイトとは待遇が違い、結構おいしいのだと  
かいう話だ。

それにしても と、今日子は横目で里美を見やった。

いくら親友の誘いでも、合コンは乗り気がしない。  
行ったことがないから食わず嫌いなだけけど、それでも初対面の  
人と一緒に飲み会をすることくらいはわかる。  
見も知らない他人と飲んで何が楽しいのか、さっぱり理解できない。  
それなら、友達と遊ぶ方がよほど気楽だろう と、これが今日子  
の本音なのだ。

しかし積極的な里美には、今日子のようなためらいはないのだろう。  
こちらの意向を聞くことなく話を先に進めだした。

「たださー、ひとつだけ問題が！ あたしそのバイトをした時、サバ読んでたから……」

「は？」

「だってホラ！ お姉ちゃんの名前でバイトしたから。相手の人たち、あたしのことを3歳上だと思ってるんだよね」

みつつ、ということとは と、今日子は指を折った。

「ハタチ？」

「うん、コンセプトは20歳の派遣社員。あたしの名前は里絵。間違えやすいから、今夜だけ？サト？って呼んでよ」

早口でまくしたてられる提案に、今日子はごくりと唾をのみこんだ。

「コンセプトって……。まさか、ハタチのふりして合コン行けってこと？」

「お願い！ 他に誘える友達いないんだもん。この通り！」

里美はメガネの前でパンツと柏手を打った。今日子を拝み倒す勢いで、「お願い！」とくり返している。

20歳、派遣社員。

それは無理をすれば騙せないことも無い範囲である。もちろん本音は嫌に決まっているのだが、それで里美の気が晴れるなら

お安い御用と言えなくもない。

今日子は盛大なため息をつき、半ば根負けした気分で見やっ  
た。

「んもう……しょうがないなあ。今回だけだからね？」

「ワイー！ 感謝。駅前噴水に晩7時半ね？」

無邪気に喜ぶ里美は、よほど合コンを楽しみにしているのだろうか。  
腕をつき上げて万歳をすると、早速メールの続きを打ち始めた。

まったく、ゲンキンなんだから。

そう呟き、今日子は窓の外へ目を移す。

ふと、窓からそよいできた風が今日子の頬をすりと撫でた。  
見上げた空は薄いブルー。

今日子はその所々に浮かぶ夏雲のはしりに目を細め、風を感じた。

### 3・合コン1

八幡浜市は愛媛県の西、九州と海を隔てた臨海の地だ。

豊かな自然とおだやかな気候に恵まれ、古くからみかんの産地・漁業の町として知られる。つまり、農業主体の小さな地方都市である。

そんなわけだから地価が高騰するわけもなく、それは街の中心部である駅周辺を見ただけでもわかる。

通常なら縦長のイメージが強いオフィスビルも、ここでは横長の作りだ。

全体の風景が、平たく、横に広がる感じで展開している。

食料の自給率が低いと言われる現在でも、ここではまだまだ農業や漁業で生計を立てている家庭は多く、都会のようにサラリーマン家庭が大多数なわけではない。

今日子の母親が経営するスナックの客は、そんな自営農業・漁業のおじさま方が大半を占める。

そして今夜、里美と合コンの待ち合わせをした場所は駅の噴水前だ。この街で合コンができるお店といえば、オフィス勤めのサラリーマンを客層とする居酒屋か、バーくらいしか選べない。

それらのお店は外観も多少はシャレしているし、スペースもゆつたりと作られている。

そもそもが夜に開いているお店の少ない地域だ。

今日子のような？田舎の、ちょっとスレた子？は、限られた遊び場の中で適当に楽しみを見出すしかないのだ。だから会場に指定された居酒屋の名前を聞いたときも、ああ、あの店か、とすぐに分かった。

今日子が開いた携帯のディスプレイは19時20分を表示している。

この頃は随分と日が暮れるのが遅くなったなあ、と、今日子は西空に広がる夕映えを感慨深く眺めた。オレンジ色に染まった雲が薄くたなびき、生暖かい風が強く吹いていた。

丁度仕事帰りの時間帯だ。

駅の改札からは少し疲れた顔の社会人たちが次々と吐き出され、家路へと急いでいる。

梅雨が明けない季節柄なこともあり、手に傘を持つ姿も多い。それが余計に、仕事用らしい大きな鞆を重そうに見せていた。

それはともかく、合コン、である。

初イベントに備えて、今日子もそれなりに頑張ってきたつもりだった。

何が何でも20歳に見えなきゃいけないわけだ。

普段から大人びて見られる今日子でも、さすがに社会人と思われるかどうかまでは自信が無い。

今日子は、噴水の波打つ水面に顔を映した。  
映った顔はもちろん歪んでいてチエックどころではないのだけれど、  
それでもしていないとどこかソワソワと落ち着かないのだ。

「今日子ー！」

駅の改札から続く横断歩道の向こう側から、耳に馴染んだ里美  
もとい、サトの呼ぶ声が聞こえた。

小走りに駆け寄るサトは、メガネっ娘のイメージを脱ぎ捨てて、ヒールの高いサンダルに色合いのきれいなニットのワンピースをあわせていた。

とても17歳には見えない。

どころか、あやうく見逃すところだった。

今日子はサトの変貌ぶりを上から下まで眺め、しみじみと感嘆の声をあげた。

「サト、気合い入ってるねえ。お姉さんみたいじゃん」

そう言った後になって、お姉さんのフリをしているのだから当然か、  
と思い直し、今日子はひとりクスクスと笑った。

「お待ちませー。……今日子も、なんだかカワイイね。CanCam  
のモデルを意識したっばい！」

思い切り凶星をつかれ、今日子は恥ずかしくなって口をすぼめた。

これでも雑誌の特集記事

?合コンで好感度抜群!

新人OLの

必勝コーディネート？を手本に頑張ったのだ。

さんざん悩んだ末に、一番大人に見える黒いキャミソールのワンピースを選んだ。

多少露出度は気になるけれど、年齢を誤魔化すためだ。この程度の賭けは仕方がない。

それにしてもお互いのファッションを牽制しあう雰囲気、そういうイベントがこれから始まるのだということを意識させ、今日子の緊張を高まらせた。

それはサトの方も同じなのかもしれない。

「行こっか？」と掴んできた手のひらは、しっとり汗ばんでいた。

会場は去年オープンした洋風居酒屋の奥　白い木のパーティションや、背の高いベンジヤミンの植木で目隠しをされた通路の先にあった。

閉ざされた中の部屋からは男女の音が漏れ、ふたり以外のメンバーがもつ揃っていることを予感させる。

サトが「開けるよ？」と耳打ちし、今日子が頷いた後、その扉は開かれた。

「コンバンハー！」

明るい声で中に入るサトの、背中越しに中を窺う。

天井から吊るされた大きな羽がゆっくりと回る室内は、外のフロア

とは一転して薄暗く、掘りごたつ調のテーブルに男が4人、女がふたり座っていた。

一見して今日子達よりもずっと年齢が上と分かる顔ぶれに、今日子は母親がやっているスナックでの一場面を思い出した。

ゴルフコンペの打ち上げや、ママ 母親の誕生日にはホステスの人手が足りなくて、手伝いにかりだされたことが何度かあるのだ。その時に接客した、上司に連れてこられた若いサラリーマン達と、目の前の男達がだぶって見えた。

「ここに座りなよ」

その呼びかけがどうやら自分にむけられたものと気付くと、今日子は「ここ？」と指された場所に目を向けた。

「……ハイ」

返事をしたはいいが、どう見てもそこは男に挟まれたスペースである。

不安になってついサトを振り返ると、別の声に誘われたサトは、何の抵抗も感じさせない態度で席に着こうとしていた。

それを見るとためらっている自分のほうが不謹慎な気がして、今日子も指定された場所に腰を下ろした。

「ねえ、なに飲む？」

ふわりと柑橘系の爽やかな香りが漂ったかと思えば、座りなよと言った男が、ドリンクのメニューを広げてこちらを向いていた。

20代前半、のように見える。  
香りの正体は、彼がつけているコロンのようだ。

毛先を軽く跳ねさせた茶色い髪。

日焼けした肌に、すつきりとした一重瞼が印象的なその男からは、  
クラス男子達にはない大人の余裕が感じられた。

かっこいい人。

そう表現して間違いないレベルの男前だ。

ドリンクのメニューは当たり前だがお酒ばかりで、今日はその中  
からインスピレーションでジントニックを選び、メニューの写真を  
指さした。

注文が一通り終わると、端から順番に自己紹介が始まった。

篠原今日子、20歳、派遣。

名前だけが本物の自己紹介は、数年後には本当になっているかもし  
れない。

今日子は偽のプロフィールを、スラスラと抵抗もなく口にできた。

「へえ。今日子さん、か。可愛い名前だね？」

先ほどから色々と世話を焼いてくれる隣の男は、新垣と名乗った。

彼は沖縄出身で、八幡浜に住み今年で2年になること。

趣味はスキューバダイビングで、免許も持っていることなどをハッ  
ラツとした声で話している。

今日子の目には、新垣のその精悍な横顔が妙に眩しく映った。

趣味がスキューバだなんていう人を目の当たりにしたのが初めてなのだ。

その上、自身の趣味や特技を堂々と口にしている。

もじもじウジウジと小さな声でしか物を言えない同級生とは、大違いだった。

自己紹介によると、彼らは職場の同僚なのだそうだ。

ひとりずつから受け取った名刺には、今日子にも聞き覚えがある工業系の社名が書かれていた。

サトの友達だという女の子ふたりは、彼らが働くその会社で派遣勤めをしているらしい。

年齢は、サトの隣に座るメガネの男が24歳で一番年上。

他は全員23歳だとか

今日子は頭の中で年の差を引き算し、自分が小学1年生の時にこの人たちは中学生だったんだ、などと考え、6つの年の差の大きさを改めて感じた。

そして変なボロをださないように、なるべく大人しくしてやり過ぎそうと身を引き締めた。

そんな風にして話の聞き役に徹していた今日子の目に、少し不可解な現象が先ほどから映っていた。

サトの女友達のふたりが、ひとりの男を巡って露骨な取り合いをしているのだ。

それは今日子の真正面に座る、オカダという人。  
彼ら4人の中では一番少年っぽい目をした、イタズラっ子がそのまま大人になったような印象の男だ。

派遣の女の子ふたりに挟まれた彼は、彼女たちから甲斐甲斐しく世話を焼かれ、まんざらでもなさそうな顔で生ビールを飲んでいる。

今日子は別に、出会いを求めて来たわけじゃない。  
それに人の好みは自由だ。

けれど、なぜオカダだけに人気が集まっているのかが気になった。  
だって、どう見ても今日子の隣に座る新垣の方が男前なのだ。

大人から見れば、ああいうタイプがいい男なのだろうか？

皆の話題に適当に相槌を打ちながら、今日子はチラチラとオカダを観察し時間をすごした。

初めて参加した合コンは、最初こそ全員でなごやかに話していたけれど、途中からはほぼ個人对个人にわかれて、それぞれ？わりあてられた相手との会話を楽しみましょう？という雰囲気に変化していた。

今日子にあてがわれたのは右隣の新垣だ。

メンバーの中で一番今日子好きな新垣が話し相手になってくれている。

その偶然を、今日子は内心ラッキーだと思っていた。

知らない男と話すにしても、どうせならかつこいい人の方がいいに決まっている。

それに加え、新垣は話し上手でもあったのだ。

彼は生まれ育った沖縄を離れ、この町では社員寮にひとり住んでいること。

海と空との境界線がわからないほど青く澄んだ、サイパンの思い出話。

休日にドライブした先で眺めた宇和島の夕陽が、目に沁みるほど綺麗だったことなどを、時にはジェスチャーを交えながら話す。

そんな話の一つ一つが今日子にはとても刺激的で、聞いているだけで自分まで少し大人になった気がした。

新垣の話もひと段落した頃、彼はポケットからごそごそと携帯を取り出すと、

「これ、俺が撮ったんだ」

と言って、赤く丸い太陽が海に沈んでいく画像をこちらに見せた。

そして、ふと耳元に口唇を寄せ、今日子だけに聞こえるように、

「ね？ 今度一緒に見に行かない？」

と囁いた。

『篠原さん。遊び行こうよー！』と、誘われたことならたくさんある。

まるで『体育館に移動しようよー』と同じ風に聞こえる誘いなら。

けれど。新垣の誘いにはそれらとは違うムードが感じられて、今日

子は咄嗟に返事をするのを躊躇した。

いつの間にか彼はテーブルに頬づえをつき、こちらをじっと見つめていた。

答えるのを待っているのか、黙ったままだ。

いくら今日子が子供でも、どうやら自分が狙われているらしいことくらいはわかる。

はりさけそうなほど鳴る鼓動がうるさくて、必死で断る口実を思い巡らすけれど、何も思い浮かばない。

又、思考を邪魔するような新垣の瞳が目の前にあり、フル回転させたい脳も、なかなか思い通りに働かなかった。

「えつと……」

とりあえず時間を稼ぐつもりで呟いた言葉はしかし、直後、サトの隣に座るメガネの男によってかき消された。

「よーしッ！　じゃあ王様ゲームいくぜえ！」

「いええええいッ！」

メガネの号令に従って、皆、「イエーイ！」と腕を高くつきあげている。

「い、いえーい？」

今日子は状況がつかめないままそれに倣い、さっきまでの空気がうやむやにされたことに、胸を撫で下ろしていた。

## 4・合コン2

王様は好きな命令を下すことができる　というそのゲームのせいで、今日子はいまこの場に居ることを本気で後悔し始めていた。

最初のうちは、まだ良かったのだ。

命令の内容は笑える程度のもので、指名されてもさほど苦にはならなかったし、場が盛り上がるのならこんなゲームも悪くはないと思っていた。

それが、いつからだろうか。

気が付けば命令の内容は、明らかにストレスを感じる水準に達していた。

もっとはつきり言えば、回数を重ねるごとに命令はエッチなものに変わり、免疫のない今日子にとって極めて危険なゲームに変貌していたのだ。

今日子は伏し目がちに周囲の顔色を窺い、小さなため息をこぼした。

明らかに、自分だけが浮いた存在だった。

なにせ、男も女も皆、このゲームに何の疑問も抱いていないようなのだ。

キヤアキヤアと女の子達さえ歓声をあげている中で、今日子は必死に神頼みをしていた。

念を入れて神様を拝み倒したあと、引いた割り箸は5番。

まったく、王様マークなんて引けたためしがない。

今日子は手のひらの中に隠した5の数字をじっと見つめながら、胸の内で神様に悪態をついた。

「あ、俺が王様だ！」

一通り全員が引き終わった後、サトの隣にいるメガネの男が頬を緩ませて叫んだ。

この男の手に幸運が転がり込むのは、これで3回目だ。

王様の箸には何か特徴でもあるのでは？ と、疑いたくなる。

とはいえ、ルールにケチをつけるような度胸もなく、今日子としてはただひたすら瞑目し祈るばかりだ。

「じゃあ、3番の人！」

その第一声を耳にした途端、今日子は閉じていた目を開け、ホッと肩で息をついた。

「僕のほっぺにチューしてもらおうかなー」

同時に、心の中でメガネの人間性に大きな×印をつける。

初対面の女の子がいる席で、なんて厚かましい命令を下すのか。

もし言葉をかわす機会があっても、冷たくあしらってやるんだから！と。

そうやってひとりイライラとしているうちに、

「オレ3番だ……」

ハシモトと名乗った男が割り箸を見せ、のろのろと立ち上がった。メガネの期待もむなしく男同士でキスをする羽目になったらしい。

今日子はうなだれるメガネを心の中で笑い、いい気味だとばかりにそっぽを向いた。

そのままつき合い程度に手拍子をあわせ、これに懲りたメガネが終了宣言してくれないものと期待していた。のだが。

「はい、回収ー！ 次いこ、次！」

現実 is 厳しい。

皆に離したてられながらハシモトとのキスが終わると、またもや割り箸は回収された。

今日子は嬉々としてゲームを続ける周囲にうんざりしながら順番を待った。

また割り箸を引き、今日子は4番。

ちよつと不幸そうなの数字に、ぞくりと嫌な予感が走った。けれど。

「キヤアア！ あたし王様！」

運よく、次の王様はサトのようだ。

サトが王様になるのは今日子にとっても都合がいい。女の子だし、ゲスなメガネと違って変な命令もしないに決まっている。

おまけに一番の親友。

こちらの心境をおもんぱかって、きっと優遇してくれるに違いなかった。

今日子はこっそりと、サトだけにわかるように目配せをした。

4回連続で瞬きをしたのは、もちろん自分の番号を教えたい一心からだ。

そのサインはきちんと伝わったようで、サトはウンウンと頷き、こちらに目配せを返している。

良かった。今回は、大丈夫そうだ。

「えつとオ、じゃあ1番の人があ」

今日子は緊張し通しで渴いていた喉を、ジントニックで潤した。

気分はもうすっかり高みの見物だ。

「あ、オレ1番」

正面のオカダが名乗り出たと同時に、脇をかためる女の子達が色めき立つ。

さっきから気になっていたオカダ争奪バトルに動きがでそうだ。

このゲームも外野から観察するだけなら悪くない。

相手がオカダなら……。

あからさまに、そんな表情をしている女の子がふたりもいるのだ。どの番号を口にしたところで、そこそこ盛り上がることは確定している。

なのに。

「4番の人の、耳に愛撫をしてもらおうかなー？」

呼ばれるはずの無い番号が、サトの舌足らずな声で告げられて。まさか、そんなバカな　とサトを見返した時には、エッチな目をしたメガネの興奮した声が部屋に轟いていた。

「エロい命令キター！　4番だれえ？」

今日子は金魚のように口をパクパクさせ、サトに無言の抗議をしてみせた。

しかし時すでに遅し。

番号も、命令も、もう下された後なのだ。

今更却下などできようはずもない。

サトの方もようやく自分の間違いに気付いたのだろう。

今日子の狼狽っぷりを見るやいなや、きよとんとした表情は見る間に硬くなっていった。

今日子は無責任に喜ぶギャラリィ、特にメガネをキツと睨んだ。

ついに回ってきた自分への指名、そしてえげつない命令に、さすがの今日子も憂鬱さが隠しきれない。

とはいえ、誰かを責めて状況が変わるわけでもなく

結局、にわかにはわき起こった愛撫コールの中、もう逃げられないと観念し、今日子はがっくりと肩を落とした。

「あたし、4番……」

「今日子ちゃんキター！」

今日子がどんな気持ちでいるかなど、メガネのような男にはわからないのだ。

周囲のはしゃぐ様子に齒がみする思いで顔をあげると、ふと、正面に座るオカダと目が合った。

彼はニツと挑むように笑って立ち上がり、ゆっくりと今日子の真横に回り込んできた。

ぽっかりと穴のあいたオカダの席の両サイドからは、不満そうな女の子達がこちらを睨みつけている。

今日子としては、代われるものならいますぐにでも代わってほしいところだが、それはきつとできない相談に違いない。

身体を硬く強張らせ、呼吸すら遠慮がちになるほど緊張しながら、隣に座るオカダの気配に身構えていた。

オカダは左頬にかかる今日子の髪をかきあげ、耳の裏に掛けると、小さな声で「いくよ？」と聞いた。

そしてそれに返事をする暇は与えられないまま、その行為は始まったのだ。

突如、もあつと熱い息がかかったかと思うと、急降下するような細かい浮遊感に襲われた。

その後今日子にしか聴こえない大きな音をたてて、舌が耳の中に入ってくる。

しばらくはポーカーフェイスを気取っていた今日子も、未知の感覚の前にあつさりと仮面は剥がされた。

身体がじんじんと熱をもったように熱く、背筋を這い上がる悪寒に、ひとりでは上体を支えきれない。

おまけにそんな今日子の反応を面白がる目が集まって、恥ずかしさのあまり顔から火を噴きそうだ。

結局今日子は終わりのない急降下に耐えられず、

「もうヤダっ」

とオカダをつきとばし、新垣側へと身をよじって逃げてしまった。

途端にオカダの舌から解放されたけれど、高鳴った鼓動と寒気にも似た感覚は、当分おさまりそうにもない。

「あはは、オカダ嫌がられてるじゃん。今日子ちゃん平気？」

「大丈夫？ 今日子ちゃん」

四方から寄せられるさまざまな声に、今日子は曖昧に頷いた。

面白がっていたくせに、と反発したい気持ちはあるが、いまはそこまでの気力がわいてこない。

ただ「はい……」と返事をするにとどまり、今日子はさつきつきとばしたオカダを、やや申し訳ない思いで見やった。

だが、そうしたのも束の間のことだ。

「感じちゃった？」

オカダはからかうように今日子の顔を覗きこむと、ニッと不敵な笑みを浮かべた。

質問の内容だけでも恥ずかしいのに、その上ふたりの距離はキスだつてできそうな近さだ。

そんな風にされたら、せつかくおさまりかけた羞恥も頭をもたげる。鼓動は思い出したように早鐘を打ち、オカダにまで届きそうだ。

「ち、違うよ？」

今日子はかるうじてそう言い、平常心を装うために大きなモーショで瞬きをした。

だけど、オカダは聞いているんだか聞いていないんだかわからない素振りだ。

ふふん、とバカにしたような笑い声を漏らし、自分の席へと戻っていく。

それだけならまだ許せたものを、

「真つ赤だよ？ 可愛いなあ、今日子ちゃん。そんなにヨカった？」  
席に戻るなりオカダはこちらを向いてぷつと吹き出し、「そんなに好評ならオレも頑張った甲斐があるなあ」と、今日子を一層笑い者にしたのだった。

「違つ、つてば！」

今日子は拳をぎゅつとかため、茶化してばかりのギャラリート、その中心にいるオカダに立ち向かった。

なのに、こちらの言い分に耳を貸す人はいなくて。  
今日子がムキになればなるほど盛り上がり、今日子のけっして低くないプライドを傷つけていく。

しかも、その端からまた割り箸が回収されて、ゲームが再開されようとしている。

これが苛立たずにいられようか。

今日子はもう、うんざりだった。  
当たりませんように、と祈る緊張感にも懲り懲りだったし、バカにされて笑い者になるのもプライドが許さなかった。

こんなくだらない遊びにつき合うくらいなら、家でTVでも見  
ていた方が数倍マシ。

そう今日子が憤るのも無理はなかったと思う。

だが、勢いにまかせてバッグを手に席を立とうとした時のことだ。

「つぎ、ラストねー？」

メガネがラスト1回を宣言し、それによって今日子の意思はぐらりと揺らいだ。

これが最後。

そうなると、少し状況は変わってくる。

後味の悪さを残してひとり退散しなくても、あと1回だけ我慢をすれば、場の雰囲気壊さずに済むのだ。

それに、サトのことだってある。

今日子を誘ったのはサトだ。

ここで立ち去ればサトの顔をつぶすことになるのでは

そう考えるとなんだか思い切れなくて、結局今日子は懐の大きい大人のふりをし、ゲームに参加することにした。あと少しの辛抱だから、と自分に言い聞かせながら。

運に見離されているのか、最後まで王様マークが回ってくることは無く、今度は3番。

今日子は肩をすくめて割り箸を眺め、諦めたように深いため息をついた。

ツイていない時はとことんそんなものだ。

後は3番以外の数字が呼ばれるのを祈るしかない。

そう思いつつ薄くなったジントニックを含んだとき、ふとガードが甘くなつた手の中の数字を隣の新垣に見られた気がした。

だけど新垣が王様でもない限り、見られたところで何か害があるわけでもないのだ。

今日子は深く考えることもなくグラスを置き、ゲームの進行を待った。

ところが である。

「あ！ 俺、王様キター」

隣で明るい声があがり、その方向に顔を向けると、新垣が自慢げに王様の割り箸をかざしていた。

「やっべ！ 一番タチ悪い奴に王様いつちやったかー」

メガネがそう呟き、続いて同調するみたいにハシモトが、

「爽やかそうな面していながら、お前一番スケベだもんなあ」

と頷く。

今日子は今更ながら、心許ない気持ちにかられていた。

だって、気のせいじゃないとすれば、新垣は今日子の番号を知っているのだ。

薄暗い部屋には、どこか緊迫した空気が漂っていた。  
しんと静まり返った中で、最後の命令を待つ視線が新垣ひとりに注  
がれている。

## 5・合コン3

「んー、何にしようかなあ……」

新垣の口が開かれる瞬間は、まるでスローモーションのように日子の目には映った。

室内を薄暗く演出しているキャンドルが、わずかな空気の流れに揺らめいている。

その揺らぎが一際大きくなったのと同時に、新垣は飲みかけのソルティドッグを高くかかげた。

「3番の人に、口移しでコレを飲ませてもらおうかな？」

「やだあ！ 新垣さんのエッチい」

自分じゃなくて残念なのか、ホツとしているのか、女の子達が口々に嬌声をあげている。

男達もやれやれと苦笑こそするものの、新垣に命令の訂正を求める気配はない。

そんな中、今日子は、全身の血が沸騰するくらいの怒りを覚えていた。

所詮、これが男の本性なのだ。

たとえ趣味がスキューバでも、いくら爽やかそうに見えても、一皮向けばクラスのサカった男子と一緒になのだ。

新垣を一瞬でもかっこいいと思った自分が、悔しくてならない。

何より、無防備に構えていたのが情けなかった。

当の新垣はその番号の持ち主が誰なのか、知っているくせに知らないふりをしているようだ。

誰だかわからないけれど名乗り出るのを待っています。

そんな風を装っているように見えた。

「お前も好き者だなア。3番だれー？」

ニヤニヤと周囲を見回すメガネの声に、女の子達が「あたし違ーう」と口をそろえる。

違うと言わない人が限られてきた中で、自然と今日子に目が集まっているのがわかった。

なぜこんな形で、見せ物にされなきゃならないのか。

ルールだとはわかっていても、今日子は納得できなかった。

何せキスどころか、異性とつき合ったことさえないのだ。

別に、後生大事に守ってきたわけではないにしても、ちょっと憧れがあったのも確かで、それを思うとひどく情けない気分になった。

鼻の奥がつんと痛んで、涙が出そうだ。

でも、これ以上黙っているのもそろそろ限界。

名乗り出ないと仕方がない。

やけっぱちな気分も手伝って、ようやく今日子が重い口を割ったその時、

「あた……」

「アー、参ったな！ オレだよ」

俯いたまま呟いた小さな声は、目の前の男によってかき消された。

え？

「やだあ！ オカダさんの口移しい？ 写メ撮ってもいいー？」

「いいよー、撮っちゃって」

弾かれたように顔をあげた途端、オカダと一瞬目が合った。

けれど咄嗟には何も思いつかず言葉にならない。そのうちに彼は立ち上がり、さつきと同じようにテーブルを回り込んで、今日子と新垣の間に割って入った。

見上げたオカダの肩越しに、ぼかんとした新垣の間抜け面が見える。仰け反ったオカダの動きで、彼が新垣のグラスの中身を口に含んでいるのがわかった。

今日子の位置からは、オカダの背中に阻まれて何も見えない。けれど、キヤアキヤアと写メを撮る周囲の様子が、いま口唇が重ねられているのを想像させた。

どうして。オカダはなぜあんなことを？

喧騒の中、今日子の胸の内には声にならない疑問が飛び交っていた。

オカダは勘違いをしているのだろうか？

いや、勘違いでなければ、わざわざ名乗り出るわけがないのだ。

今日子はもう一度確認してみようと、手の中の割り箸に視線を落としました。

3番。

何度見ても、今日子の割り箸は3番だった。

オカダの勘違いはまさに天の助けともいうべき幸運に他ならない。しかし、本当にそれでいいのか。

誤解に気付いていながら何もせず、黙ってオカダに罰ゲームをなすりつけた今日子は、すぐそばにある背中を見ることもできなかった。

やがて周囲がざわめき、長い行為の終わりを知った。

「ごちそうさまでしたあ！」

そう言って笑いとばすオカダは、自分の早とちりに気付いた後どうするだろう？

もし新たな犯人探しなんてことになったら、自分はどうすればいいのか。

今日子はこちらを振り向いたオカダの気配に息をのみ、慌ててまつ毛を伏せた。

そして目を合わせることも、呼吸をすることもできないまま、オカダが通りすぎるのをただひたすら待った。

その、直後のことだ。

それはホンの一瞬の出来事。

だけでも、その10倍にも、20倍の時間にも感じられた。

すれ違いざま、オカダは周囲の目が死角になるタイミングを見計らい、今日子の手の中の割り箸を取っていった。

え？

今日子は突然からっぽになった手のひらに呆然とし、やがて跳ねるように顔をあげた。

だけでも、その頃にはもう遅くて。

一瞬だけニツと笑う横顔が見えたつきり、今日子の視線はオカダの背中を追うだけになった。

オカダは、勘違いをしていたわけではなかったのだ。

今日子の番号を知った上で助けてくれたのだ。

気付いてたんだ。と、今日子は口唇だけで呟くと、声に出せない気持ちを喉の奥に押しやった。

席へ戻ったオカダは、女の子達から寄せられた携帯のディスプレイを眺め、自分と新垣のキスシーンを笑っている。生ビールのジョッキを手に、冗談をとばしている。まるで、何もなかったみたいに。

「ねえ、今日子ちゃん？」

「……………え？」

囁きに驚いて振り向くと、新垣がメニューで苦い顔を隠しながらこちらを見ていた。

「今日子ちゃん、オカダ狙いのなの？」

オカダ狙いって、何を言っているのだろう。

まさか、そんなはずないじゃないか、と今日子は戸惑いながら手をひらひらと振る。

「ない、ない！ 彼を狙っているのは、ホラ、アノ子達だし？」

だけど　そうやって話をはぐらかす一方で、今日子は気持ちの波がざわざわと音をたてていることに気付いていた。

オカダ、オカダ、オカダさん、か。

今日子はライムの刺さったグラスを目の高さまで持ちあげ、その向こう側に見える、こちらを見もしないその男をじっと見つめた。

## 6・合コン4

その洋風居酒屋には、今日子達のくつろぐ個室から更に奥まった場所にバーカウンターがある。

南国のジャングルをイメージして造られたそこは鬱蒼と木が繁り、ギリギリまで落とした照明も薄暗く、外の通路から中の様子を窺い知ることはできない。

入っていく客層もカップルばかりで、独特のあやしい雰囲気を漂わす空間だった。

合コンのメンバーは徐々に、バーでふたりきりの会話を楽しむ人と、相変わらず居酒屋スペースで飲む人とにわかれていった。

まず最初に腰をあげたのがメガネとサトだ。

ふたりは外野が口を挟めないほどの親密ぶりを見せつけながら、バーへ移動していった。

つぎに、オカダを取り合っていた派遣社員の内のひとりが、ハシモトとバーへ。

今日子をしつこく誘っていた新垣は、電話がかかってきたらしく席を外し、居酒屋スペースには今日子とオカダ、そして派遣社員のケイという女の子の3人が残っていた。

いまそこでは、オカダとケイがふたりの世界を作っており、その真正面に座ったままの今日子は、ひとりグラスを傾けている。　　といった按配だ。

こんなに狭い、そして薄暗い部屋に取り残されてしまった今日子は、これからどうすればいいのかわからずにいた。

なにせ初めての合コンだ。

バーへ一組消え、二組消え、そして目の前では三組目がいい雰囲気を作っている。

明らかにお邪魔虫だとわかっているけれど、無断で家に帰っていいものかどうかがわからないのだ。

今日子はひとりため息をつき、前の席に座るふたりをこっそりと窺った。

ケイはギャル系で、きついツリ目を太めのアイラインで縁取った瞳が印象的だ。

今夜の合コンに賭けているのか、爪は男ウケの良さそうなフレンチネイルで、着ているワンピースも四国では手に入らないショップの品だ。

そんなケイは、先ほどからずっとオカダをバーへ誘っている。

「ねえ、オカダさん。あたし達も行きましようよお」

そう言って上目遣いで見つめるケイに、オカダも満更ではないのだろう。

「いやあ、オレは生ビール派だからさ。こっちの方が都合いいんだよなあ」

と首の後ろをボリボリ掻きながらも、頬はでれっと緩みっぱなしだ。

今日子は携帯で時間を確認し、あと10分待ってサトが戻らなければ先に帰ろう、と思った。

これ以上居座ってはいくらなんでも迷惑だ。

さつきからケイが職場の内輪話をし続けているのも、多分、今日子をしめ出したいからだろう。

そのくらいは今日子にだってわかる。

ふと今日子は、ケイの話に相槌を打つオカダの、右腕の日焼けに目をとめた。

ビールジョッキを持ち上げた瞬間に腕時計がずれて、日焼けがあらわになったのだ。

右腕だけが特に焼けているのは、車の運転のせいだろうか。妙に筋張っているその腕は、クラスの男子と比べて一回り太さも違うように見えた。

けれど　と、今日子はオカダの表情をじっと見つめる。

笑い方といい、雰囲気といい、オカダはどこか少年のように映るのだ。

眉を片方だけ上げて笑うのは癖なのか、少し気が強そう。いつも笑っているように見える口元は、元々口角が上がった得な形をしているのかもしれない。

そして幼く見える最大の要因であろう瞳は、口以上にお喋りで。

悪巧みを思いついたいたずらっ子さながらにわくわくとした印象を与える。

髪は黒く、ぼさぼさで。無造作に見せながら実は時間をかけた立ち具合なのかもしれない。

薄いピンク色のYシャツにグレーのネクタイは、会社帰りなのだろうか。

襟に社章らしいピンのような物が留められている。

「なあ？」

そのオカダが急にこちらを振り向き、口の端をニツとあげた。

「そんなに見つめられたら照れるだろー？ 今日子ちゃんもしかして、オレに惚れちゃった？」

頬づえをつき、身を乗り出すようにして今日子を窺う。

「なっ……。あるわけないし！ 自意識過剰だっば」

今日子はグラスを掴むと慌ててオカダから目をそらした。

横顔にケイの睨みを嫌というほど感じながら、ジントニツクの残りをぐいっとあおる。

「おいおい、飲みすぎじゃねーの？」

オカダの制止に耳を貸さずグラスをあけた今日子は、トンと音をたててグラスを置き、嫌味なくらいの笑顔を作った。

「別に。じゃあ、お邪魔虫は消えますから。ごゆっくり！」

かっこよく部屋をあとにしたのはいいけれど、今日子は通路に出てすぐ壁に手をつくこととなった。座っているときは平気だったのに、歩いた途端、足元がふらついたので。

壁を手で伝いながら化粧室へと歩く。

途中、隅に置かれたベンジヤミンの植木に躓きかけ、いよいよ自分が酔っ払っていることを思い知った。

まったく、なんてザマだ。

今日子はぶつけた膝を擦りながら苦笑した。

オカダの忠告は、あながち間違いではなかったのだ。ちよっと図に乗って、飲みすぎてしまった。

今日子はようやく辿りついた化粧室に身体を滑り込ませると、洗面台に両腕をつき、大きな鏡を覗き込んだ。

鏡に映った自分の顔は、頬が少し赤らんでいる以外どこも変わりはない。

普段より時間をかけた化粧は、グロスがとれたせいか、あまり濃くは見えなかった。

丁寧に巻いた茶色の巻き髪はまだ崩れておらず、ゆるいカーブを描いて鎖骨に垂れている。

その脇に引っかかったキャミソールのストラップが、細い肩を強調していた。

誰からも、「若く見える」とは言われなかったその姿を、もう一度見直しているうちに、今日子の目は自然と左の耳に吸い寄せられた。左手で耳たぶを触ってみたけれど、あの時のようなぞくぞく感はない。

ふと、脳裏にオカダのからかうような笑顔が浮かんで。

今日子は顔をしかめると、鏡の中の自分に水を引っかけた。

手早く化粧を直したあと、今日子は携帯のメールフォームに、サトへのメールを打ち始めた。

お金は相手持ちだと聞いていたが、黙って帰るのはやはり気が引けるのだ。

覚束ない手つきで短いメッセージを入力し、化粧室を出ながら送信ボタンを押す。

ついでに受信箱をチェックして、届いていたメルマガに一通り目を通していた。その時だ。

「今日子ちゃん、大丈夫？」

ディスプレイに気をとられていた今日子は、通りを歩いてきた人にぶつかって、抱きとめられた。

しかも、運が悪いことに相手は新垣だ。

バーへ執拗に誘う彼が席を外しているうちに帰りがかった今日子にとって、この鉢合わせは間が悪いとしか言いようがなかった。

「え、あ……すみません。よそ見してて」

今日子は携帯を閉じ、新垣から身体を離そうと後ろに引いた。けれど。

「今日子ちゃん、だいぶ足元が危なっかしいね。送ってあげるよ」

新垣は今日子を抱きとめた腕を更に回し、絡めとるように腕を掴んでくる。

「え？ いや、いいです。あたしひとりで帰れるので」

焦って腕を振りほどこうとするものの、それは無駄な抵抗で、今日子はより強い力で拘束され、ずるずると新垣に引きずられた。

「ちよっ……」

精一杯の非難をこめて睨みあげた今日子の目に、新垣の困ったような顔が映る。

新垣はその端正な顔を歪めると、鼻でため息をつき、

「こんな所でみっともないよ。お互い大人だからさ……わかるでしょ？」

と、吐き捨てるように言った。

ここにきて、今日子は本気で恐ろしくなっていた。

キャミソール一枚の背中が、冷房がきいているにも関わらず冷たい汗が伝っている。

飲みすぎたせいもあるだろうが、それだけではない。

怯えた。

いくら大人びて見えても、今日は高校生である。

こんなとき、どうやってはぐらかせばいいのか見当もつかない。

その上、こうしている間にもすれ違つ見知らぬ客は、助けるどころか笑っていて。

それが今日子をいつそうやるせない気持ちにさせたのだった。

合コンなんてくるんじゃないかった。

今更後悔しても遅いが、そう思わずにいられなかった。

こんなところで泣きたくなんかないのに、情けなくも目尻のあたりに涙が滲んでくる。

鼻の奥がつんと痛んで。

そして、最初の一滴がいよいよ零れ落ちそうになった時、その声は背中から聞こえた。

「新垣。その子、オレ予約済みなんだよね」

新垣の、無理に引つ張る腕の力が急に緩んだ。

その反動でバランスを崩した今日子は、のけぞって倒れかけたところを背後から支えられた。

「オカダ……」

ぼそつと呟き、新垣はぼかんと口を開けて今日子の後ろを見ている。その視線の先に、オカダがいることを今日子は知った。

「悪いなー。まあ、そういうことだから」

頭の上からそんな文句が聞こえた直後、今日子は後ろから伸びてきた腕に、やんわりと引き寄せられた。

それは全然不快ではなくて。

胸の前で交差された腕と、背中から伝わってくる体温に、むしろ猛烈な安心感を覚えていた。

根拠なんて、ない。

ただそのぬくもりと力加減は、新垣から感じたような獐猛さを、微塵も感じさせなかったのだ。

引き下がった新垣の後姿が店の奥に消えた後、ようやく今日子は背中の中の男を振り返った。

きっとニヤニヤ笑っているのだろう。

と、予想をつけていたけれど、やはり思った通り、オカダは口の端をあげて笑っていた。

「オレ、ちょっと格好良すぎだなあー。だろ？」

そう言っただけの少年のような笑顔を見せるオカダは、さっきまでの怖さを吹き飛ばすような明るさで。

今日子はその笑顔に吸い寄せられて、お礼を言うのさえ素で忘れていた。

やがて、立ちすくんだままの今日子の髪を、オカダはくしゃっとか

き混ぜ、

「送ってやるよ」

と、ひとりで先に歩き出した。

今日子はオカダに乱された髪を撫でながら、その背中をじっと見つめていた。

店の入り口で立ち止まったオカダがこちらを振り返るまで、ずっと。

7 見上げた夜空（前書き）

## 7・見上げた夜空

その日は雲ひとつない星空で、下弦の月が冴え冴えと白く浮かんでいた。

今日子の数歩前をいくオカダは、道行く人の目をまったく気にしない風で鼻歌を歌っている。

その曲は日本の曲なのか、外国のそれなのかさっぱりわからないけれど、どこか陽気なフレーズで。

両腕を頭の後ろで組んで歩く後姿が、今日子の目にはおおらかそうに映った。

思えば、と今日子はオカダの背中をじっと見つめた。

思えばこの男に、今日は二度も助けられた。

王様ゲームでさんざんからかわれたのには腹が立った。

けれど、あのまま誰も助けられなければ、今頃どうなっていたかわからないのだ。

オカダは恩人。

それは間違いのない事実だった。

「あの……」

今日子は思い切って、オカダのひょうひょうとした背中に声をかけた。

「あの、オカダ、さん？」

名前を呼ぶとオカダは立ち止まり、くるりと振り返った。

きょとんとした表情のオカダがこちらを向いた瞬間、やっぱりアンバランスだ　と今日子は思った。

今日子とさほど歳が変わらないように見える童顔は、ぼけっとした表情が、余計にあどけない印象で。

でも首から下はクラス男子達より線が太く、格好もサラリーマンのそれだ。

「今日は、本当にありがとうございました。色々と助けてもらって今日子はぺこりと頭を下げ、自分を見つめるオカダに愛想笑いを返した。

口下手で無愛想な今日子のわりには、これでも頑張ったのだ。恩人であるオカダに対して、精一杯感謝の気持ち传达了つもりだった。

この時点までは。

オカダは鼻歌をやめ、こちらに引き返してきた。

そして背を屈め、今日子の顔を覗きこんでニツと笑う。

「お前もバカだよなあ。気が無いなら無いでさ、最初からそっけなくしてればいいのに」

連れ出されそうになった今日子の側にも問題がある、とでも言いたいのだろうか。

口の片側を上げて笑うその顔には、同情など微塵も感じられない。

それどころか、文字通り今日子をバカにしている風な口調だった。

今日子はその口利きにカチンときて、オカダに嫌味を言い返すべく言葉を探った。

そもそもこの男も、人のことを言えた義理ではないはずなのだ。

ずっと隣にはりついていていた派遣の女の子を冷たくあしらうでもなく、ご満悦な様子で酒を飲んでいたのでから。

それなのにこうしてオカダが送っているのはケイではない。

もしかすると、ケイは席をたったまま戻ってこないオカダを、いまも待ち続けているかもしれないのだ。

「お、オカダさんこそ！ ケイちゃんを置いて帰って良かったんですか？ ずいぶん親密そうだったのに」

揚げ足を取ってそう言い、今日子はふふんと鼻を鳴らした。

あんただって同じでしょ？ と、暗に含めたつもりだ。

なのに、どうしたことだろうか。

今日子をじっと見つめる奥二重の瞳は、音をたてそうなほどゆっくりと瞬いていて。

嫌味のつもりだった一言は理解されていないのか、今日子を満足させるような反応はまったく見受けられなかった。

やがてオカダは「ああ、わかった」と手のひらを打ち、「オレのこ

と気になるんだ?」と、真顔で訊いてきた。その上、

「そついや今日子ちゃん、ずっとオレのことばかり見てたよな?」  
と自惚れを言っ。

「なっ……悪いけどそれ誤解だから!」

思いもよらないリアクションに、今日子は焦って反発した。

まったく、自意識過剰なものにもほどがあるというものだ。  
どこをどうしたらそんな話になるのか、オカダの思考回路はさっぱり理解不能である。

「とにかく違いますから!」

今日子はなるべく慇懃に言うと、顔をそむけ、ムッと口を尖らせた。  
なのに。

「だって、ヤキモチ焼いてたじゃん」

オカダは相変わらず勘違いをしたままで。  
面白いものでも見るみたいに首を傾げ、今日子の頬を人差し指でつついてくる。

途端に膨らんでいた頬がしぼみ、「ぷうっ」と愉快的音が鳴って。  
それが今日子の高いプライドを傷つけて、激昂させた。

「ちよっとオ! 何よあんた。 もういい、帰る!」

もう、すっかり酔いは引いていた。

それはほんやりしていた頭が冴えてきたわけではもちろんない。

オカダになど、送ってもらういわれはない。

むしろこんな男の話し相手になるくらいなら、ひとりのほうがずっとマシだ！

と、酔いに打ち勝つほどの怒りがわきおこったからだ。

ただ、敵もなかなか手ごわいらしい。

脇をすり抜け、ひとり夜道を歩きだした今日子を追い、オカダは平然と隣に並んでくる。

それだけでも十分鬱陶しいというのに、時折今日子の視界を遮っては、

「今日子ちゃんって、案外ガキっぽいよね。思ったことをすーぐ顔に出しちゃってさ」

などと茶化すのだ。

それがいちいち的を射ていて、今日子の歩くペースをあげさせた。

今日子は、いじられて平然と笑っていられるような性格ではない。

可愛げがないのは百も承知だが、これでもずっと異性からチャホヤされてきた身だ。

バカにされても媚びへつらうような、そんな女になる必要などあるわけがなかった。

今日子は隣のオカダになど目もくれないでどンドン先を急いだ。

どうせ、構ってほしくてからんでいるのに違いないのだ。  
相手をしないまま放っておけば、そのうち諦めてついてこなくなる  
だろう。

そう、思っていたのだ。

今日は近道をするべく、繁華街を抜けた先の公園に足を踏み入れた。

人気がない公園は、ジャングルジムやブランコがひっそりと夜闇に  
佇んでいて。

南から吹く夜風に、木々のざわめく音が少し気味が悪い。

いくら近道でも、ここを通ったのは失敗だったかもしれない。

ななめ前には真っ暗な公衆トイレが見える。

あんな所にもし連れ込まれたら　と、今日は相変わらずついて  
くる隣のオカダを、ちらっと見上げた。

視線に勘付いたららしいオカダが、おどけた視線をこちらに向ける。

反射的にふんつと顔をそむけたけれど、そんな風に気の強いふりを  
していても、内心今日は穏やかではなかった。

実のところ、ちょっと前からつま先が痛くてしょうがないのだ。

けれどここで立ち止まったらどんな目にあつか。

居酒屋では善人ぶっていたオカダも所詮は男だ。  
いつ新垣のように豹変するかわからない。

そう思うと足を止めるわけにも、ペースを落とすわけにもいかず、  
今日子は我慢を押し通していた。

そんな時、ふと、オカダが今日子の前におどり出た。

「足、どうかした？」

「え？」

行く手を遮ったオカダは、一定の距離をあけたまま今日子の足元を  
見ていた。

もしかして、今日子の警戒心が伝わっていたのだろうか。

これまでのなれなれしさから考えると、屈んで足に触るくらいのこと  
とはしそうなものを、オカダは離れた位置から今日子のミニールを  
見下ろしているだけだった。

ムカつく男ではあるが、多分、気をつかってはいるのだ。

今日子はホンの少し気分がほだされて、ううん大丈夫、と返事をす  
る気になっていた。

なのに。

「ムキになって急ぎ足してるうちに痛くなっただらろー？ 無理し  
ちゃって。女の子はもっと素直で可愛くないとモテないよー？」

一瞬はやくそう言ったオカダから、プツと吹き出されて。

今日子はムラムラとわきおこってきた新たな怒りに頬を膨らませ、売り言葉に買い言葉とばかり言い返していた。

「素直じゃなくて悪かったわね！でもお生憎様。言っとくけどあたしはね、男には全っ然困ってませんから！」

意外なことに、それっきり、オカダの足音は消えてしまった。今日子は少々不審に思い、背後の気配に意識を集中していた。

なにせ、おかしい。  
さっきまでずっとついてきていたオカダが、あの一言で立ち止まるなんて。

そう考えれば考えるほど、その疑問は今日子に、あるひとつの仮説を思いおこさせた。

もしかしてオカダは、今日子に気があったのではないだろうか。

だからさっきの一言でショックを受けたのでは？

自惚れとも思うが、否定する要素もない。

そんなあれやこれやに思いを巡らせる今日子の耳に、闇をつんざくような大爆笑が聞こえてきた。

「アーハッハッハ！あたしモテます発言デター！」

近所迷惑なほど豪快な笑い声に、今日子は驚いて振り返った。

オカダは遠目にもわかるほど肩を揺らして爆笑している。

その笑いもさめやらぬまま駆け寄ったかと思えば、呆然と立ちすくんだ今日子に、

「すげえなー！ オレ自分で自分をモテるって言った人初めて見たー」

と言い、一層今日子を侮辱したのだった。

こんなにコケにされたのは生まれて初めてだった。

しかも、男から。

じんじんと痛むつま先から頭のとっぺんまで怒りがつき抜け、胸の奥ではひどい屈辱感が渦巻いていた。

今日子は歯噛みする思いで顔をそむけると、遠くに見え始めた海岸通りを目指して走り出した。

あと少し、もう少しの辛抱で家に着くのだ。

あの通りにさえ出れば、この男とも別れられる。

そう自分を励まして、今日子は最後の力を振り絞った。

「おいおい、走るのかよー？」

背中から不満そうな声と、まだ追いかけてくる足音が聞こえたけれ

ど、

「うるさいっ！ ついてくんな。バカ！ バカ！ バカ！」

今日子はオカダを振り返らないまま、暴言を吐き散らした。

慣れないミュールでさんざんに走った今日子は、海岸通りに出ると、そこがゴールでもあったみたいに座り込んだ。

もちろんゴールはここじゃない。

家はすぐそのカーブを曲がった先にあるスナック。

案外近いのだが、いまはそこまで歩けそうにないのだ。

運動不足のふくらはぎはパンパンに張り、普段よりも一回り太くなつた気がする。

もはや痛いのはつま先だけではなく、靴擦れがどこかにできているのかもしれない。

今日子としては、オカダとこの場でサヨナラしたい気は満々だ。

けれど、颯爽と家路につくには、もう少し体力の回復を待たねばならなかった。

今日子はガードレールに片手をついて、荒い息をくり返した。

駅から家までは普通なら30分はかかる。

今夜はその3分の2で着いているから、このはやさは過去最高記録だ。

オカダと歩いているうちについつい早足になったせいだろう。

オカダは、さっさと帰ればいいものを、ふくらはぎを擦っている今日子のそばでガードレールに両手をついている。

今日子につき合っているつもりだろうか。

夜の海を眺め、鼻歌を歌っていた。

切り取られた爪みたいな細い月が、海にその姿を映している。

黒くうねる波間に、形を変えながらたゆたっていた。

「あっ」

鼻歌が止んだと思ったら、何だろうか。

オカダは急に驚いたような声をあげて、今日子を見下ろしてきた。

「なあ、あれ見て」

今日子の肩をぐらぐらと揺すり、海の上に広がる夜空を指差している。

「はあ？」

意識してそっけない返事を口にしたけれど、今日子は自分を見下ろすオカダの表情に一瞬目を奪われた。

それはまるで、小さな子供が車窓の外でも指差しているようで。

『ねえねえ、アレ見て！』と、誘われているみたいに思えたからだ。

元々、初対面からどこか少年っぽい印象のオカダだ。

まるつきり子供のような、好奇心でわくわくした目を向けられると、それを無視するのも大人気ない気がして。

本来なら冷たくあしらいたいところなのに、つい、つつばねることができなかった。

ふうつと大きく息をつき、今日子は渋々と身を起こした。

オカダの真横から、首を伸ばして夜空を見上げる。

そこには瞬く星がたくさんありすぎて、どれを指しているのかさっぱりわからない。

「どれ？」

「あれだよ、あれ」

説明の足りないオカダに多少苛立ちを感じながらも、今日子はなんとかそのひとつを見極めようと指差した。

「もっと詳しく言ってくれないとわからないよ。あの一等星？」

そして隣を振り返った瞬間、

夜空を指差していたはずのオカダは、今日子の両頬を手のひらで包み込むと、顔を傾けて口唇を重ねてきた。

あつけにとられた今日子は、至近距離にあるオカダの、その閉じられた瞼を凝視していた。

そして呆然としているうちに、やがて口唇は離れていった。

いくら今日子が子供でも、どうやら騙されたらしいことくらいはわかる。

それに一度は免れたはずの、好きでもない男とキスをするという夕子の悪い遊びが、いま現実になったことも。

「お前さあ、目くらい瞑れよなー？」

オカダはまるつきり悪びれていない様子だ。

それどころか苦情めいた口ぶりで注文までつけている。

そんなオカダの平然とした態度が、抜け殻のようにぼーっと立ち尽くしていた今日子の息を吹き返させた。

「あ、あ、あつ、あんた、あんた何すんのよ！」

今日子は脳内で火山が噴火したくらいに血がのぼり、腹が立つやら恥ずかしいやらで呂律が回らなかった。

一方、オカダは相変わらずだ。

動揺の隠しきれない今日子をげらげらと笑い、今日子の神経を逆なでする。

「アツハツハ！ お前真っ赤になっちゃって。意外とウブなんだなあ？」

今日子はぐっと拳を握り締め、オカダをきつく睨みつけた。

そうして気丈に振舞っていても、手足が震えているのが自分でもよ

くわかっていた。

「なっ、何がおかしいのよ。この変態！ あんたも結局新垣と一緒にじゃん」

冷静に言ったつもりの方非難は、今日子の意思とは裏腹に声の上擦り、ただのヒステリックな叫びみたいになってしまった。

それがオカダをうんざりとさせたのだろう。

すっと笑いを引っ込め、オカダはため息まじりの声を出した。

「2回も助けてやっただろー？ 面倒くせー女だな、お前も。いいじゃねーかよ、このくらい」

今日子は、本日最大級の怒りがふつつつとこみ上げていた。

踏みしめた地面から足を伝って、負のエネルギーが体内に取り込まれていくみたいだ。

胸の中ではどす黒いマグマが渦巻いて、噴出し口を求めている。

ひょっとしたら目のあたりから、涙になって流れ出そうだった。

まったく、自分がバカだった と、今日子は口唇を噛み締めた。

こんな事なら、適当にその辺の男と済ませておけば良かったのだ。

17になるまで取っておいたのが間違이었다。

相手なんてその気になれば、いくらでもいたはずなのに。

「ホントお前ガキだよなあ？ 合コンなんだから当たり前だったの」  
口の端をニツと上げて笑うオカダは、罪悪感なんてちっとも感じていない素振りです。  
そんな態度が、余計に今日子を逆上させた。

「もういい、帰る。二度と会うことなんかないだろうけどさようなら！」

手の甲で乱暴に口を拭い、今日子は風を切って歩きだした。

アスファルトに長い影が伸び、カツカツと踵を踏み鳴らす音が夜道に響く。

一発くらい、殴っても罰は当たらなかったはずだ。  
ニヤニヤと笑う、あの横顔を。

けれど今日子は、キスに動揺する自分をこれ以上曝け出さないまま、  
気丈に背を向けることを選んだ。

これ以上オカダの前にいると、喉につかえた塊が、屈辱的な形になってあふれ出そうだったのだ。

大きなカーブの最後の曲線にさしかかり、明かりの灯るスナックの  
派手な看板が目に入った。

あと少し。もう少し と思った時、

「気をつけて帰れよー？」

背中に、オカダの呑気な声が聞こえた。

あの男はどこまですつとぼけるつもりなのか。

一体どの口が言っているのか。

夜道よりも何よりも、オカダのほうがずっと危険だ。

今日子はオカダの声を無視したままカーブを曲がり、小走りに家の灯りを目指した。

返事なんてしてやるつもりは毛頭ない。

振り返るのだって、ごめんだった。

夏の夜風は火照った頬を冷ますのには足りなくて、カラオケの音が漏れ聞こえる家に着いたあとも、当分その熱さに苛まれた。

八つ当たりをしてドアを激しく閉めたあと、バッグをベッドに放り投げ、乱暴に今日子も腰掛ける。

沈み込んだ反動でバッグが床に落っこちて。

そして今日子は名刺のことを思い出した。

今日子はバッグを掴み、逆さまにして中身を全部床に出した。散らばった鞆の中身から名刺をかき集め、指で捲ってみる。

4枚。

全員分あるそれは同じ社名の入った味気ない紙で、裏には手書きで

携帯電話の番号が書かれていた。

ふと一枚だけ、何も書かれていない名刺があつて。

表には　　？岡田啓二？

それがまた余計バカにされた気がして。

今日子はそれをビリビリに破くと、ゴミ箱めがけて放り投げた。

## 8・夏休み前

あの忌々しい合コンから日々は過ぎ行き、相変わらず退屈で少しだけ楽しい日常を今日子は送っていた。

そんな日々の積み重ねはやがて、あの日のことをつまらない思い出の一つへと変化させる。

里美の口から彼らの話題でも出ない限り、いつの間にか合コンのこととは思いつきなくなっていた。

それはともかく。

海も空も眩しいほどの青さで、県立八幡高校はいよいよ明日から夏休みへと突入する。

教壇では担任教師の椎名舞子が、今学期最後のHRで夏休みの注意事項を喋っていた。

「夏休みだからといって羽目を外さないのよ。きちんと学生らしい毎日を心がけるように！」

舞子は、今日子が以前好きだった先輩の彼女にちょっと似ている。

ストレートの長い黒髪は肩に垂らし、前髪はナナメ。

そして女性らしい、やわらかい色使いのブラウスとスカート。

噂によると良家のお嬢様だそうで、そういう雰囲気かスカートの裾から零れている女性だ。

とはいえ、お高くとまった印象はなく、むしろ今日子達のような出来の良くない生徒にも視線をあわせて喋る姿勢が、保護者からも高く評価されていた。

「では、以上。日直は日誌をここに置いて帰ってちょうだい。先生があとで取りに来るからそれでいいわ」

舞子はトンと音をたてて日誌を置いた。

その音が鳴るのとはほぼ同時に、1学期の終わりを告げるチャイムがスピーカーから流れだした。

微妙に高さにズレのある机がガタガタと鳴り、クラスメイト達が帰宅の準備に取り掛かっている。

HRも終わったことだし、今日子も本来なら帰る時間だ。けれど。

「今日子、まさか日直？」

「うん」

1学期最後の日。運悪く今日子は日直である。

里美は口唇を尖らせ、「えー？」と不満そうな声をあげる。

すっかりメガネっ娘を卒業してしまった里美は、あの合コン以来エロメガネに入れ込んでいる。

いまも20歳の設定を維持し続けているそうで、この夏休みは彼らの会社で派遣のバイトもするらしい。

「そんなの放つといて遊び行こうよオ。明日から、あんまり遊べないんでしょー？」

「うん。でも、これやって帰るよ」

今日子は日直をサボるのも、サボる人も嫌いだ。里美には内緒にしているけれど。

もちろん、日直の仕事が好きなのわけでは決していない。ただ、この作業をサボりたいとまでは思わないのだ。

もしかするとそれは、母子家庭で育ったせいかもしれない。今日子にとって家事や雑用といった作業は、さほど苦にならないものだった。

「お祭りのバイト、いつ終わるの？」

夏休みは、毎年今日子は出店のバイトをやっている。

中学生の頃からだから、かれこれ4年目のキャリアだ。

日給は一万円。

短期なわりに給料もよく、そういう意味では重宝しているのだけけれど、ただし市内のお祭りは全部範囲内である。

つまり客としてお祭りに参加することは難しく、お陰でこの数年間、今日子はお祭りを楽しめたことがない。

「花火大会がラストかなー？」

「いつだったけ？ それ。7月31日？」

「かな？ 確か土曜」

そんなわけで、今日子にとって毎年夏祭りは労働の日だ。それと同時に、？好きな人と夏祭りに行ってみたい？というのが、彼女のちっぽけな憧れでもある。

「じゃあ、花火大会あけに連絡するー。　　ってかさ」

里美は廊下にチラッと目をやり、今日子に向き直って含み笑いを漏らした。

「うん？」

「待ってるみたいよ？　カレ」

そう言つて廊下を振り返る里美の視線の先を辿ると、教室のドアにもたれかかる茶髪の後姿が目にとまった。

「もうさ、いい加減つき合つてあげればー？　　見てることちまで切なくなつちゃうよ」

「うーん」

今日子には最近、毎日一緒に下校をする男子がいる。

すでに通算3回告られその都度断り、なのに一向に諦める様子もなく、あのようにして健気に待っているのだ。

「女は追いかけるよりも、追いかけてくれる人に応えてあげる方が、楽で幸せだと思つよ？」

彼　横山泰は、イケメンではないけれど、少し垢抜けている。

制服の着方や、気だるそうな話し方が今日子好みで、現時点ではクラスで一番仲の良い男子、ってところだ。

「じゃ、帰るわ。花火大会終わったら連絡するー。遊び行こうねえ」  
「うん、わかった」

里美が教室から姿を消すと、そこに残るのはもう今日子ひとりきりだ。

今日子はひとつため息をつく、黒板に歩み寄り、早速作業に取り掛かった。

黒板消しさえきれいにすれば、あとは戸締りと、日誌を書くだけで仕事は終わる。

今日子は黒板消しをふたつ取り上げ、窓の外に身を乗り出して、内側同士を叩き合わせた。

もちろんクリーナーもあるのだが、今日子はそれを使うのが好きではない。

吸い取りきれない粒子が表面にこびりついて、きれいになったようには見えないからだ。

今日子は舞い上がるチョークの粉から顔をそむけ、教室の中に入らないようにと窓を閉めた。

そのガラス窓に、いつの間にか教室に入っていた泰の姿が映し出された。

振り返ると、泰は教壇前の机に腰掛けて携帯をいじっているようだった。

きつとゲームでもしているのだろう。せわしなく指を動かしている。

「何？ 待ってんの？」

「あー、うん」

声をかけると、泰は携帯から顔をあげ、細い目を更に細めて今日子を見上げた。

「今日子ちゃんさー、7月31日って暇してる？」

何を言い出すのかと思えば、それはついさっきまで里美と交わっていた会話の内容と似通っていて。

今日子はその小さな偶然に、思わず笑いをかみ殺した。

「花火大会ならバイトだよ？」

「うわ、言う前に断られたあー」

花火大会といえば、この小さな田舎町にとって、真夏の一大イベントである。

高校生ともなればカップルで行く人も多い。

泰は、きつと誘ってくれようとしていたのだろう。

どのみち今日子はバイトが入っていて、都合がつかないのだが。

机に腰掛けたままの泰は、脚をブラブラさせながら、手の中の携帯を折たたんでいた。

その様子は断られたことをどうとも思っていないのか、なんとも自然体で。

口で言うほど残念がっているようには見えなかった。

今日子は、泰のそんな所が好きだ。

誘い方がしつこくないし、断っても明るい。

それは軽薄さと紙一重なのだけれど、今日子にしてみれば気分的に楽だった。

「よし、書けた！」

今日子は日誌に氏名を記入すると、それを教壇の上に置いた。

日直の仕事も、あとは戸締り確認をするばかりだ。

今日子は教室の窓ガラスを全部閉め、そのまま踵を返して廊下の窓ガラスを確認しに向かった。

と、その時。

「夏休みだけでもさー、試しにつき合わね？ 俺ら」

背中に、これで4回目になる告白が聞こえて。

今日子は小さくため息をつく、教壇前の泰を振り返った。

「またその話？ 懲りないなあ」

茶化してそう言いはしても、今日子は明確な返事を口にしないでいた。

ホンの少し前に里美と話をしたからだろうか。

？追いかけてくれる人に応えてあげる方が、楽で幸せだと思うよ？

？と言った里美の言葉を、急に思い出したからだ。

今日子は、相手からの気持ちを受け入れたことが一度もない。

それは好みの問題ではなく、基本的に今日子は、自分が追いかける側の恋しかしたことがないため。

好きでもない人とつき合うなんて、そんな考えはなから持ち合わせていなかったのだ。

けれど、何度断っても諦めない泰に、今日子の気持ちは徐々に懐柔されつつあった。

なにしろ、泰ほど粘る男は見たことがない。

その粘りも方法を誤れば今日子の負担になるのだろうが、それすらなくて。

今日子はいつしか泰の明るさに好感を持つようになっていたのだ。

いつになく返事の遅い今日子の様子は、泰の目にもあと一押しで落ちる風に映ったのだろう。

「俺今日子ちゃん好きだよ？ 本当に」

泰はいつになく神妙な顔つきで、真面目に口説き落としかかった。

さすがの今日子も軽くあしらうことはためらわれ、

どうしよう、試しに夏休みだけつき合ってみようかな。

こんなにも何度も告白してくれるのだから、きつと大事にしてくれるに違いない。

初めてOKの一言を口にしようとしていた。

その時である。たまたま窓から強い日差しが射し込んできた。

雲間から顔を覗かせた太陽が、泰を直撃したのだろう。

彼は顔の前に手を翳し、自分を射る強い光を遮った。

泰の時計の文字盤が、きらりと日差しをはね返している。

広げた手のひらを翳した顔は、口から下だけが見えて

今日子には、半分隠された泰の顔が、知っている誰かとだぶって見えた。

どこかで見たことがある　そんな気がしたのだ。

それが誰だったのか気になって、今日子は泰の手からはみ出している彼の口元を凝視し、記憶の中の誰かをさがした。

ニツと、口の片側だけをつり上げて笑う癖。

それは少し意地悪そうで、よからぬ企みを思いついたようにも見えて。

「眩しっ！」

不意に声を出した泰の、その口唇の動きが、今日子の胸にあるひとりの人物をよみがえらせた。

オカダだ。

今日子ちゃん、と呼ぶ軽い声。

そしてニツと口角を上げる笑い方。

泰は、少しだけオカダに似ている。  
骨格が似ていると声も似てくるのだろうか。

今日子は泰の口元を食い入るように見つめながら、一方で意識は過去の出来事を思い出していた。

バカにした言い草や、今日子の言葉尻をとらえては笑う声。  
そして、騙されて奪われたファーストキス。

そんな　できれば忘れたままでいたかったことの数々が、今日子に思いもよらぬきつい一言を吐かせていた。

「絶対いや！」

「ええ？　ひでーなあ。これはもしやと期待したのに！　あーあ」

言いすぎた、と一瞬ひやりとした今日子は、しかしつぎの瞬間泰が返した明るい口調に救われた。

「これで4連敗かー。二桁までにはなんとかいい返事をお願いしたいんだけどなー」

泰はストーンと机から飛び降り、スポーツバッグを肩にひっかけている。

こんなやり取りの後でも一緒に帰る気は変わらないようで、鼻の頭に皺を寄せて笑い、こちらに向かって歩いてきた。

「泰っていい奴だよな」

思わず他人事みたいに言っていると、泰は「ダメ元の長期戦だからねー。振られたくらいで落ち込んでられないよ」と笑った。

「戸締りOK！」

少し前までの喧騒とは打って変わって、廊下は人影もなく、静まり返っていた。

明日からは、一月以上にもわたる長い休みだ。

つぎにこの廊下を歩くのは、9月。

その時も自分は、いまと変わらず平凡な毎日を送っているのだろうか。

今日子はそんな一月後の自分を想像し、さっきの告白を少し惜しんだ。

オカダに似ている。

たったそれだけの理由で反射的に拒んでしまったけれど。

でも、少しばかり似ているだなんて、気にしなければ済むことだ。

泰はこの通りいい奴で、一緒にいて苦になるタイプでもない。

もしかしたら、つき合っているうちに好きになる可能性だって

今日子はひとり頷くと、胸の中である決意をかためた。

『つぎ、また懲りずに告って来たら、その時こそいい返事をしよ』

「何ひとりでニヤニヤしてんの？ 今日子ちゃん気持ち悪い！」

どうやら勝手に頬が緩んでいたらしい。

今日子は片手で頬を擦ると、「何でもない！」とぶっきらぼうに答えた。

閑散とした校舎に、ローファーとスニーカーの、すこし異なる足音が交互に響いた。

今日子は階段を軽快な足取りで下り、さしかかった踊り場で足を止めた。

今日子の背丈よりも大きな窓の向こうに、真つ青な海と夏空が広がっている。

山際には存在感のある入道雲が顔を覗かせていて、まさに夏本番といった景色だ。

「今日子ちゃん、何してんのー？」

呼び声に振り返ると、泰が階段を下りた先の下駄箱からこちらを見上げていた。

「いま行くー」

今日子は声を張り上げると、階段を駆け足で下り、最後の数段を一気に飛び降りた。

## 9・別れ話

『別れたいの』

高専時代から4年間。

長くつき合った彼女からそう告げられたのは、一月前のことだ。

就職して3年。

将来的には彼女との結婚を考えていただけに、別れ話を聞かされた瞬間には何も言葉が出てこなかった。

何も言わない、反応できない啓二は、彼女にとって好都合だったのか。

あっという間にそれは承諾の意と解され、別れ話は終わった。

4年間もつき合いながら、別れ話はほんの数分間で終わる。

人と人の縁なんて、儚いものだ。と啓二は、元カノからのプレゼントである携帯ストラップを見て苦笑いしていた。

捨てられなかったわけではないが、何となくつけたままだったストラップを啓二は外しにかかった。

そのままデスク下のゴミ箱へと放り投げ、これできれいさっぱり。形として残ったものは、他にはない。

定時である6時半はとっくに過ぎ、残業を良しとしない社風のせい  
か、センター内には遅出の職員が3名いるばかりだ。

啓二は彼らと軽く挨拶を交わし、所属する伊方原発出張所内三号機運転制御室危機管理センターから、廃棄物減容処理建屋や環境分析室を越え、所長室へと向かった。

それはここ一月、じっくりと考えて下した決断を上司に告げるためだ。

「本当にいいのか？ 岡田。行けば最低2年は戻れないが……」  
所長代理である高木はそう言葉尻を濁すと、一旦書類に目を落とし、また啓二に向き直った。

「治安だつて決して良くはないんだぞ。3年前より多少マシになったとは言え、現地の反日感情は、日本人には想像以上のものがある」  
「ハイ」

地球温暖化の影響に伴い、その防止を目的とした最新鋭の大型・高効率プラントの需要が世界中で高まる中、社はその建設ニーズに乗り遅れまいと、海外進出のプロジェクトを進めていた。

更に押し寄せた石油価格高騰の波が、その後押しをする結果にもなり、社はアメリカの大手投資銀行と提携を組むことによって本格的な世界進出に乗り出したのだ。

つまりは時代の波に乗って、日本のモノ作り技術で世界を席卷しよう　　というところだろうか。

なにしろ加圧水型と沸騰水型、主にこの二種類に分類される原子炉

のうち、世界的に必要なの多い加圧水型原子炉の建設は、アジアでは啓二の勤める××重工にしか造営できないのだ。

世界的にみても同レベルの技術を持つのはアメリカのA社のみ。

この降ってわいたような原子炉建設の需要が、社運を賭けた最重要プロジェクトへと持ち上がるのも、無理からぬ話だった。

「とにかく、もっとよく考える。親御さんとも相談した方がいい。お前だって覚えているだろう？ 3年前の暴動を」

高木は書類をデスクに置くと、手にしていた万年筆を胸ポケットに挿した。

その様子はこちらの申し出をはねつけているようにも見えて。啓二はもう一度自分の意思を伝えようと口を開いた。

「もちろん、覚えています。ですが、センターから誰かひとり派遣しなければならぬのであれば、わたしは喜んで行けますよ」

上海市郊外に建造中の原子力プラントへ、危機管理センターから一名派遣せよ。との通達が本社から届いたのは1週間前のことだ。

その人選に、高木が頭を悩ませているのを啓二はよく知っていた。

なにしろ、世界最多の人口を擁する中国だ。

その中でも上海市は人口1600万人を超え、万が一現地の労働者とトラブルでも起こそうものなら、たちまちそれは巨大デモへと発

展する。

3年前の反日デモでは、上海支社が数万人の暴徒に囲まれ、未曾有の被害を被った。

いまは幾分か落ち着いて見える反日感情も、政治的な状況次第ではいつ急変するかわからない。

そんな事情もあって上海行きを敬遠する職員は多く、希望者を募った高木の提案に、我こそはと名乗り出る者はひとりも居なかったのだ。

そして啓二はいま、その誰もが目をそむける上海行きの椅子に名乗りをあげたのだが。

高木は窓の外に視線を移し、タバコに火を点けようとしていた。窓ガラスに映ったその口元は笑いを含んでおり、何を考えているのか読みとりづらい。

「なあ、岡田」

高木は啓二が入社した当事の直属の上司で、啓二にしてみれば仕事のほとんどを教わった先輩でもあった。

おまけに啓二とは同郷の生まれだ。

そんな縁もあってか、高木は昇進したあとも変わらず、啓二を呼びつけては軽口をたたくことも多かった。

「お前、彼女に捨てられてヤケになってるんだって？ 計算機室の女の子達が噂話をしていたぞ」

そう言つて高木は、さも面白そうに笑い声をあげた。

「また余計な情報を仕入れたもんですね。まあ、当たらずとも遠からず、ですが」

「何でも、お前を励ますための合コンまでしたんだとか？ いい娘はいたか？」

「もういいですよ、その話は。何もいやしませんって！」

啓二は笑いながら話を遮り、「とにかく、上海行きは自分にお任せ下さい」と強調した。しかし、

「そうか？ 噂では岡田が女の子を持ち帰つたと聞いたが」

高木はその話題をまだ引つ張るつもりなのか、それとも上海の件から話をそらしたいのか、しきりに噂話を持ち出しては可笑しそうに笑つ。

まったく、お喋りな奴がいたもんだ。

何が合コンだよ と、啓二は苦虫をかみつぶした。

名目上は？啓二の失恋を慰める？という企画だったが、当の本人にはその気が無く、合コン好きの新垣に口実として使われたに過ぎないのだ。

それに、揃えられたメンバーはそのほとんどが関係者であり、知らない顔といえはふたりだけ。

外野からは持ち帰ったように見えるのかもしれないが、実際にはその後、連絡を取り合えるような繋がりも持っていない。

「残念ながら本当に、何も収穫なんてありませんでしたよ」

いい加減合コンの話はうんざりだ。啓二は不貞腐れ、顔をそむけた。けれど

「だから、日本には未練ないんです　ってことか？」

やたらと落ち着きはらった調子で高木に言われ、それがなまじ間違いでもないだけに、啓二は返答につまった。

高木は組んだ両手の上に顎を置き、啓二を目だけで見上げていた。

「とにかく、お前はまだ経験も浅い。あの件は、5年以上のキャリアを積んだ職員が望ましい　という補足付きだ。こっちで考えるな」

「希望者優先では！？　誰だって行きたがりはしないでしょう」

思わず気色ばんだ啓二に、高木は手の動きをあわせて「落ち着け」と言い、まだ長さの残っているタバコをもみ消した。

「まあ、もう少し待つき。こちらとしては、できればお前を残したいんだ。派遣の女の子達も悲しむしな？　あっはっは、まあ退がれ」

高木はこれでこの話は終わりだ、とでも言うみたいだ、他の建屋へと無線を繋いでいる。

その目は机上の書類に向けられ、もうこちらを振り返りそうにはな

かった。

佐田岬の端に位置するここ 伊方原子力発電所は、四国の一番西。地図上のひよろつと細長く伸びたところだ。

原子力発電所が構えられる地の例に漏れず、ひどい僻地で、辺りには民家も商店もさほどない。

それはもちろん、地域住民から放射能汚染を恐れられるのが一番の原因だが。

そういった様々な要因も手伝って、職員の多くはマイカー通勤をしている。

啓二もその内のひとりで、隣の八幡浜市から毎日数十分かけて通っているのだが、いつもは鼻歌まじりに車を走らせる国道も、今日はむしゃくしゃとした気分のままだ。

真摯な気持ちから下した決断を、合コンの話にかき回され、無かったことにされたのが啓二としては納得いかなかった。

確かに、日本に未練がない、というのはその通りだ。

理由の一つに、元カノのことがあるのも否定はできない。

けれどそれ以前に、この国には啓二を引き止めるべき理由が何も無いのだ。

啓二は少年時代に父親を事故で失ってからは、母親とふたりきりの

母子家庭だった。

そんな母親も啓二が中学生のときに再婚をして、いまでは別の温かい家庭を築いている。

兄弟もいなければ、親戚らしい親戚もおらず、高専進学から家を出て寮暮らしを続けていた啓二には、母親でさえすでに遠い存在だった。

その上、彼女との別れ。啓二はたまに、自分自身の孤独さに笑いが漏れそうになることがある。

『啓二、ごめんなさいね。両親が原発勤務の人は止めた方がいいと言っの』

不意に、元カノから一方的に告げられた別れ話を思い出し、啓二は顔をしかめた。

『放射能、一般の人よりもたくさん浴びてるのでしょっ？ そっういう人は癌にだってなりやすいし』

元カノが別れ話を切り出した一番の理由は、啓二の仕事に対する不満だった。

彼女は所謂、いい所のお嬢さんというやつで、3年前、いまの会社に就職を決めたときから、啓二の職種を毛嫌いしていたのだ。

原子力発電所に勤務するということ。

それは当然、普通よりも多く放射能を浴びるということに通じる。

『啓二のことは好きだけど、仕事はちょっと、ね。結婚するに

は危険すぎるとわたしも思うの』

いくら職種を嫌われようと、一度は結婚まで考えた相手だ。厳しいことを言われたのは確かだが、啓二はいまもわずかに未練を引きずっていた。

「上海、行きたかったんだけどなあ」

啓二は次々と浮かんでくる元カノの声を振り払うようにアクセルをふかし、ひとり言にしては大きな声で呟いた。

車は伊方町を抜け、八幡浜市へと入っていた。

市街へと進むにつれ、開け放った窓から流れ込む風に、強い潮の匂いが混ざりはじめた。

この辺の国道は田舎町なことあって、渋滞など滅多にお目にかからない。

それがどうしたわけか、今夜はやたらと流れが悪くて、啓二はイライラと車線の前を見やった。

どうやら本格的に渋滞しているのか、奥に見えるカーブの先まで赤いテールランプが連なっている。

「うぜえな、事故かよ」

啓二はそうばやくとシートに深く背を沈め、首の裏側で両手を組んだ。

そしてフロントガラス越しに夜空をぼんやりと見上げた時だ。

突如、耳をつんざく轟音が闇を裂いて、

「おー！　なんだ、花火大会か」

フロントガラスいっぱいに咲いた十号玉が、さっきまでのモヤモヤとした気分をどこかへはじけとばしてくれたようだ。

最初の一発が打ち上げられると、その後は立て続けに花火があがり、暗闇に閉ざされていた世界は、急に明るいものとなった。

啓二はシートから身を起こすと、ハンドルを切ってわき道に車を進めた。

お祭りごとは子供の頃から大好きなのだ。

どこか停められそうな場所を探して、この夏の風物詩を存分に体感したい。

そう、思っていた。

## 10・予感

花火大会の始まりを告げる一発目の轟音が鼓膜を震わせてから、そろそろ10分が経過しようとしていた。

今日は狭いブースの中、時折空を見上げてはため息をついていた。なにせ、今年は運が悪い。

与えられたブースの場所は丁度出店通りの中間地点で、両脇も真正面も同じ作りの屋台がひしめいている。

隙間無く埋め尽くされたビニール製の屋根が視界を遮り、空は小さな四角形に切り取られた黒い切れ端のようだった。

その切れ端に運良く花火があがることもなければ、火薬の匂いが漂ってくることもない。

もしかすると匂いは流れてきているのかもしれないが、なにしろ両サイドを焼き鳥屋と焼きとうもろこし屋に挟まれているのだ。

現状としてはただ、打ち上げられた音が耳をつんざくのみ、であった。

それでもついに空を見上げてしまうのは、もしかしたら、という期待を捨てきれないからだろう。

今日はまたひとつ大きなため息をつく、指先でタライの中の缶ビールを転がした。

全部で4つ。

売れ残った缶ビールは砕いた氷の浮かぶ水の中に、横たわっている。恒例になった夏祭りのアルバイトだが、今日に回されるブースはほぼ毎年ビール売りだ。

今夜は息をするだけで汗が吹き出る熱帯夜で、ビール売りとしての出だしは最高だった。

まだ西日の残るうちから立て続けに売れ、ノルマ100本の内60本があつという間になくなったのだ。

このペースを維持できれば、花火があがる頃には完売するかもしれない。と、今日子は期待していたのだが。

「はあ……」

指で弾いた缶ビールがごろんと重たげに向きをかえ、黒いラベルを水面にさらす。

いくらため息をついても、4本ある缶が減るわけではない。

この売れ残りを消化しないことには、今日子は持ち場を離れられないのだ。

「今年の花火大会も、音を聞くだけのイベント、か……」

今日子は不貞腐れ、誰に聞かせるわけでもないひとり言を呟いた。ブースから身を乗り出して通りの左右を窺っても、小さな子供と母親らしき女性の二人連れしか見えない。

考えてみれば当たり前だ。

せっかくの花火大会。

誰だっで見晴らしの良い場所へ移りたいに違いないのだから。

今日子は売れそうにもないビールに目を落とし、口唇を尖らせた。そして、水ばかりが目立つようになったタライに氷を追加しようとした時に、ポケットの中で携帯が震えているのに気が付いた。

ディスプレイに表示された名前は、ある意味今日子の予想通りともいえる相手だった。

メール受信 1件 横山泰

『バイト、頑張ってる？ こっちは家のベランダから花火を見上げてるよ。出来れば一緒に見たかったなあ。来年こそは一緒に見ようね。予約！』

普段は絵文字だらけのことが多い泰からのメールは、今回に限ってそのどこにも軽さが感じられなかった。

「参ったなあ……」

今日子は文字を目で辿ると、ふうっと息をついた。

これは、遠まわしな告白なのだろう。

返事次第でふたりの関係が変わるのだから。

今日子は携帯を閉じることも返信を送ることもせず、心の中で？追いかけてくれる人に応えてあげる方が、楽で幸せだと思っよ???

いう里美の台詞を反芻していた。

それでは、泰とつき合えば幸せになれる、ということになるのだが。

今日子の正直な気持ちでは、泰に対して特別な感情は何もないのだ。単に、一番接しやすい男子。ただそれだけの存在。

でも、彼とつき合うことに不快感があるわけでもなくて。

高校2年にもなってカレシさえいない現状が淋しくもあり、今日子の中では次第に、？試しにつき合ってみれば？？という思いが強くなっていたのだ。

「よし、つき合ってみようかな」

今日子は迷いを捨て、早速返信を送るつもりでメールフォームを出した。

ディスプレイがやたらチカチカとして見づらいのは、屋根から下がった裸電球のせいだ。

今日子は入力しやすい角度をさがし、身をよじって灯りを避けようとしていた。

と、その時である。

「あれ？ お前久しぶりだなあ。こんな派遣の仕事もあるんだ？」

急に携帯を握る手元に陰が落ちて、

「い、いらっしやませー！」

今日子は慌てて携帯を閉じ、ブース越しに立つ客に向かって笑顔を振りまいた。

けれど、そこに立っていたのは

「よう！ やっぱりお前か」

無造作にはねた髪は、変色していない黒髪。

奥二重の、少年っぽい眼差しは笑いを含んでいて。

口の端を片側だけ上げた笑顔は、いたずら好きのガキ大将が悪巧みを思いついたときみたいだ。

「おっ、おっ、オ、カダ」

今日子の手元に影を落とすその客は、どこからどう見てもオカダその人だった。

「何だよー。感動しちゃった？」

そう言っつて、今日子を覗き込んでくる不遜な態度は、あの合コンの夜とまったく変わらない。

「そーかそーか、言葉も出ないか。運命を感じちゃったりしてんだろー？」

口を開けばいい加減なことばかり飛びだすところも、相変わらずらしい。

今日子はしばらく絶句していたけれど、そのうちにハツと我に返った。  
ポーっとしていたら、それこそオカダの思う壺。好き放題にバカにされ、笑われるのは目に見えている。

「ば、バカじゃないの？ 何であたしが、あんななんかに」

今日子は携帯をポケットにねじ込むと、ブース越しにオカダを睨みつけた。しかし、

「うけるっ。急に元気になったかと思えば憎まれ口かよ。キスマでした仲なのに！」

忘れたいアヤマチを、いきなり大きな声で暴露されて。

そのせいでブースを取り巻く同業者たちから一斉に振り向かれ、今日子は周囲の目が気になって、睨むどころではなくなってしまった。

「ちょ……！ あんた、こんな所で変なこと言わないでよ！」

この男には羞恥心がないのか、と、今日子は苛立たしさに口唇を噛んだ。

無意識のうちに握り締めていた手のひらは、内側に爪の痕がくつきりつついているはずだ。震えるほどに強く、拳をかためていた。

「だーって、ホントにしたじゃん？ それはそうと、ビール売ってよ」

オカダは今日子の都合など気にもとめていないのか、まったく意に介さずといった様子で。

氷水の中に転がるビールを物色しながら、気の抜けた声を出してい

た。

そんなオカダの、如何にも大したことではないとでも言いたげな物言いが癪に障り、今日子は思うよりも先に口走っていた。

「あんだなんか売る物は何もないってばっ！ 帰れ！」

それは、やたら甲高く響いて。今日子は一層注目を浴び、居心地の悪さに肩をすくめることとなった。

背を屈めてタライの中を覗き込んでいたオカダは、今日子の怒鳴り声に顔をあげた。

その表情は、まるで鳩が豆鉄砲を食らったみたいだ。

謝る必要なんてない。

失礼なのはこの男だって同じだ。と、今日子は胸の中で自分の正当性を数えあげた。

けれど、それでも沈黙の時間が長くなるにつれ、言い過ぎたような気になって、

「あ、あの……さっきは……その、」

売り子としては不適切な対応だった。と自分に言い聞かせ、今日子は百歩譲ってオカダに詫びようとしていた。

なのに、

「油断大敵！」

口を割った途端、急にタライの氷水を浴びせかけられ、

「何すんのよー！ 心臓がつ、止まるかと思ったじゃないの！」

さっきまでの殊勝な反省はどこへやら、だ。

オカダの悪趣味ないたずらのせいで水浸しになった今日子は、腕でぐいっと顔を拭くと、再び臨戦態勢に入っていた。

「もうっ、ムカつく。早く消えてよー！」

いい大人のくせして、なんて子供なんだ。

こんな奴に頭を下げようとしていたなんてどうかしていた。と、今日子は怒りに目をつり上げ、頬を膨らませた。

けれど、オカダはこちらの怒りなどお構いなしといった具合で、

「なあ？ もしかして、これでラストだったり？」

悪びれずに、売れ残りの缶ビールを指差してくる。

だから何？ あんたに関係ないでしょ？ 今日子はそう言いかけて口をつぐんだ。

なにせ、意地悪なオカダのことだ。

もしかすると『あー！ ナンパされると思ってたんだ？ 自意識過剰すぎ』などと揚げ足を取り、また今日子を茶化す魂胆かもしれない。

でも、と今日子は過去の経験を省みた。

この手の問いかけの後、続く言葉は大体いつも同じなのだ。

「全部買ってあげるよ。だから遊びに行こう」

十中八九、そんな誘い文句を寄こしては、無理に連れ出そうとする。売りにナンパを仕掛けるセオリーみたいなものだ。

オカダはどういうつもりでそんなことを聞くのか。

今日はその意図を量りかね、彼の表情をさぐった。

けれど、返事を待つオカダは、あの夜空を見上げたときと同じ、好奇心にわくわくとした眼差しを向けていて。そこに特別な意図など何もないように見えて、

「うん……」

気が付けば、今日子はバカ正直にそう答えていた。

途端、オカダの瞳が眩しそうに細められ、形の良い口唇が開かれるのが見えた。

「じゃあ、オレが4本とも買ってやるよ。一緒に花火見よーぜ」

オカダはブース越しに身を乗り出し、今日子に真っ直ぐ手を差しのべてくる。

そして次の瞬間には、今日子の手は強引に引かれていて、一方的に

握られた手の先からオカダの熱い体温が流れ込んでいた。

オカダは無邪気な笑顔を残したまま背中を見せ、人通りのまばらな出店通りの、そのトンネルの出口へ向かって走り出した。

視界がひらけた瞬間

地の底から震えるような轟音が、夜空に大輪の花を咲かせた。

ジリジリと爆ぜる一瞬の閃光が、二人の横顔を照らしていた。

## 11・花火

迷いのないオカダの腕に引っ張られ、今日子は前に行くその背中を、無我夢中で追いかけていた。

途中何人もの見物客にぶつかっては、その度に睨まれて、けれど頭を下げるより先に、引かれる腕に導かれ、また人波をかくぐるといった状態が続いた。

その間も汗ばんだ手の内側が気になって。今日子は掴まれた指の先に、じんじんと熱がこもってくるのを感じていた。

「もーダメ。ここでいいじゃん」

やがて、人気のない堤防にたどり着いた頃、今日子はよれよれになつて音をあげた。

そのまま腰を下ろし、夜空を見上げる。

オカダも汗をかいたのか、座り込んでシャツの胸元をバタバタと扇いでいる。

息が切れていたのは、お互い様のようだ。

今日子だけではなく、オカダも肩を大きく上下させていた。

「なあ？ やっぱ花火サイコーだよなあ」

まだおさまらない乱れた息と花火の轟音に紛れて、隣からオカダの声が聞こえた。

次々と打ち上げられては、それが消えていく前に上からまた被さって咲く花火。  
光が、音が、上塗りされていくごとに、その代償としてたちこめる火薬の匂い。

今日は風に流されてきたその匂いを胸いっぱい吸い込んで、隣のオカダに笑いかけた。

「最高だよね」

オカダはごろんと仰向けに寝転がり、腕を枕にして夜空を見上げている。

そうしてパノラマ鑑賞をする彼は、仕事帰りなのかネクタイ姿のままだ。

まったく変な人だ。

いい大人がこんなところで寝転ぶなんて。

服が汚れるとか、虫がいるかもとか、思わないんだらうか？  
と今日はオカダをいぶかしみ、まじまじと眺めていた。

なのに、

「ホラ、お前も遠慮せず寝転べよ！」

羨んでいるとでも勘違いされたのか、オカダに突然腕を引かれて。今日はバランスを失って背中から倒れこみ、コンクリートの地面にしたたか肘をぶつけた。

「痛つ……。何すんのよ、あんた」

「ハイハイ、いいから。花火見ろってば」

すっかりオカダのペースに巻き込まれている今日子は、恨みがましい目で彼を睨んでいた。

が、間もなくあがった十号玉に、用意していた憎まれ口はのみこまされた。

背中に伝わる振動が、ひどく臨場感を煽る。

視界を邪魔するものが何一つない夜空に、大きな花火がいま、あがった。

「すーい！」

「だろー！？ 寝転んだ方が楽しいだろー？」

その少年のような口調に誘われて、今日子は隣のオカダを盗み見た。

まるで夜空に笑いかけているような笑顔の下に、ぼっこりとつき出た喉仏。

格好はどう見ても仕事帰りのサラリーマンで、合コンの時だって、確か23歳だと言っていたはずなのだ。

まぎれもなく、大人の男。

それはわかっているのだけれど、なのに何故だろう。

オカダといると、まるで子供と一緒にいるような気分させられる。そして気が付けばいつもペースを乱されているのだ。

「何だよー？ そんなに見つめられたら照れちゃうだろ？」

横顔を見せたままそんな風に言われて、今日子は咄嗟に飛び起きていた。

まさか盗み見に気付かれていたとは。

恥ずかしくて、いてもたってもいられない気分だ。

「み、見つめてなんていないってば！ あたしはね、あんたを監視

そう。監視してただけなんだから！」

自分で口にしながら、何だかおかしな言い訳だと、今日子は内心バツの悪い思いをしていた。

けれど、ここで意見を引つ込めるなんて、気の強い今日子にはできないのだ。

オカダも今日子の言い分を不審に思ったのか、頭の下で組んでいた腕を手枕にして、身体ごとこちらに向き直っている。

「はあ！？ 監視って何が？」

「だ、だって。あんたは人を騙してキスするような男だし？ 用心しなきゃじゃん？」

言った端から、今日子は口にしたことを後悔していた。

これじゃあまるで、もう一度キスをされたがっている風に受け取られかねない。けれど、

「うは、お前ホント面白れー奴だな！　アー、苦しい」

途端に、オカダから爆笑されて。

そんな風にバカにされればされるほど、無性に腹がたってきた。今日子は一体何がそんなにおかしいのか、と、無意識のうちに頬を膨らませていた。

「何がおかしいの？　本当のことじゃん。人をバカにするのもいい加減にしてよっ！」

声をはりあげて不快感をあらわにしても、手ごたえは感じられない。オカダは尚もくっくくくと声を漏らし、身をよじるようにして笑っている。

「……ちよつとオ、」

今日子はついにつむじを曲げ、こんな奴も知らないとはかりに無視を決めこんだ。

そもそも、相手をするだけ損だ。

いくら注意を促しても逆にそれを面白がり、つけあがるだけなのだから。

そんな今日子の無視作戦が功を奏したのかもしれない。

「あー、ごめんごめん。だってさあ、あんまりカワイイことを言うもんだから」

オカダは反動をつけて起き上がり、機嫌を取るみたいに今日子の顔を覗きこんできた。

「まだ怒ってんの？」

今日子は身体ごとそっぽを向き、うんともすんとも言わない。

返事しない、と決めていたのだから当然　　なのだが、

「ところでお前、ビールは？」

「あーーーーー！　忘れてたっ」

急に現実に取り戻されて。

気が付いたときには、今日子はオカダを振り返り、普通に反応してしまっていた。

突如、心の奥さえ震わせる低い轟音が轟き、ふたりの横顔を照らしだす、今年最後の花火があがった。

パチパチと弾ける粒子がいくつも尾を引いて落ち、夜空を金色に輝かせる。

「やっぱラストは、これだよなあ？」

不意にオカダが、そう呟くのが聞こえた。

「だよねえ」

今日子も夜空から目をそらせないまま、ため息まじりに言った。

しなる柳の枝みたいに腕を広げたその花火は、夜空にしばらく姿をとどめていた。

今日子は最後の粒が消える瞬間まで、瞬きもせずに見つめていた。

## 12 崩れたプライド

花火大会が終わると、潮が引くように人の群れも引いていった。

中身の溢れかえったゴミ箱や、まだ灯りを消せない出店のテントが、祭りのあとの侘しさを一層際立たせる。

時刻はまだ宵の口。

それでも田舎の夏祭りは案外あっさりと終わりを告げるもので、ふと気が付けば祭囃子の笛の音も途切れていた。

今日子は持ち場のブースに戻り、テントの解体作業に取り掛かっていた。

ピーク時は結構な盛り上がりを見せた出店通りも、すでに閑散とし、いまは今日子と同じくブースの解体に取り掛かる業者の姿が目立つ。今夜は風が湿っているせいかやたらと暑くて、今日子のこめかみにも、オカダのうなじにも、玉のような汗が浮いていた。

それにしても　と、今日子はそばに屈みこむ、オカダの背中に目を落とした。

一体どういつつもりなのか、オカダは一向に帰る様子もなく、本来ならば今日子がひとりで片付けるべき作業をずっと手伝っているのだ。

今日子にしてみれば、それはもちろん有り難いのだけれど。でも、謝礼を払えるわけでもないのに　と、気がかりでしょうがなかった。

腰を屈めて力仕事に勤しむオカダの首には、もうネクタイは見られない。

シャツの背中も薄汚く埃にまみれている。

後ろからは見えないが、きつと胸元もボタンが外されているのだろう。襟の辺りがくつろいでいるようだった。

半袖のシャツから伸びる日焼けした腕は、今日子だけなら軽く2時間ばかりかかる解体をあとという間に終わらせていく。

今日子はその、積み上げられていくブースのパーツを、半ば呆然と眺めていた。

「なあ？　バラした後はまとめるだけでいいの？」

不意に、オカダが振り返って。今日子は慌てて作業に移ると、何でもないふりをして答えた。

「うん。積み上げておけば、明日業者が取りにくるの」  
けれど、

「また見てただろー？　お前、オレのことがそんなに気になる？」  
盗み見はまた見破られていたらしい。

焦燥を煽られ、今日子は耳のふちが熱くなるのが自分にでもわかっ

た。

「濡れ衣ですー。大体ね、あんた自意識過剰すぎんよ。なんであたしがあんたを見なきゃいけないの？ 逆ならわかるけど。あたしにしてみればあんたなんてね、空気みたいなもんなんだってば！」

当のオカダはニヤニヤと笑うばかりだ。

そんな態度が火に油を注ぎ、今日子を余計感情的にさせる。

「本当だつてば！ あんたなんてね、空気と一緒にするのさえ空気に失礼なくらいなの。空気は大切だけど、別にあんたいなくてもあたしは困らないし、なんならいますぐ帰ってもらっても平気なんですー！ 帰れば？」

オカダは聞いているのかいないのか、最初のうちこそ身体は今日子のほうを向いていたけれど、途中からは完全に背を向けてクーラーボックスを漁っている。

「ちよつと、聞いているの？」

別に聞いていなかったところで、どうだって構わないのに。言いすぎなのに。

今日子は立ち上がるとオカダの方へまわりこみ、ムキになって絡んだ。

途端、オカダがこちらを振り返って、ほらよ、と今日子に冷たい缶を差し出してきた。

「もう終わりだろ？ 労働のあとはビールと決まってるよな」

手の中に押しつけられたビールは表面に汗をかいていて、今日子の手のひらをしつとりと濡らした。

「あつちで飲もうぜー」

立ち上がったオカダはまるつきり聞き流しているといった風で、花火を見た堤防のあたりを指差している。

その瞳はやっぱりわくわくとしていて、これから何か面白いことがはじまるとでもいうような表情で。肩すかしを食らった今日子は、それつきり二の句が継げられなかった。

今日子はオカダの指した方を見やると、また視線を手の中のビールに戻した。

きつとまた、ガキだとか思われているのに違いない。

実際その通りなのだが、煽られたらつい反応してしまつて。余計な一言まで口にして、時に人を傷つけるところは、今日子自身ももっとも嫌悪する自分の短所だった。

本来なら、片付けを手伝ってくれてありがとう、と言つべきなのだ。

わかっているのに、すぐには素直になれなくて。

さんざん悪態をついた手前、バツが悪くて、どんな顔をしていいのかもわからない。

今日子は手の中のビールを転がして、中途半端に沈黙を守るしかできなかつた。

「つたく。ホラ、行く」

オカダは、いつまでも俯いたままの今日子にじれたのか、それともいきづまった今日子に助け舟を出したつもりなのか、強引に腕を掴んできて、そのまま今日子を連行するみたいに堤防に向かって歩き出した。

やがて、腕を掴んでいたオカダの手がゆっくりと下に滑ってきた。

それは手のひらで止まり、今日子は組み合わされて初めて手を繋がれたことに気付いた。

繋がれた手の先から、火照った熱がじわじわと広がっていく。心が揺れて。鼓動の高鳴りが加速をつけてあがっていった。

やばい、これじゃまるで恋みたいだ　と、今日子はもう一方の手に握ったビールを、強く頬に押し当てた。

信じられないけれど、本来ならあるはずがないことだけれど、今日子はオカダ相手にときめいてしまっていたのだ。

そんな自分自身の変化を必要以上に意識してしまうのは、きっと今日子のプライドの高さゆえだろう。

今日子は繋がれた手を振り払うことも、握り返すこともできないまま、嘘だ、そんなはずはない、と、必死に自分の気持ちをご否定していた。

けれど、それは加速をつけて坂道を転がっていくみたいに。

一度傾いてしまった気持ちは、今日子自身でさえ抵抗できない強さで、全部を押し流していったのだ。

堤防が近づくにつれ、海風が強まった。

オカダの髪が揺れて、シャツの背中も風を孕んで、大きく膨らんでいた。

後ろをついていく今日子の前髪も捲れあがり、おでこが全開になっている。

ふたりは堤防に出ると、そこから階段を下り、奥に見えるボート小屋を目指した。

互いにブースの撤去作業をした後だ。

埃まみれに違いない手の内側は、どこかじゃりじゃりとしていて。

その感触が、今日子の胸に古い記憶を呼び覚ましていた。

それはとっくに顔も思いだせない、父親との遠い思い出である。

「よづし、ここらで飲むか」

ボート小屋の手前で立ち止まり、オカダはスポンが汚れるのもお構いなしといった様子で砂の上に座り込んだ。

そのままビールのタブをあけ、お疲れ、と乾杯のポーズを取っている。

今日子も少し間をあけて座り、オカダの缶にコツンと自分のそれを

ぶつけた。

オカダはよほど喉が渴いていたのか、その後は一気に缶をあおり、美味しそうに喉を鳴らしている。

今日子はそんなオカダの飲みっぷりを横目で窺い、自分も缶に口をつけた。

「なあ、お前さ？」

「え？」

やがて缶を口から離れたオカダは、腕で口元を拭いながら言った。砂浜に脚をのばして座った今日子の、膝から頭のとっぺんまでを、じろじろと眺めまわしている。

「な、何よ？」

今日子は自分の身なりがどこかおかしいのかと気になって、エプロンをつけた胸元や、Ｔシャツの袖のあたりを見やった。

「お前、今日は別人みたいに若くね？ 高校生でも通りそうじゃん」

その質問に、今日子は思考が一瞬止まった。

けれどそれは一瞬のことで、つぎの瞬間には冷水をひっかけられたような衝撃を覚えていた。

すっかり忘れていたのだ。

オカダの中では、20歳の派遣社員と認識されていることを。

だって、高校生だもん。

そう本当のことを口にできたら、どれほどいいだろう。

けれど今日には、それを言えない、言うてはならない事情があった。

里美は夏休みの期間中、オカダの勤める会社で派遣のバイトをしているのだ。春休みのときと同じく、成人になりすまして。

「あたしは高校生だけど、里美は20歳だよ」

そう言ってみようか、と不意に今日子は考えた。しかしそうするとつきは、なぜ嘘をついたのか、という理由が必要になる。

オカダは顎に指をかけ、今日子の全身をくまなく観察するみたいに見ている。

その不審そうな顔つきが今日子を焦らせ、言い訳を口に出させた。

「き、今日は汚れる仕事だってわかってたからこんな格好をしてるけど。普段はもうちょっとマシなんだからね」

「ふうん？」

鼓動が、嫌なリズムでどくどくと鳴っている。

急速に喉が渴いて、今日子は好きではないビールを流し込むように飲んだ。

「お前さ、オレ言ってやるつか？ 人事課の奴に」

「え？」

オカダの口から出た職場の話に、今日子は瞬間的に身体が硬くなるのがわかった。

「うちに派遣で入れればいいじゃん。お前の　なんつったっけ、あの友達」

「さ、サト？」

「ああ、そうそう。その娘と一緒に働けるしな」

なんだ、疑われているわけじゃなかったんだ。と、ホツとしたのも束の間の話だ。

今日子は里美とは違う。

里美は姉の身分証を使って姉に成りすましているけれど、今日子はひとりっ子なのだ。

オカダの勤める会社に派遣で入るなど、できようはずがなかった。

「えーっと、ありがたいお話だけど、やめとくね。もう他の仕事決まってるし。……それはそうと、あれ見て!」

とにかく何でもいいから、これ以上派遣の話が続けたくなくて。今日子はそう口にする、海のほうを指差した。

けれど、その話題も失敗だったようだ。

今日子は焦るがあまり、他人に語って聞かせるつもりなどなかった話を切り出してしまっていた。

「あの海岸、波打ち際の辺りね」

指差した方向には真っ黒な海が広がり、小さく打ち寄せる波が微かな音を立てている。

昼間なら白っぽく見えるはずの砂も、黒ずんだ灰色にいまは見えな

「あの辺りで、昔お父さんと潮干狩りをしたことがあるの」

オカダは身体をよじって、今日子の指し示す方向に目を向けていた。

「へえ？　ここ掘れるんだ？」

「うん、多分あのあたりだったと思う」

それは今日子の中に残された唯一の、父親の記憶だった。

母親が写真を処分してしまったので、どんな顔をしているのかもわからない。

そんな父の話は、噂でだけなら今日子も耳にしたことがあった。

大借金を作って妻子を捨てたとも聞いたし、女を作って出て行ったとも聞いた。

それらはすべて大人の口さがない噂話だ。

嘘なのかもしれないし、もしかすると両方本当なのかもしれない。

ただ確かなことは、父の話題を出されるのを母が極端に嫌がるということだ。

それはタブーと言っても良かった。

なので今日子は、父との思い出を喋ること自体久しぶりだったし、

むしろそんな話題を口にした自分にも驚いていた。

オカダはそんな裏事情を知るはずもないから、世間話のひとつとして聞き流しているだろう。

と今日子は思っていたのだが、こちらを振り返ったオカダは先ほどまでの様子と一変していた。

「なあ、お前暇だろ？ 明日潮干狩り行かね？」

一体どうしたことが、オカダの瞳はわくわくと好奇心に満ちていて。

「はあ？ なんであたしが……」

「だあって、やってみたいじゃんよー。ホラ、明日の干潮時刻は午後3時の予定だって。こりやもう決まりだな」

拳句に、携帯片手にそんな情報まで調べる始末だ。

今日子はこんな話題を出すべきではなかったと、心の中で舌打ちをしていた。

いくらなんだって、今更潮干狩りなどしたくない。

日焼けするし、汚れるし、いいことなんて一つもないじゃないか、というのが今日子の本音だ。

けれど、

「んもっ……」

そう言うつもりだったのに、目をあげた途端、明日の約束をせがむ

子供みたいな目にひきつけられて。

今日子はそれ以上強くつっぱねることができなくなった。

「な？ 明日3時に、ここ集合だからな」

「……はあ」

今日子は大きなため息をつき、むうっと口を歪ませた。

またもオカダにしてやられた、という敗北感と、しょうがないな、という諦め。それに加えて少しのときめきがあった。

その最後の要素だけで、この成り行きを許してしまう気になっていた今日子は、しかし

つぎの瞬間凍りついた。

「で、さあ……。ちょっと、どうにも思い出せないから聞くけど。お前、名前なんだったっけ？」

今日子は、まさか冗談だろうと、最初は思っていた。

だって、先に話しかけてきたのはオカダなのだ。

一月前に一度会ったきりの今日子の顔を、オカダは覚えていたのだから。

けれど目が合った途端、わずかに泳いだ目線の動きで、今日子はオカダが、本気で今日子の名を覚えていないことに気付いた。

「 帰る」

今日子は、一瞬何も考えられなかった。でも、つきにはもう立ち上がっていた。立って、お尻の砂を払って、引き返そうとしていた。

心臓がガンガンと音をたて、息をあがらせている。

あまりにも急に立ち上がったせいで、足元が少しふらついた。

「待ってって！ ごめん！ オレ、人の名前覚えるのが苦手で」

オカダが慌てた様子で掴んできた手を今日子は反射的に振り払っていた。

一瞬だけ絡んだ視線は、少しバツが悪そう。それが余計に今日子を傷つけた。

そっだ、今日子は傷ついていた。

名前さえ覚えられていなかった現実に。

そして、名刺を破り捨てても尚オカダの名を覚えていた、自分自身との差に。

「なあ、機嫌直せって。明日絶対来いよ」

この期に及んでまだそんなことを言うオカダは、どこまでずうずうしいのだろう。

口なんて絶対きいてやるつもりなどなかったのに、今日子は瞬間的に振り返り、声を荒げて叫んでいた。

「行かないよ、誰が行くもんか。バーカ！」

今日子はそう吐き捨てる、重い砂を蹴って駆け出した。

「おーいつ、3時だぞ！ 来るまで待つてるからな」

動揺して、思考すらままならない今日子とは違い、背中に届いた声はあまりにもものん気だ。

それが尚更悔しくて、今日子はもう一度振り返り、声の限りに叫んでいた。

「行かないってば！ あんたなんか大嫌い」

大嫌い。

そう声に出した途端、ずっと我慢していたものが零れ落ちた。

言い逃げするみたいに走り出した今日子は、いま胸を焼くこの感情の理由に、もちろん気付いていた。

けれどプライドの高さゆえに、それを素直に認めることは簡単ではなくて。

「何泣いてんの、あたし。バカじゃん」

ひとり言にしては大きな声で自分を叱咤しながら、今日子は海岸沿いの道をひた走っていた。

### 13・彼女の魅力

「参ったな……」

名前の思い出せない彼女の背中が闇に溶けていったあと、啓二はくしゃくしゃと髪をかき混ぜ、狼狽していた。

足元にはビールがふたつ転がっている。

砂の上に倒れ、黒い染みを広げているのは彼女が飲み残した缶なのだろう。

その染みがまるで彼女からの抗議みたいに見える、啓二は倒れた缶を砂に立たせた。

「あーちくしょう、失敗したなあ」

啓二はため息まじりに呟き、どっかりとその場に腰を下ろした。

ネコ科の動物を思わせる大きな瞳は少しつりあがった目尻が印象的で、ゆるく螺旋を描いた茶色の巻き髪も、派手な容貌を際立たせている。

小さな顔の中に一際目立つぷっくりとした口唇は、以前騙して奪った。

そんな彼女は最初に与える印象ほどお高くとまっているわけでもなく、打てば響くような反応も楽しい。

合コンで一度会ったきりの女。

ただそれだけの関係で終わるはずが、話してみれば啓二好みで、連絡をとる手段も持たず、名前も思い出せない自分が恨めしかった。

気まぐれに任せてひとり見に来た花火大会は、不意に訪れた再会によって、期待していた以上に楽しい時間になったというのに。

悪気はなかったとはいえ、やはり遠まわしに探るべきだったと、啓二はいい加減ぬるくなったビールの残りを一気にあおった。

沖合いに数珠繋ぎに光る灯りは、イカ釣り漁船のライトだろうか。水平線に玉のような光がいくつも浮かんでいた。

棧橋の先にある灯台が、サーチライトをぐるりと巡らせていて。黒い波の動きがゼリーのように見えた。

啓二はタバコを啜えると、海から吹く風に背を向けて火を点けた。

吐き出した煙は、しばらくは空中にその紋様を漂わせていたけれど、やがてはのみこまれ、消えていった。

啓二は今日子と話している間、ずっとどこかに違和感を覚えている。その正体が何なのかを考えていた。

くしくも彼女が去っていく去り際になって、やっと答えが出たのだけれど。

どうやら、タイムオーバーだったようだ。

それは誰しも通り過ぎる青春の記憶だった。

赤の他人に対して本気で怒る真摯な眼差しや、感情を色に出してこころと変わる表情。

いい大人ならば腹に一物持ったまま、簡単に受け流す冗談を、ムキになって言い返すあの口調、そして声。

つまり彼女の不思議な魅力は、学生時代を彷彿とさせる要素なのだ。

啓二は反動をつけて立ち上がると、タバコを缶の中に投げ入れた。

とにかく、明日なのだ。

明日彼女が現れなければ、縁はここまでで終わる。

去り際に泣き出しそうな表情を見せた理由が、こちらの思うとおりであったなら、彼女はきつとやってくる。

そうだといいのだけれど　と、啓二はまた視線を海に戻した。

黒くうねる海の真上に、弓形に反った月が出ていた。

風に流された雲が切れぎれに覆っては、漏れる光を鈍いものに変えている。

ぬるい南風が頬を撫でて。

啓二は、明日は雨かもしれない、と思った。

雨が降っていた。

霧のように粒子の細かい雨が優しく外の世界を濡らしている。

天気の良い日なら眩しいほどに白く輝く隣のチャペルも、今日はやや明るいグレーへとそのトーンを落としていた。

街並みは、人も物も動きが落ち着いているように、今日子の目には映った。

いつもはせかせかと早く流れていく時間が、今日はやたらとゆっくり感じられた。

夏休みに突入してはじめての里美からの誘いは、予告どおり花火大会明けだった。

突然電話で呼び出され、いま今日は駅前にある観光ホテルのケーキバイキングに来ている。

日曜の昼下がりだというのに客足はまばらだ。

客の年齢層も高く、同年代の姿は見当たらない。

店内はクラシックが流れ、時折食器の当たる繊細な音が響き、ふたりのような騒がしい女子高生でさえ行儀よくさせる上品なムードが漂っていた。

久々に顔をあわせたふたりは、互いに少し背伸びした装いで待ち合わせた。

楽しいはずのバイキング。

しかし里美はどこかストレスをため込んでいるようで、表情は暗い。その様子は、里美の恋がうまくいっていないことを今日子に予感させた。

聞けばエロメガネとはとつくに破局……いや、そもそも始まってさえいなかったのだが、奴にはカノジヨがいたらしい。

「詐欺だよな？ カノジヨいるなら合コン来んなつての。ホント腹立つ」

そう呟くと、里美は長く息を吐いた。

まるで体内の悪玉菌をすべて吐き出すような鬱々としたため息だ。

エロメガネにカノジヨがいる。

それは恋愛至上主義者の里美にとって、夏休みの計画が頓挫したに等しい。

楽しくなるはずだった派遣の仕事も恋のターゲットが居なくなればただの労働に変わり、残り日数は惰性で通うしかないのだろう。

里美はうつぶんをケーキにぶつけているのか、手元のイチゴシヨートはフォークによって細かく分断され続けている。

すでに原型はなく、スポンジと生クリームの残骸に成り果てていた。

それにさあ？ と里美は続けた。

「新垣つていたでしょ？ 覚えてる？ ちょっと格好良い人」

「覚えてるよ」

酔っ払った今日子を強引に持ち帰ろうとした男だ。

そして趣味がスキューバで出身が沖縄。

なぜか、そんなどうでもいいことだけは、今日子は詳しく覚えてるのだ。

「あいつなんて嫁も子供もいるってさ。ひどい話だよねえ？」

里美は口唇をつき出し、「やってらんないよ」と言い足した。

「マジでー？ なんていうか、合コンって騙しあいなの！？ 嘘ついているのうちのらだけじゃなかったんだ……」

まったく聞いてあきれると、今日子はおしぼりで手を拭った。

あの場にいた8人。

残りの4人は知らないにしても、半数は各々秘密を抱えて参加していたことになる。

むしろ、既婚者であるのをおくびにも出さず参加していた新垣を思えば、今日子たちが歳を3つ誤魔化していることなど、他愛もない嘘に思えた。

大人は平気な顔をして人を騙せるんだ、と眉をひそめた今日子の胸に、また別の男の顔が浮かんだ。

？オカダにも実は彼女がいたりして？

不意にそんな憶測がよぎり、今日子は無意識に顔の前を手で払った。

いい加減にすればいいのに。

相手はこちらの名前さえ覚えていなかったというのに、今日子は未だに気にかかっているのだ。

おまけに、先ほどからチラチラと時計を気にしてもいて。

それがまた今日子の自己嫌悪を上塗りしているのだった。

今日子はティーカップの中に映った自分の顔をじつと眺めた。

赤い紅茶の中をゆらゆらと漂う表情は、冴えない胸の内を代弁するかのよう、不機嫌そうに見えた。

『行かないってば！ あんたなんか大嫌い』

そう叫んだのは他でもない自分自身だ。

なのに、オカダの告げた時間が近づくにつれて落ち着かない気分になっっている。

それが今日子には恥ずかしく、情けなかった。

「新垣と言えば、オカダさんっていたでしょ？」

今日子はフォークに手を伸ばし、モンブランの頂上に立つ大きな栗の実をすくった。

「……いたね」

「このふたりが仲良くてさ、喧嘩みたいな言い合いしても面白いの」

「ふうん」

意識して無機質な相槌を打つ。

そんな人、どうでもいいと思っっている風を装って。

けれどそのひとり芝居は、突如鳴り響いた里美の携帯の着信音によってさえぎられ、

「やばーい。マナーモードにするの忘れてた！ ちょっと席外すね」  
テーブルにひとり取り残された今日子は、里美の背中を見送ったあと、携帯のディスプレイを眺めまた一つ大きなため息をつくこととなった。

昨夜、オカダによって大いにプライドを傷つけられた今日子は、家に戻ってからも当分の間立ち直れなかった。

名前を覚えられていなかったショックに加え、そのことに傷ついて  
いるらしい自分に対してもショックで。

早く眠ってしまいたくて、冷蔵庫にあった梅酒を飲んだ。

けれど一向に効果は出ないまま、それどころか急に涙がこみあげてきて。

今日子はタオルケットを頭からかぶり、声を押し殺して泣いた。

階下では母親のスナックが営業中だ。

だから声を殺さなくてもカラオケの音にまぎれるのだけれど。

今日子は時折しゃくりあげながら、いまほとばしる涙の理由をたぐりよせた。

一つ目は、容易に想像がついた。

異性からチャホヤされて当たり前前と思っていた自分のプライドが、オカダによつて粉々に打ち砕かれたからだ。

いつの間にか培われていた傲慢さが、自分は異性から興味を持たれて当たり前なのだと今日子に思わせていた。

なのに相手はてんで無関心で。

今日子の方は覚えていた名前を、相手からは覚えられてもいなかったのが悔しかったのだ。

そして二つ目は　と、今日子は口唇を噛んだ。

認めたくはない。

本来なら、絶対にありえないことだけれど。

他の誰から興味を持たれなくても、無関心でいられても構わなかったのだ。

それがオカダでさえなければ。

二つ目、それは今日子がオカダに惹かれていたからだった。

「　　って、聞いてる？」

「え？　あーごめん、ボーっとしてた。何？」

いつの間に戻ってきたのか、里美が怪訝そうな顔をして今日子に話しかけていた。

小首を傾げ、携帯のディスプレイに目を落としている。

「派遣の子からの電話だったんだけどさ、合コンに来てた女の子の名前を確認したい、って。あんたのことだと思っただけどね？」

「え？」

「オカダさんが、あんたの名前を知りたがっているらしくて。回りまわってあたしに電話がかかってきたみたい」

静かに載せたつもりだったのに、ソーサーにカップを下ろした途端、カシャンと高い音が鳴った。

「ふうん」

精一杯気の抜けた声を出した今日子は、それでも心中穏やかでいられるはずがなくて。

オカダが、自分の名前を調べている。

そう思っただけで、胸の奥がじんじんと熱くなるのがわかった。

「ふーんって！ ちょっと、あんた何か隠してない？」

里美は今日子の微妙な変化を嗅ぎつけたのか、テーブル越しに身を乗り出している。

その目は好奇心の三文字をはっきりと浮かべ、今日子に自白を迫っていた。

今日子は里美がにじり寄った分だけ身を引き、椅子の背もたれに背中を押しつけた。

「昨日花火大会の時にオカダさんがビールを買いに来て、ちょっと話した。それだけだよ？」

嘘ではない。

嘘ではないが、今日子は大幅に端折って説明した。

それは、やはり今日子の内面の問題で。

オカダに対する微妙な気持ちを、いまこの場で洗いざらい告白する気には到底ならないからだ。

今日子は、いまならまだ、なかったことにできると思っていた。

深入りしないで引き返せば、いまひりひりと胸を焦がすこの感情も、通り雨のように過ぎ去っていくものだ。

けれど、

「もしかして惚れられたんじゃない？」

あ、それは無いか」

里美の思わせぶりな文句がひどく気にかかるのも確かで、コントロールのままならない心の揺れに、今日子は自身ですら手を焼いていた。

ふと、視線を手元に落とす。

気が付けば白いケーキ皿の上のモンブランは細かく分断されていて、すでにモンブランとしての体をなしていない。

それは里美の前にあるイチゴショートの残骸と、まるっきり同じ様相である。

その残骸と成り果てたモンブランをフォークですくい、今日子は黙々と口に運んだ。

いかにも平気そうなふりをしている自分自身に、胸の中で悪態をつきながら。

こんなのはフェアじゃない、と。

里美のことを一番の友達だと思っていながら、プライドが邪魔をして格好悪い話は口に出れない。  
なんて情けないやつなんだ、と。

そのくせ、里美からの情報だけは聞きたいだなんて、都合がいいのにもほどがある　と。

そうやってさんざん自分を罵倒している今日子の耳に、気にかかっていた話の続きが飛び込んできた。

「ケイちゃんから聞いた噂話だから本当のところは知らないけどね。

オカダさんは長くつき合っていた彼女に振られたばかりで、いまでも傷心中らしいよ」

「そう、なんだ」

「うん。で、あの合コンはオカダさんのために企画された飲み会だった、って。ケイちゃんは最初からオカダさん狙いだから、いまでも諦めてないみたい」

里美はそれ以上オカダの話に執着せず、氷が溶けて色合いがグラデーションに変わったアイスティーをすすりはじめた。

今日子はフォークを皿に戻し、窓の外を眺めた。

窓の際には観賞用のバナナが植わっている。

広い葉には、雨粒がびっしりと付着しているのだろう。

時折重たげに頭を垂れ、雫を跳ね落としていた。

どんよりと暗い灰色の雲は、含んだ湿気の重みに耐えきれず、いよいよ大粒の雨を降らせ始めていて。

天井から床まで広く取られた窓にも、ななめに掠るような雨の軌跡が次々とつけられている。

それはやがてまとまったひとつの雫になり、窓の表面を滑るように伝って落ちて。

それを見た瞬間に、今日子の耳の奥で、オカダの声がフラッシュバックした。

「絶対来いよ」

「3時だぞ？ 来るまで待つてるからな」

まさか、と今日は鼻を鳴らした。

見てのとおり、こんな悪天候なのだ。  
いくら何でも待っているはずがない。

今日はそう胸の中で呟き、視線をテーブルへと戻した。 けれ  
ど、

つい、時間が気になって。

よせばいいのに、やっぱり気になって。

「ごめん、里美。今日はこれで帰るわ」

「ええ？」

目を丸くしてこちらを見上げる里美に、今日はもう一度「ごめん  
！」と手を合わせ、テーブルの上の伝票を掴んだ。

携帯のディスプレイには、PM・3：20の数字が表示されていた。  
それはとうに約束の時間を回っていて。

いまから行っても、居るわけがない、とか。  
こんな天気の中で待っているはずがない、とか、いくつもの制止の  
声が頭をよぎるけれど。

一度走り出した今日子の心は、押しとどめようとするすべての理屈を払いのけていた。

ただひたすら前を向いて。

それは、オカダに会いたいがゆえに。

## 15・恋のはじまり1

「来ないか……」

朝からの雨は次第にその強さを増し、フロントガラスを絶え間なく叩いていた。

計器パネル脇のデジタルクロックはPM・3:15を表示し、5分早く設定している分を差し引いても、すでに約束の時間から10分が経過している。

啓二は車から降り、視界のひらけた海岸沿いの左右を見渡し、通りに人影を探した。けれど、こちらに向かってくるそれらしい影は見えない。

「あーあ、マジかー」

通りから海岸を見下ろすと、昨夜今日子が指差した辺りに潮干狩りに興じる親子連れがいた。

その手前は湿って灰色に染まった砂が、堤防の間まで続いている。

潮が引いて顔を覗かせた浅瀬は、だいぶぬかるんでいるようだ。

親子はそれぞれ、足元が沈み込んでいるように見えた。

啓二はもう一度通りの先を窺うように首を巡らせ、そこに何もなかったことを確認すると、後部座席のドアを開けた。

せっかくここまで来たのだ。

それに、遅れてひょっこり現れる可能性だって無いとはいえない。

啓二はTシャツを脱ぎ捨てると、デニムの裾を膝までたくし上げた。バケツと熊手を手に砂浜へと降りる。

本当のところ啓二は、口で言うほど潮干狩りに関心があるわけではなかった。

元々がアウトドア好きなせいもあって、便利がいいように四駆に乗っているが、どうせ海に行くなら泳ぐ方が好きに決まっている。

けれど、あの時波打ち際を指差した彼女の語り口調から、思い出の中の父親はいま居ない人のような気がして。

そんな予感が咄嗟に誘い文句となって出ていたのだ。

足の甲まで沈みこむ砂浜は、一步踏み出すごとに、湿った砂が指の隙間を埋めるみたいにまとわりついた。

それは雨日和にも関わらず、太陽の温もりを蓄えていて。

やがて砂から粘土へと変わった足元を注意深く踏みしめながら、啓二は潮干狩りをしている親子連れに声をかけた。

「こんにちはー」

そばに立つと、父親らしい中年男がこんにちははと返し、娘らしい小さな女の子が背中に隠れた。

啓二はやや距離をとって中腰になると、見よう見まねでじゅくじゅくとした粘土層を引っ掻き、指を這わせた。

たった一掻きで指に硬い感触があり、摘み上げると黒い二枚貝。  
アサリだ。

「おお？　なんだ、結構簡単にとれるもんですね？」

妙にうれしくて、啓二は思わず隣の男に声をかけていた。

見知らぬ人に対してなれなれしい行為だったかと、口にした途端後悔したが、男は気にしない風で応えてきた。

「ええ、一つ見つけたらその周りは他にも棲んでいますよ」

「へえー」

男の背中に隠れていた少女がおずおずとした様子で顔を覗かせ、啓二の方を注意深く見守っている。

その瞳は好奇心とわずかな警戒心を浮かばせていた。

啓二は少女にニツと笑いかけた。

すると少女は一瞬目を見開いて、慌てたように背中に隠れた。

しばらく待つと、再びひょっこりと顔を覗かせ、目が合った途端にまた隠れている。

どうやら、今日は女運が悪いらしい。

啓二は口をすぼめ、再び熊手に目を落とした。

男の言ったとおり、掘った場所の周囲からは立て続けにアサリがとれた。

集団で棲む性質のあるアサリは、硬い殻に覆われながらも付近に仲間がいることを本能で探知しているらしい。

しかし近くに生息していたところで便利な事などあるのだろうか。エサを分け合ったり、共同でエサを捕獲するとも思えない。

それに一匹捕獲されてしまえば芋づる式に害が及ぶ。

お互い相容れない存在でありながら、なぜ集団で生息するのだろうか。啓二にはそれが何だか、人間社会と似たものに思えた。

啓二は家族運に恵まれているとはいえない。

それについて不便を感じたのは、以前車を買う際の保証人探しに手間取った時だ。

その時は母の再婚相手である男が名乗り出てくれたのだが、有難い話であると同時に言いようのない申し訳なさを感じた。

その一度きりを除けば、ひとりで生きていくことに不便は感じていない。

けれど、普通の人が家族や親類と過ごす正月休暇については、ひとりであるのに慣れている啓二でも淋しさを覚えた。

テレビをつければ家族を対象にした特番ばかり。かといって出かける場所もない。

そんな経験も多少は影響しているのだろう。

啓二は「若者にしては珍しく、結婚願望が強い」と、揶揄されることがよくあった。

そう茶化される度に笑って誤魔化しているのだが、当たらずとも遠からずだ、と啓二自身も思っている。

百円均一で買った小さめのバケツの底が見えなくなった頃、ふと、傍に体温を感じ、顔を向けると少女が隣で泥遊びをしていた。

雨が麦藁帽子のひさしに落ち、飛沫が跳ねている。

その下で水着の身体が呼吸をすることに上下し、一心不乱に何か作っている小さな手は粘土にまみれていた。

啓二が上から覗き込んだせいか、少女の手元が暗くなって。

それに気づいたらしい彼女がこちらを見上げてきた。

はにかんだような笑みを浮かべる口元から、前歯が一本欠けているのが見える。

その隣　丸いカーブを描いた柔らかそうな頬に、泥が付着している。  
て。

啓二はそれを拭ってやろうと手を伸ばした。

けれど。

「ミキ、こっちに来なさい」

男の呼び声が聞こえて。少女は素直に立ち上がると、男の脇にしゃがみこんだ。

もしかして、怪しい奴だと思われたのだろうか。  
そう懸念して、男に目を向けると、彼が啓二に目配せをして後ろを指差すのが見えた。

一面灰色に覆われた視界に、ピンク色の傘と白い立ち姿。  
背中を振り仰いだ啓二の瞳に、傘をさして立つ今日子は、一瞬絵の  
ように映った。

白いニットのノースリーブに、ヒダの多いスカート。  
ピンク色の傘に半分隠れている顔は、不機嫌そうにそっぽを向いて  
いて。  
びゅうつと吹いた風に、白いスカートと肩に落ちた長い髪がなびい  
ていた。

啓二は思わずクスッと笑っていた。

どうやら、女運は悪くないようだ。

「遅かったじゃん？」

啓二はホースの水で泥に汚れた手足を洗い流しながら、入り口に立  
つ今日子に声をかけた。

最初お湯のように温まっていた水は次第に温度が下がり、啓二は前  
屈みになったまま、それを頭から浴びた。

その間も入り口の今日子は何も答えないままで、聞いているのかい

ないのか、啓二が頭を上げたあと顔をもむけ、露骨に機嫌の悪さを強調しているようだった。

ホースの口からは、出しっぱなしの水がジヨロジヨロと間延びした音をたててあふれ、啓二の足元に小さな川を作っていた。

川は若干ななめになったセメントの床を下り、溝へと流れ込んでいく。

「3時って言ったらー」

啓二は身体ごと今日子に向き直り、横顔に言った。

「3時から始められるようにしてて当たり前なんですー。わかった？」

途端に、彼女が振り返って。

説教されて腹が立ったのか、肉食獣の子供を思わせる反抗的な瞳が、真っ直ぐにこちらを射抜いてきた。

その下にある赤い口唇は不満そうにつき出され、頬もぶっつと膨らんでいた。

「あたし、行かないって言ったじゃん！」

言い終わると今日子は眉を寄せ、またそっぽを向いた。

本人には自覚がないのかもしれないが、今日子が怒るとき、その表情はパターン化している。

啓二は予想通りの反応が楽しくて、今日子が顔をそむけているの  
いいことに、口元を綻ばせた。

けれど、次第にいじめたくなって。

返答に困るだろうとわかっていながら、啓二は今日子の揚げ足を取  
った。

「行かないって言ったくせに、なぜ来たの？」

振り返った今日子は、大きな瞳を何回か瞬かせ、ぽかんと口唇をあ  
けていた。

啓二はやっとこちらを向いた視線を、ぬいつけるつもりでくり返し  
た。

「何で来たんだよ？」

トタン屋根を雨が叩きつける音が、小屋にやかましく響いていた。

手にしたホースの口からは相変わらず水が垂れ流されている。

けれど、ここで微塵でも動いたらダメだ、と。

啓二は今日子の目を見据えたまま、彼女の返答を待ち続けた。

## 16・恋のはじまり2

向き合ったふたりの間には重い沈黙が横たわっている。

雨模様のせいで薄暗い視界が、余計にその色を濃くしているのかもしれない。

息苦しいほどの無言状態が、長く続いていた。

啓二はじつと今日子の目を見つめ、今日子も目をそらせないのか、こちらを見上げていた。

こちらが放った問いかけが、相当に彼女を苦しめているのだろう。今日子は「だって」と呟いたまま黙りこみ、その先が続かないようだった。

言いよどむその様子を見ながら啓二は、『絶対来い、と。来るまで待ってると言ったのはそっちじゃないか』と言われるだろうな、と予想していた。

それに加えて、本当はそんな理由じゃないはずだ、とも思っている。無視しようと思えばできたのに、何だかんだ言いながらも来てしまったのは、きつとそんなお人好しな理由だけではないはずだ。

けれど、気位の高そうな彼女のこと。まさか本音を語るはずがない。

そんなわけで啓二は、予想している言い訳を今日子が口にするのを待っていたのだ。

どのくらい経った頃だろうか。ふたりの間に漂う空気が揺れた。

今日子はすっと視線を落とし、啓二の足元に大きく広がった水たまりを睨んでいるようだった。

苛立っているのは、その目元を見ただけでわかる。

悔しそうな、それでいて思いつめたような色を浮かばせていた。

「あたし帰る」

突如、彼女はそう言った。

え？ と啓二が頬を強張らせたときには、肝心の彼女は背を向けようとしていた。

今日子はくるりと背中を見せ、外に向けてジャンプ傘をポンと広げた。

遅まきに 彼女の髪の毛の匂いだろうか、甘い香りが流れてきた。

彼女が帰ろうとしている。

それは啓二にとって、最も都合の悪い展開だった。

なにしろ連絡先さえわからないのだ。

こんな形で帰らせると、きっと二度と会う機会はない。

「ちょっと待てよッ！」

帰ろうとする今日子に、慌てて啓二は駆け寄った。傘を持つ腕を掴み、強引にこちらを向かせる。

瞬間、ピンク色の傘がぐるりと回転してその手を離れて。

灰色がかったセメント床で、傘は数回大きく弾み、やがては震えながら止まった。

思いがけず掴まれた腕に、今日子は面食らっているようだ。

大きな瞳はますます大きく見開かれ、落ちた傘と啓二の顔を順番に眺めている。

反射的に今日子を引き止めた啓二は、胸の中に芽生えている恋の予感を確かに感じ取っていた。

けれど、このままつき進んでいいのか、と、つぎのステップへ踏み出すことをためらっていた。

今日子にこのまま会えなくなるのは、いやなのだ。それは間違いない気持ちで。

しかし、啓二の中にはいまもわずかに、元カノへの未練が残っているのだ。

啓二は、はあっと長い息をついた。

もちろんそれは、思い切りの悪い自分にあきれたのため息だ。

まったく、どうかしている　と、啓二は今日子の腕を離れた。

心より、身体のほうが正直者なのだろう。

咄嗟に彼女を引き戻したのが、すべての答えであるのに。

「もういいよ、何も言わなくて」

啓二はぶっきらぼうにそう言うと、ホースの水を今日子の足元に流した。

さっきサンダルを脱いで歩いたために、彼女の両足は足首まで砂まみれになっていた。

白く、華奢な素足は青い血管が透けている。

その足元から視線を上を辿り、啓二はこちらを見上げる今日子の視線を絡め取った。

名前を覚えていないことに腹を立てて泣きそうな表情を見せた彼女は、来ないと言いながらもやって来た。

それは、互いに似た感情を持っていると考えていいだろう。

啓二は新しい一歩を踏み出す覚悟を決め、腹に力を入れた。過去はここで終わり、未来はここから始まるのだ。

「もう一度言うけど」

今日子の長いまつ毛が瞬いている。大きな瞳が、怪訝そうに細められた。

「3時って言ったなら、3時には準備出来て当たり前なわけ。わかる？ つぎに遅れてきたらホントに怒るよ？」

一瞬、彼女の目つきが険しいものになった。

しつこいとも言いたげな眼差しに、啓二は、遠まわしに言いすぎ

たかなと後悔した。

けれど、数秒後には大きく見開かれて。

言葉を失っているその様子から、どうやら啓二の言わんとすることが、今日子に伝わったらしいのがわかった。

啓二はホッと胸を撫で下ろし、彼女の反応を待った。

もちろん、いい答えが返ってくるに違いないし、それについては何の心配もしていなかったのだが。

しかし、今日子は何を渋っているのか、まったく反応しないままでまさかここにきて迷われるなどと思ってもいなかった啓二は、徐々にその沈黙の長さに苛立ってきた。

「おい？」

もどかしい思いに急きたてられて声をかけると、今日子はハッとしたりようにびくりと身体を震わせて、瞬きをくり返した。

その様子は彼女の動揺している胸の内を如実にあらわしている。

迷っているわけではないのがわかりホッとするのも束の間、啓二はダメ押しのもりでもう一度「わかったか？」と口にしようとしていた。

けれど。

「わかつ　　、　　つわあああ！！」

「イヤアアアア！！」

つい力が入った啓二の指はホースをきつく締めつけ、勢いよく飛び出した水が今日子の胸めがけて発射された。

慌てて手を離れたホースは、蛇みたいにうねりながら落ちていって床に落ちたあとも、跳ねて辺りに水を撒き散らしている。

今日子の髪は濡れた重みで真っ直ぐになり、先からポタポタと雫が滴っていた。

ずぶ濡れになった薄手のニットが身体に張りつき、立体的なラインを浮かび上がらせている。

陰気臭い小屋に光が射し込んだみたいに、その姿は瑞々しく、眩しかった。

しばらく見惚れていた啓二は今日子の叫び声でハッと我に返った。

「あ、あつ、あんたつ、何すんのよ!」

今日子は真っ赤になって身をよじり、腕で胸元を隠している。

その腕が交差した隙間から、黒い下着が透けて見えて。

啓二は堪えきれず、肩を揺すって大笑いした。

「クッククク。あー、うける。エッチな色の着てるんだなあ?」

「たまたまよ! あんた確信犯でしょ? いまの、絶対わざとだ」

今日子はよほど恥ずかしいのだろう。耳まで赤く染まっていた。

浅い呼吸をくり返しているのか、肩が細かく上下しているのがわかる。

「違うってば！ ハイハイ、ごめんごめん。でもこれで帰れなくなつたじゃん」

啓二はニツと口の端をあげて笑い、頬を紅潮させて怒る今日子の顔を覗きこんだ。

ネコ科の動物のような、どこか反抗的な瞳は目尻が切れ上がっていて、非常に魅惑的だ。

好きか？ と聞かれれば、わからない、と答えるより他はない。けれど、やっぱり手放すのは惜しい。

それが啓二の、正直ないまの気持ちだった。

「オレさ、長くつき合ったカノジョがいてね。振られた直後に合コン行ったわけ」

啓二はそこで言葉を切ると、今日子の瞳をじっと見据えた。

好きでもない人に好きだとは言えない啓二の、精一杯の気持ちを、いま目の前にいる今日子に伝えるつもりだった。

「合コンで会った女の名前なんて覚える気もなかったし、どうにかなるつもりもなかったんだよね。未練というか、まあ、そういう気持ちがあつて」

今日子はさっきまでの様子から一転、神妙な顔をしていて。真面目

に聞きいつている眼差しが、啓二を少し緊張させた。

啓二はぐっと奥歯を噛み、息をのんだ。そしてその後は一息に言い切った。

「でも、篠原今日子サンに、これつきり会えなくなるのは嫌なんだ」  
言うべきことを言ってしまうと、急に恥ずかしさがこみあげてきて、啓二は今日子の顔を見ていられなくなり目をそらした。

それからどのくらい経った頃だろうか。

視界の隅で、彼女が動くのが見えた。  
恐る恐る目を配ると、気が強く、生意気な口をきくことの多い彼女が、しくしくと泣いていた。

「ええ!?!」

啓二は顔を覆って泣く今日子を前にして、慌てふためいた。

しかし、こういう状況では抱き寄せる他に思いつかなくて。  
啓二はおずおずと背中に腕を回し、細い身体を引き寄せた。

「そうかそうか、泣くほど好きか？　しょうがないなあ」

つい、口をついて出た一言は、もちろん照れ隠しだ。

それは、急に膨らんできた気持ちゆえに。

何となく惹かれる。

その程度だったはずの啓二の心は、いま確実に今日子のほうへ大きく傾いていたのだ。

啓二は今日子を引き離すと、顔を覆っている手をどかした。濡れそぼった目を覗き込み、手を差し伸べる。

「岡田啓二。お前今後はオカダって呼ぶなよ？」

今日子はきょとんとして、啓二の顔から手へと視線を落としていた。けれど、つぎの瞬間にはおずおずと白い手を重ねてきた。

「うん……」

ふたりの恋は寂れたボート小屋の一角で、こんな具合に始まった。

小雨の降りしきる夏のさなか。8月初めのことだ。

## 17 恋のはじまり3

西に傾いた太陽が、ぶ厚い雲に覆われて薄っすらと白く光っていた。降り続いていた雨は、いまではワイパーなしでも気にならない。日が暮れるにつれて雨脚も弱まっている。そんな感じだった。

今日子は先ほどからずっと、助手席の窓から流れゆく景色を眺めていた。

正確に言えば、眺めるふり、をしていた。

とにかく緊張しているのだ。

まともに目も合わせられないほどに。

なにしろ今日子にとっては初めての、カレシの運転する車である。乗りなれた母の車とはシートの高さも違えば車内の臭いも違う。無造作に転がっているCDも、いかにも若い男の所有するそれだ。

そんなありとあらゆる違いを感じて、とてもリラックスなんてできないのだった。

「つーか、お前そんなに大人しいと気持ち悪いじゃねえか」

不意に、背中から啓二の声が聞こえて。

「こっち向けってば」

と、背中を小突かれた衝撃で、今日子の心臓は一気に跳ね上がった。

「な、何？」

「なに、って」

今日子は肩越しにチラッと振り返り、また窓の外に目を戻した。ほんの一瞬目が合っただけでも息がつまりそうで、にっちもさっちもいかないのだ。

「なあ、お前。まさか緊張してんの？」

後ろから、啓二が覗き込もうとしているのがその気配でわかった。今日子は飛び上がりそうになって、全身を強張らせ、窓枠に両手でしがみついた。

「まさか！ 何言ってるんだか。普通だよ、全然平気。ただね、ホラ。雨の日のドライブもなかなかいいな」なんて、つい外が気になっちゃうだけなんだから。だから放っておいてくれて大丈夫だからね。こっちはこっちで楽しんでるから！ あ、ホラ。信号青に変わったよ」

動揺すればするほど、マシンガントクになるのは今日子の悪い癖だ。

今日子は思いつくかぎりの言い訳を早口でまくしたて、丁度都合よく青に変わった信号を指差した。

けれど。

「ホントにー？」

啓二は路肩に車を寄せて停めると、後ろから肩を掴んできた。そして啓二の方を向かせようと思っっているのか、窓枠にしがみつく今日子を引き剥がしにかかってくる。

「本当だってば」

今日子は根負けして振り返ると、肩を掴む啓二の手を振り払った。

啓二は面白いものを見るような目でじろじろと今日子を眺め直し、「ふーん」と言った。そして、

「なあ、お前さ。本当は『密室だわっ、どきどきしちゃっ』なんて思ってたんだろ？」

と、今日子の真似をしているつもりなのか、気持ち悪い声を出す。

それがやたらとバカにされている気がして。今日子はキッと睨みつけ、心もち顎を上げた。

「ふーっーっーでーすー！ 変な勘ぐりしないでよね」

「だあって、お前」

啓二はそう言つと、急にぶつっ頬を膨らませ、口唇をつき出した。

今日子はそんな表情をする啓二を見るのは初めてで、怒っていることも忘れてじいっつと見入った。

なのに。

「言っとくけどあたしは、男には全っ然困ってませんから！  
つて、言つてたくせにさあ？ 真っ赤になって窓にしがみついてん  
だもんよ」

啓二は今日子の口真似をしてそう言つと、ハンドルにつつ伏し、肩  
を震わせて大笑いしている。

「もう！ バカにして。全然似てないんだから、顔も、声も！」

クックククと声を殺して笑う啓二に、今日子は猛烈に怒りがこみ上  
げ、手を振り上げて叩くふりをした。

それでも笑うのを止めない啓二に苛ついて、いっそ本当に叩いてや  
ろうか、とそう思ったとき、

「はいはい、ごめんごめん。ええつと、これから何する？」

啓二は逃げるみたいに腕で頭を庇いながら、急に普通的话题を振っ  
てきた。

けれど、一度火がついた闘争心はそう簡単にはおさまらない。

今日子はふんつと顔をそむけると、

「知らない。どうでもいい」

とつっぱね、「あなたの好きにすれば？」と言った。

やがて車が滑り出したあと、

「本当に何でもいいのか？」

と機嫌を取るような声が聞こえたけれど、今日子は振り返らないまま「お好きにどうぞ」と冷たくあしらった。

フェリー乗り場に続く海岸沿いの国道は、悪天候のせいか、行きかう車の数もまばらだった。

アスファルトは雨を吸って黒々と光り、カーブミラーにも大粒の水滴が浮かんでいる。

車内は、啓二のつけたFMが流れるのみで会話は無い。

はたから覗かれたなら、きっと誰の目にも恋人同士とは映らないだろう。

会話がなければならまだしも、互いに目さえ合わせようとしないのだから。

こうなってしまったのは全部啓二のせい。と、今日子は思っている。

今日子は相変わらず窓枠に肘をつき、車窓の外を眺めていた。そこに何かあるわけではなくても、ただ、眺めていた。

市街と逆の方へ進行方向をとる車は、次第に波止場へと近づいている。

このあたりは古くからの漁村で、あまり開発されていないせいか、ガードレールも錆の浮いたのが目立っている。

通り沿いの建物も古い木造住宅が多く、中には戦前の名残なのか、ガラス窓に米印のテープが残る家もあるくらいだ。

今日子はそんな、特別見るほどのものでもない風景をひたすら眺めていた。

いくら退屈でも、自分から運転席の啓二に話しかけるのはごめんだと意地を張り、そっぽを向いていたのだ。

車は国道をフェリー乗り場の方へと曲がり、そしてそれを素通りした。

向こう側の見えない大きなカーブを曲がった先に、ポツンとお城のような建物が見える。

それは数年前にオープンしたラブホテルなのだが

今日子は、まさか、と肩越しに啓二を振り返った。

この先の道は行き止まりで、特に何も無いはずなのだ。

「ちょっと、この道は……」

もしかすると啓二はこの辺りの地理を知らなくて、適当に車を走らせているのかもしれない　と一瞬だけはそう思ったけれど。

ぷつと吹き出した啓二の横顔を見て、今日子はカッと全身が熱くなつた。

「なんて奴！　こんな時間からエッチなことを企むなんて。」

じ

やない、夜でもダメだけど！ あたしは絶対行かないからね。絶対  
いや」

今日子は身体ごと啓二に向き直り、一向にブレーキを踏む気配のな  
い彼の腕を両手で掴んだ。

「あつはつは！ あーホラホラ、危ないだろ？ つーか、お前どこ  
でもいって言ったじゃねーか」

なのに、彼は相変わらず笑うばかりで。

おまけに、今日子がぎゅっと力を込めても、ハンドルを握る啓二の  
腕はビクともしないのだ。

「もうっ。あたし、絶対行かないからね？ 行くならひとりで行け  
ばいい。スケベ」

今日子が怒れば怒るほど、啓二は肩を震わせて笑い転げ、これでは  
何のために怒っているのかわからない。

やがて、車がラブホテルのすぐそばまでさしかかり、今日子の目尻  
に涙が滲んできた頃、

「バカだなー、冗談だつてば！」

そう言って、啓二は車を停めた。

## 18・恋のはじまり4

一車線である海岸沿いのその道は、今日子を乗せた啓二のランドクルーザー以外に車の影はない。

前も後ろも濡れて黒光りするアスファルトが続くのみだ。

運転席の啓二は、もと来た道へ引き返すつもりなのだろう。

ハンドルを回転させるように切り、車体の向きを変えている。

今日子はその様子を隣から苦々しい思いで眺め、嫌味を口にするチャンスを探っていた。

やがて車がUターンし、サイドミラーに映るラブホテルが小さくなった頃、今日子は啓二をキッと睨みつけ、毒づいた。

「あんだ最低。ホント見そこなった。もうちょっとマシな人かと思ってたのに、こんなバカ男だったなんて」

今日子は今日子なりに、思いつく限りの罵詈雑言を浴びせかけているつもりなのだが、啓二はどこ吹く風といった具合に聞き流すばかりで。

「ハイハイ」

時折思い出したように投げやりなふたつ返事を口にして、余計に今日子を怒らせた。

それどころか。

「お前さあ、その呼び方どうにかなんねーのかよ。あんた、って。何のために自己紹介もどきなことをしたと思ってるんだよ」

と、運転の合間を縫い、チラツと視線を寄越しては、自分のことを棚にあげて説教までする始末だ。

今日子はそのずうずうしさにあきれ、じろじろと啓二の横顔を観察した。

奥二重の目は、彼の口よりもお喋りで。

悪巧みを思いついたいたずらっ子みたいに、くるくると表情を変える。

眉は気が強そうに上がっていて。

たまに口の片側を上げて意地悪そうに笑うときは、眉毛も一緒に上がるのだ。

鼻は高くも低くもなく、骨組みのしっかりした顔型。

無造作に散らしたボサボサの髪は黒くて、触ったことなどないけれど硬そうなイメージ。

どれひとつ取っても、今日子の好みではないのだ。

ガキ大将がそのまま大人になったような外見も趣味じゃなければ、茶化したり、意地悪ばかりをするいけすかない性格も、本来なら鬱陶しい部類に入る。

なのに、なぜこの男がいいのだろう。

学校にさえ行けば、チャホヤしてくれる男子はたくさんいるのに。

と、今日子は不思議で仕方がなかった。

「お前、また見惚れちゃってんのか。参ったな」

そんなことを考えているうちに、啓二がそう茶化してきた。

今日子はムツと口唇をつき出し、彼の言葉尻を捉えてあげつらった。

「自惚れるのもいい加減にしてよね。なんであたしが、あんたに見惚れなきゃいけないの？」

啓二は耳の穴を指でほじり、うるさそうに口を歪める。

そして、「また、あんた、かよ。学習能力のない奴め」と言った。

その言い草が妙に癪に障って、今日子は揚げ足をとる啓二の、更に揚げ足をとった。

「あんだだってあたしのこと、お前って呼ぶじゃん」

あんた、と言ったのは、もちろんわざとだ。

直後、振り向いた啓二が息をのんだかのような表情を見せて。

今日子は相手を言い負かした優越感から、満足げに顎を上げてみせた。

車は海岸通りから市街へと進み、人通りの多い駅前周辺にさしかかっていた。

ビルに掲げられた大型スクリーンには、いま上映中であるハリウツ

ド映画の予告が流れている。  
その隣には、ビアガーデン営業中と書かれた垂れ幕が下ろされていた。

「なあ？」

ふと、啓二が呼びかけてきて。

なに？ と今日子が問う前に、つぎの提案が投げかけられた。

「時計がPM・4:30丁度になったら、せーので名前呼ばね？」

本来であればぐらかしたり、冗談にしたりと、心の準備をする時間を稼ぎたいところなのに、よく見ればあと20秒しか猶予がない。

「い、いいよ？」

元々が強がりで、素直になれない性格の今日子だ。

この機会を逃せば、名前で呼び合うなどという照れる行為は、当分の間出来るはずがなかった。

そんなこともあって今日子は、急に持ち出されたその提案を受け入れることに決めた。

照れるのはお互い様だ。恥もふたりでかけば怖くない。

そう、思っていたのだ。

計器パネル横のデジタル時計が、一秒毎に点滅していた。

口の中が渴いて、啓二に聞かれそうなほど今日子の心臓は高鳴っていた。

ただ単に、名前を呼び合うだけ。

そう何度も自分に言い聞かせながら、今日子はカウントダウンの点滅を見守った。

やがて、

5

4

3

2

1

0

「ケージっ！」

「……」

名前を口にした直後、今日子は石になったかのごとく固まってしまった。

ふたりに呼び合う約束のはずが、啓二は黙ったままで。今日子の声

だけがやたら元気よく車内に響き、それが余計に彼女を強張らせたのだ。

「ぶっ」

隣で、彼が吹き出す気配がして。

ハツと我に返った今日子が啓二の方を向いたときには、彼は肩を震わせて笑っていた。

「アツハツハ！ お前最高だよなあ。あー、涙出てきた」

今日子は、信じられない思いで啓二を見ていた。

騙されたのだ、まんまと。

合コンの帰り道にキスをされたときと同じように。

彼にとっては他愛もないいたずらだったのかもしれない。

落とし穴を掘って、そこに獲物が引つかかるのを待つくらいの。

それでも、これはあんまりひどすぎやしないかと、今日子はぎゅっとバッグの柄を握り締めた。

ただでさえプライドの高い今日子だ。

騙された上に笑いにされたのでは、不機嫌になる程度ではすまない。

伏せたまつ毛の内側では、いまにも悔し涙が滲んできそつで、今日子は何度も目を瞬かせては、それに抗っていた。

たちの悪い冗談のせいで、ふたりの間に険悪なムードがたちこめる中、今日子はずきに信号待ちで車が停まったら、その隙に車を降りようと思っていた。

その機会は、意外にはやく訪れて。

ひとつ先の信号が黄色から赤に変わり、啓二の運転する車はゆるゆるとスピードを落としていった。

その交差点が目の前にさしかかった頃、今日子は顔をあげ、啓二を振り返った。

「じゃ、あたし帰りますから。さようなら！」

なるべく慇懃な口調で言い、今日子は啓二に背を向けた。そしてドアに手をかけて、ロックを外した時だ。

「今日子、お前飯作れるー？」

啓二の声が背中から聞こえて。

振り返った先に屈託のない笑顔があり、もう一度その口唇が「今日子？」と動いた。

## 19・恋のはじまり5

これ以上、一秒だってここにいたくない。

そう思っていたはずなのに、今日はいま、啓二の住む社員寮にきていた。

寮とはいえ、会社が借り上げた2DKの賃貸アパートだ。

マツチ箱を横に倒したような2階建てで、踏みしめるたびにカンカんと軽快な音のする階段がある。

そして上った先の一番奥にある部屋が彼の住居らしい。

つまりは、惚れたが負けだ、ということなのだろうと、今日子は自分のふがいなさにあきれ、はあっと大きなため息をついた。

絶対に帰る、と覚悟を決め、悔し涙まで我慢しながら車のドアを開けようとしていたのに。

背中から名前を呼ばれて、たったそれだけのことで、今日子は振り返ってしまったのだ。

しかもどういうわけか、「飯作れる？」という彼ののん気な問いかけに、気が付けば頷いていた。

そこで一旦は我に返り、じゃあさよならと、再びドアに手を掛けたのだ。

けれど、そのあとがいけなかった。

「ああ、逃げるんだ？ まあなー、何もできそうにねーもんな」

まるで、頭ごなしに決めつけるような言い方をされたのだ。

しかも、いま今日子が帰ろうとしている理由まで、そのことにこじつけられて。

今日子は母子家庭の育ちだ。

遅い日は明け方まで母親がスナックをあけているために、小学生の頃から遠足の弁当でさえ自分で作ってきた。

そんな今日子にとって飯炊きの類は、学校の勉強よりもよほど得意分野である。

唯一の取り柄といってもいいほどのな。

「はあ？ あんたね、あたしのこと何も知らないくせにわかったよ  
うな口きかないですよ。あたしがバカそうだから言ってるの？ それ  
とも派手だから？ あたしはね、頭はよくないけど、家事だけは子  
供の頃からやってんだから！」

つい、ムキになって言い返し、啓一と嫌味の応酬を続けているうちに信号は青に変わり、そしていま

隣で啓二が、デニムのポケットから束になった鍵を取り出している。  
その、ジャラリと鍵同士の擦れる音が通路に響いていた。

「入れば？」

鈍い音と共にロックが外され、開いたドアの内側から、中にこもっていた熱と匂いが流れ出てきた。

今日子は今更ながら、啓二の口車に乗ってしまったことを後悔していた。

なにせ、1時間前にはラブホテルへ行こうとしていた男だ。家に連れ込んで、これ幸いと手を出してこないとも限らない。

今日子は中に入るように促す啓二を全身で警戒しながら、じりじりと玄関に足を踏み入れた。

部屋は、玄関から部屋の奥に見える窓まで一直線に抜けていて、ガランとしている。

「お、お邪魔します……」

中に入った途端襲われるんじゃないかと、エッチな漫画で見たことのあるシチュエーションを今日子は想像していたのだが。

「今日子、コレ冷蔵庫に入れてて。バケツ取ってくる」

啓二はいたって普通で。

寮に来る途中に寄ったスーパーのレジ袋を今日子に手渡し、自らは再び駐車場へと引き返していった。

漫画のような展開を期待していたわけではないが、少々肩すかしを食らったような気分になり、今日子はしばらく呆然とっ立っていた。

玄関から部屋に入るまでの通路はキッチンも兼ねており、目的の冷蔵庫はそこに佇んでいた。

今日子は冷蔵庫の前にレジ袋を置き、まずは探検がてら部屋の中を見回した。

窓は青いカーテンに閉ざされ、床にその色を落としていた。

ぼこぼこした素材の壁紙は、元の色はオフホワイトなのだろう。カーテンの色が邪魔をして青みがかっているが、窓を開ければ明るい部屋になりそうだ。

もっと雑然とした部屋を想像していたのだが、8畳間のそこはやらとすっきりしている。

それはただ単に家具が少ないだけなのかもしれない。

目についた家具らしい家具といえば、テレビ台の上に大きなテレビ。その隣にCDラックとオーディオがあり、部屋の中にはテーブルが置かれている。

たった、それだけだった。

その部屋の隣にもう一部屋あるのか、わずかに開いているドアの間から、奥の様子が窺えた。そこをじっくり拝見しようと近寄ったとき、階段を上ってくる足音が聞こえた。

今日子は慌てて冷蔵庫の前に戻ると、レジ袋の中身を移すべく、取っ手を引いた。

「何これ……。ビールしか入ってないじゃん」

思わず声に出してしまうほど、そこにはビールしかなくて。缶ビールの銀色の胴体が雑然と並んでいる。

今日子はそれらを全部脇に寄せ、空いた隙間に食材をつめていった。その内にドアがきしむ音をたてて開き、バケツを持った啓二が玄関先に現れた。

緊張して思わず背筋を伸ばした今日子の後ろを、啓二はすっと通り過ぎていった。

そのまま窓辺に立ち、しゃっといい音をたててカーテンを引いている。

途端に、雨曇りな天気を感じさせない健康的な陽が部屋に射し込み、今日子はその眩しさに思わず目を細めた。

「今日さー」

窓辺に立った啓二が、肩越しに顔だけをこちらに向けていた。

今日子はレジ袋を漁る手を休め、逆光でよく見えない啓二の顔を見上げた。

「オレ、本当は待ち合わせの場所に行く前から決めてたんだー。掘ったアサリを食わせてもらおうと思って！」

啓二はそう言つと、身体ごとこちらに向き直った。

真っ黒なはずの髪が日差しを受けて茶色に透け、黄色いＴシャツから伸びた腕の、その輪郭だけが白く浮かびあがっていた。

「え？」

今日子は知らず知らずのうちに立ち上がっていた。

それはもしかすると、無意識に啓二の表情を見ようとしていたのかもしれない。

「？ 何だよ。急に立ち上がったちゃって」

啓二は、訝るような声で訊いたけれど。

でも今日子はこの時、啓二から受けたすべての意地悪を水に流せるほど、感動していたのだ。

その理由に、啓二は気付いていないのかもしれない。

「え？ あー、何でも」

今日子は再び冷蔵庫の前に屈み、レジ袋に目を落とした。

そのまま何食わぬ顔をして、袋の中身を移し始めた。

けれど、

彼はいま確かに、家を出る前から今日子と縁を繋ぐつもりでいたことを口にしたのだ。

それは啓二がボート小屋で告げた言葉が、その場の勢いで言った台詞ではないのを証明していて。

今日は自然と緩んでくる頬を撫でながら、作業を続けた。

## 20・不穏な空気1

夕暮れ時が近づいていた。

ここにきてやっと雲間から顔を覗かせた太陽が、昏間のじめじめとした天気を吹き飛ばすように照らし、啓二の部屋の床を焼いている。床に転がっていたCDケースの角に、光線が反射して。跳ね返った光が、壁に一際明るい円を描いていた。

啓二は床に座り込み、その光の円を見ていたが、そこから視線をキツチンに立つ今日子へと移した。

先ほどから今日子の様子が気になって仕方ないのだ。

信じられないことに、彼女はその場にじっくりとおさまっていた。

パツと見、派手な容貌が目につくせいもあるのだろう。

家事なんてできるわけがないと高をくくっていた啓二の予想を裏切り、今日子は相当に手馴れている様子で、先ほどから手を動かし続けている。

啓二としては今日子に料理の腕など期待しておらず、一緒に調理をすれば楽しいかな、と思っただけなのだ。

そのつもりで色々と材料を買ってきたのだが。

いまやどう考えても自分の存在は邪魔で。

手伝いを申し出ても、それが足を引っ張ることにしかならない気がして、啓二は部屋に大人しく引きこもり、テレビを見ていた。

まったく、人は見かけによらないものだ、と啓二は首の後ろを掻いた。

元カノは性格が温厚で大人しく、見た感じも古風な女だった。

けれど、家事全般にわたって何もできず、むしろ仕事楽しくて仕方ないといった働く女だったのだ。

その元カノと今日子をつい比べてしまうのは、ふたりが対照的であるからだろう。

それに、啓二の食生活はコンビニ弁当と外食が主だ。

栄養のバランスに気を遣っているつもりではいるが、それでも相当に偏っている自信があった。

しかしこの様子では　と、啓二は今日子の顔から、彼女の手元に視線を移した。

久々にまともな食事でありつけそつだ。

「なに？」

見られているのに気付いたらしい今日子が、怪訝そうな顔をしてこちらを振り返った。

啓二はぶしつけに彼女を眺めていた自分に慌て、何となく瞬きをした。そして、

「鍋とか……足りなきゃ下のキャビネットに、引き出物でもらった鍋があるよ」

と、求められてもいないのに、そんな言い訳を口にした。

言ったあとになって、変に思われたかと心配したが、今日子は不審に思わなかったようだ。再び手元に目を落とし、何かを切り刻み始めた。

ホッと息をつき、テレビの画面に目を移す。

テレビでは東シナ海で発生した台風が、台湾へ時速いくらで進んでいる。と、天気予報のお姉さんがパネルを片手に説明している。

もちろんそんな情報になど興味はないのだが、見るしかない。

啓二はテーブルに頬づえをつき、わざとキッチンに背を向けて、テレビの中の台風情報をじっと見ていた。

しばらくすると、被せた蓋の下でバターとアサリが跳ね返るけたたましい音が、台風情報の邪魔をし始めた。

それに紛れて、何か別の音がしている。

音だけではわからなかったのだが、床に置かれた今日子の携帯が発光していて。

どうやら耳を掠めるオルゴールのような音は、そこから流れているらしいことがわかり、啓二はその白い携帯を取り上げた。

「今日子、電話鳴ってるぞ」

手渡してやろう　と、そんな善意から手に取っただけなのに、サブディスプレイに光る名前が見えて。

『横山泰』と読めるその文字をとらえたとき、啓二の胸にちくりと棘で刺されたような痛みが走った。

「え？　ああ、ありがとう」

今日子はタオルで手を拭い、差し出された携帯に手を伸ばしている。視線は啓二の握る白い携帯に注がれていた。

啓二は何食わぬ顔をして手渡しながら、今日子がどんな顔をするのかが気になっていた。

受け渡した瞬間、彼女の頬が強張るのがわかって。

その電話の相手が、今日子にとって都合の悪い相手であると同時に、きっと自分にとっても面白くない相手だろうと直感した。

「もしもし」

今日子はキッチンに立ったまま、啓二に背を向けて話し始めた。

若干丸まった背中と、内緒話をするかのような声が、妙にやましそ  
うだ。

啓二はそんな今日子の様子に苛立ちを覚えて、高い音をたて続ける  
フライパンの火を止めた。

今日子は時折、うん、とか、いまはちょっと、などと、それだけで  
は話の内容が想像できない相槌を打ち、やがて外に出るつもりなの  
か、玄関へと移動していった。

それが余計に啓二の怒りを煽ったのかもしれない。

啓二は、上体を屈めてサンダルに足を通す今日子の腕を引く手繰る  
ように掴むと、部屋の中へと強引に連れ戻した。

携帯を握っている方の腕を引いたせいかわ、途中『昨日メール送った  
じゃん。その返事を聞こうと思って』と話す男の声が漏れ聞こえて

電話の相手はメールをやり取りする関係で、何かの返事を求めている  
らしい。

そして今日子はその男との会話を聞かれないかと思っっているのだ  
ろう。

と、そんな裏事情が透けて見えて、啓二は猜疑心を募らせた。

今日子は目を合わせたくないのか、足元に視線を落としていた。

携帯を両手で握り、耳に押し当てているのは、相手の声が漏れない  
ように守っているつもりなのかもしれない。

そんな今日子の内心を想像するにつれ、啓二はより一層不快な気持ちになった。

その激情が、どこからわき起こってくるのかはわからない。

ただ、他の男と隠れてこそこそ話をしようとする今日子に、言いよらない怒りを感じていた。

## 21・不穏な空気2

アサリの弾ける音がすっかりおさまったせいで、今日子の通話を遮るものは、テレビから流れるCMの音だけになった。

携帯から、時折今日子の名前を呼ぶ声が聞こえ、その都度今日子は当たり前障りのない返事をくり返している。

啓二は俯いたきり、こちらを見ようとしないうち今日子から目をそらし、やがて元の場所に腰を下ろした。

なんだか、バカバカしくなったのだ。

外へ出ようとする今日子を連れ戻したのは、つまりは電話を切らせたくてした行為だった。

なのに今日子は、聞かれたくないらしい相手からの電話を切りもしないで、延々と相手をし続けている。

つまり、そういうことか　と、啓二は頬づえをついた。

今日子の中での優先順位は、必ずしも啓二が1番なわけではないのだ。

それを考えると、ムキになっていた自分がまるで道化師みたいで。

啓二は先ほどの自分の行為がおかしく思え、口を歪めた。

今日子は身体をよじって背中を向けたり、天井を仰いだりと、そわ

そわとした様子を隠しもせず通話を続けていた。

が、CMがニュース番組に切り替わった頃だろうか。強引に話を終わらせにかかった。

「あのさ……ちょっといま、ご飯作ってて手が離せないから、明日にしない？」

この一言と、そのあとに続く何やら会う約束をしているような声が、啓二の怒りを再燃させた。

電話の相手は、どうやら納得したらしい。

今日子はいくつか駅前付近の場所を口にしたあとで、じゃあ明日ね、と通話を切った。

その携帯を切る指の動きが、啓二のわだかまりを放出させる合図になった。

「ここじゃ話せない内容だったわけだ？」

待っていたように口をついて出た言葉は、自分自身にも冷たく、嫌味臭く聞こえて。言い方を誤った、と啓二は後悔した。

けれど、そう思ったのは最初のうちだけだ。

驚いたように顔をあげたきり、何の弁解もしない今日子に対して、怒りは更に強いものになった。

「さっきの奴、誰？」

今日子は切った携帯を両手で握り、啓二と目を合わせていた。聞いた直後わずかに口を開いたが、結局何も言わないまま口をつぐみ、俯いている。

その煮え切らない態度が癪に障り、啓二は立ち上がると今日子のそばまで歩いていった。

一方、そこまで苛立っている自分にも驚いている。

そもそも、長くつき合った関係なわけではない。

顔を合わせたのは、今日でたったの3回目にすぎないのだ。

なのに、何をそんなに苛立っているのか　と、啓二の冷静な部分が訴えていた。

「誰だっつってんじゃねーかよ」

そばまで寄ってこられたのに怯えたのか、今日子は顔をあげ、身をすくませた。瞳は大きく見開かれていて、光る黒目に啓二がはつきりと映っているのがわかる。

小さな顔の中に、つり気味の大きな瞳が印象的で。顔をあげたことよってあらわになった白い喉が、その下まで滑らかな肌が続いていることを意識させ、エロティックだ。

啓二はそうして目の前に立ちすくむ今日子を見下ろしながら、胸の中の大半を占める苛立ちの正体について考えた。

いや、本当はわかっているのだ。  
惹かれている。きつと、思っていたよりもずっと強く。

啓二は、自身の独占欲の強さを自覚している。

それは持つて生まれた性なのか、それとも家族愛に恵まれなかった  
幼少期のせいであるのかはわからない。

とにかく確かなことは、啓二は自分がこれと決めた異性から、裏切  
られるのが許せないのだ。

そしていま、そういう目で今日子を見ていた。

「友達……」

今日子が、突然口をきいた。が、そんな言い分は、信用などできる  
わけがなくて。

「とてもそんな風には思えないけどな」

啓二は、今日子の苦しまぎれな説明を鼻で笑い、嘘つくなよ、と言  
った。

しかし、煽るような文句を口にする一方で、今日子に腹を立てて欲  
しいとも思っていた。

本当だつてば、と。

今日子らしくムキになって、顔を真っ赤にして否定して欲しかった。

けれど、啓二の期待するような言い訳はないままで。かわりに、迷いを振り切ったような声が耳に届いた。

「友達、だけど。ずっと前から告白してくれてた人で、返事を聞きたいんだって」

「なんでさっさと断らないんだよ？」

今日子が言い終わるか終わらないかのタイミングで出た言葉は、あげつらうような言い方に聞こえたかもしれない。

実際、啓二はひどく気がたっていて、せつかく今日子が本当のことを口にしていたとしても、それを皮肉るような返し方しかできないのだ。

いつの間にか、外は本格的な夕暮れを迎えていた。

西向きの窓から差し込む陽が、今日子の横顔をオレンジ色に染めて、伏せたまつ毛の影を頬に落としている。

その影が動いた　　と思った途端、真っ直ぐに見上げてきた今日子と目がかち合った。

「だって、ここでそんな話したくなかったから。でも、ちゃんと断るよ」

「会う必要はねーだろ？」

ああ言えば、こつこつ言う。

こんな言い合いは無意味だとわかっていながら、持ち前の独占欲がおさまりつかず、啓二は絡むように言った。

しかしその直後、

「まさかケージ、ヤキモチ焼いてるの？」

言われたくなかった一言をつきつけられて。

突発的にカツとなった啓二は、心にもないことを吠えたてていた。

「はあ？ ありえねえっつの。つーか、お前その男とつき合えば良かったじゃん。いますぐ帰って会いに行けよ」

感情に任せて吐いた言葉は、つき放すように冷たく部屋に響いた。

言いすぎだろ、謝れよと、冷静な自分が諭すけれど、子供じみた感情が邪魔をして素直になんてなれそうにない。

そんな啓二をあざ笑うかのような夕焼けが、紅潮して熱くなった頬を、じりじりと焦がしていた。

時間が止まったかのごとく思えた長い沈黙のあと、こちらを見上げていたネコのような瞳が西日を受けてきらきらと光った。

つき出された口唇は、ふるふると震えていて。

まずい。

啓二がそう思ったときには、つーっと今日子の頬を涙が伝っていた。今日子はぐいっと腕でそれを拭い、瞬きをくり返したあと背を向けた。

啓二は動くことができずに、帰り支度をはじめた今日子の背中を、呆けたように見ていた。

やがて。

「ホント、泰とつき合う方がよほど良かったかもね。こんなに子供みたいな人だとは思わなかった。さようなら！」

そう、噛みつくみたいなお声を残して今日子は部屋を出て行った。

八つ当たりをするみたいに激しく閉められたドアの音が、啓二の耳にいつまでも残っていた。

## 22・ペアシート1

月曜日は昨日の雨曇りが嘘のような夏日で、夜7時を回っていると、いつもの容赦なく射す西日が、待ち合わせ場所へと向かう今日子の横顔を照らしていた。

泰から指定されたのは、合コンの会場にもなった、あの洋風居酒屋。客が多いのがわかりきっているお店。

しかも酒が入るだろうシチュエーションで、告白の返事をしなければならぬなんて。

さすがの今日子も気乗りせず、自然と足取りが重くなるのだった。

「っーか、お前そいつとつき合えば良かったじゃん」

昨日啓二から焚きつけられた一言は、今日子の心の柔らかい部分を深くえぐって。

ひとりで歩いた帰り道も、ずっとその声が耳から離れなかった。

悔しさのあまり、そうすればよかったと、つい言い返したけれど。

啓二がダメだったからじゃあ泰で、などと器用に立ち回れる性格でもないから、考えるべくもなく泰への返事は決まっていた。

駅前の横断歩道は丁度ラッシュの時間帯ということもあり、会社帰りのサラリーマンたちでごったがえしていた。

たくさんの頭が上を向いているのは、大型スクリーンを見上げているからだろう。

ナイターに入った高校野球の第4試合は地元選出チームの対戦で、どうやら一点を争う好ゲームになっているようだった。

信号が青に変わり、人波を縫って進んでいた今日子は、デニムのポケットの内側で携帯が震えるのを感じた。

ディスプレイに点滅する名前は、里美。

今日子は人波から外れ、歩道を渡った先のコンビニで立ち止まり、携帯を耳に押し当てた。

「もしもしー？」

『あ、今日子ー？』

今日子は手で左耳を押さえ、若干聞き取りづらい里美の声に集中した。

里美とは、昨日のケーキバイキング以来だ。

半ばドタキャンのように席を立ってしまったから、後でフォローの電話を入れなければと思っていたのに、啓二に泣かされたあとの今日子には、そんな気力もなくて。

今日子はバツの悪さに顔をしかめ、回線の向こう側にいる里美の機嫌を窺った。

「里美、昨日ゴメンねー。途中で帰っちゃって。電話入れるのも忘れてたし……」

里美は、「え？」と訊き返したあと、思い出したように言った。

『ああ、OK、OK！ あれから実はさあ、ふらっと寄ったゲーセンで泰くん見つけたんだ。で、暇だからちょっとお茶して』

けれど。

「……？ あれ、里美？」

それきり電波が途切れたのか、里美の声は聞こえなくて。しばらくの後、完全に回線が切れたことを示す電子音が耳に届いた。

その後何度かかけ直してはみたけれど、ついに繋がることはなく、今日子は諦めて携帯をしまい再び待ち合わせ場所へと歩きだした。

携帯を閉じる前に見た時刻は、約束の10分前。

あと10分もすれば、顔をあわせづらい泰に会わなければならないのだ。

今日子はため息をつき、ビルの谷間へと落ちていく太陽に目を細めた。

夕焼け色に染まる街並みは、ビルも人も溶けていくようで。今日子

は気を引き締めると、暮れる寸前の風景に自らも飛び込んでいった。

顔を合わせた途端、泰は待ちかねたように居酒屋の中へと今日子を誘った。

「腹減ったあ。入ろうぜー」

夏休みに入って初めての泰は、ユーズドっぽい色合いのポロシャツにデニム姿で。右耳に3つ光るピアスだけが、教室で見る彼と同じだった。

今日子は泰に促されるまま、洋風居酒屋の店内へと歩を進めた。

直後、ききすぎた冷房が肌を刺して。汗が冷えて寒気に襲われた今日子は、店に入った端から手洗いを借りたくなった。

「いらっしやいませえっ」

平日のせいか、フロアにはまだ空席が目立つ。

ふたりの他には、会社帰りと見える男女が数組いるばかりだ。いずれも入り口からは見えにくい奥の席にしている。

「あたしちよっと化粧室借りてくるね」

今日子は向かってきた店員の脇をすぎ、居酒屋の奥を目指した。

通路のつき当たりを右に曲がったところにあるベンジャミンは合コ

この日のままだ。

化粧室の入り口に佇むその樹を見ると、いやでも啓二を思い出して、今日子は頭の中から彼の面影を追い払うように首を振り、化粧室へ入っていった。

今日子にとって初めてのカレである啓二とのつき合いは、結局数時間という短い期間で終わった。

きちんと別れ話をしたわけではないが、する必要もない。

なにせふたりは携帯の番号さえ交換していないのだ。

別れ話をするための連絡さえ取れない。

そんな関係がはたしてつき合ったと言えるのだろうか　と、今日子は遅れ毛を撫でつけながら思った。

化粧室の大きな鏡は、今日子の腰から上を映し出していた。

キャミソールを2枚重ねた下は、7分丈のデニム。

日頃は肩に垂らしている髪を、今日はシニヨンにまとめている。

いつもとイメージの違う服を着てみたのは、別の自分に生まれかわりたい願望と、猛暑対策を兼ねてのことだったが、後者については完全に失敗だったかもしれない。

化粧室を出ると、やはり冷気が肌に沁みた。

むき出しになったうなじから肩のラインが特に冷えて、今日子は手

のひらで二の腕を擦りながらフロアへ続く通路を歩いた。

角を曲がると、通路側のテーブルで手をあげる泰を見つけて。今日子はその口の片側を上げた笑顔を遠目に見て、やはり泰は啓二に似ていると思った。

つい口元にはかり目がいくのは、未練がそうさせるのだろうか。今日子は意識して目を逸らし、苦笑した。

泰の待つ席は、必ずしもいい場所ではなかった。

入り口から客が入るたびに席の脇を歩かれるし、外から熱風だつて入ってくる。

普段なら喜ぶべき席ではないのだが、寒さに震えていた今日子にとっては、少しありがたい。

今日子はコーナーを曲がり、泰の元へと歩み寄った。

そしてテーブルの脇にたどり着いた時、その異変に気付いた。

「何これ」

本来ならテーブルを挟んで向かい合はずの椅子が無い。

その代わり片側にだけペアシートが置かれていて、端っこに詰めるみたいにして泰が座っている。

「今日はカップルデーなんだなー。まあ確信犯なんだけど！ ペアシートはドリンク100円だよ。お得だろー？」

そう言って泰は、ピンク色のペアシートの間隙をぼんぼんと叩いた。

「ほらあ、座って！」

立ちつくしたままの今日日に焦れたのか、泰は腕を掴んできて。今日子はその隙間に腰を下ろした。

案の定、ペアシートは狭かった。

身体がそこかしこが密着し、触れ合った部分からは泰の体温が流れ込んでくる。

その温もりが気にならなければいいのだが、冷えた素肌には心地よくて。今日子は、泰の体温を気持ちいいと思っている状況に危機感を覚えた。

「これ恥ずかしいよ。別の席に移れないの？」

「なんで？ イヤなのー？」

メニューを捲っていた泰が、急にこちらを向いて。その距離の近さに今日子は思わず上体を退いた。

「そんなに身構えられたら傷つくじゃん」

「え？ ああ、そんなつもりじゃ」

泰の眼差しは、口調ほど軽薄そうではない。いつになく真顔で、軽くあしらえない雰囲気があった。

けれど。やはり、この席は移りたいのだ。

泰の気持ちに応えてあげられないのだから、変に気を持たせないほうがいい。

そう思って今日子が口を開きかけた時だ。

「あれえ？ 今日子？」

新たに来店した客を出迎える威勢のよい掛け声に続き、背中から素っ頓狂な声が聞こえて。

驚いて振り返ると、そこには仕事帰りなのかやたら大人っぽい雰囲気、気の里美が目を丸くして立っていた。

「おっ、里美ちゃんじゃーん」

一緒になって振り返った泰が、里美に気付いて立ち上がったのだから。急にペアシートの片側が、浮き上がるのがわかった。

つられて自分も立ち上がったけれど、  
そうすることによって今日子は、入り口から注がれる別の視線を直接浴びることとなった。

もう二度と会うことなどない。

今日子は確かに、そう思っていたのだ。

なのに。

ボサツとした無造作な黒髪。

気の強そうな眉は片一方だけが上がっていて、いま彼がすこぶる不

機嫌であるらしいのが伝わってくる。

奥二重の瞳は、顎を引いているせいか睨んでいるようで。いつも笑っているように見える口元は、今日に限って無愛想に引き結ばれている。

彼こそは、今日子にとっていま最もこの場に居てほしくない人だった。

今日子は足を踏ん張り、無遠慮に寄越される視線にじっと堪えた。

その眼差しは貫かれそうなほどに強くて。

さっき見た夕焼けと同じくらい胸をひりひりと焦がした。

## 23・ペアシート2

まさか、ここで会うとはねえ、と里美は言った。

「さっき電話したじゃん？ あの時、丁度伊方のトンネルに入っちゃってさ。電話切れちゃってごめんね。うちのバイト先、今日が給料日だから皆で飲みに行こうって話になってさあ」

「そうなんだ」

里美の話に耳を傾けながらも、神経は相変わらず入り口に立っているだろう啓二の気配に集中していて。今日子は相槌を打つ一方で、そわそわと落ち着けずにいた。

「新垣さんが、今日子ちゃんも誘えば？ って言うから、店に着いたら電話を掛け直そうと思ってただけど、どっちみち先約アリだったわけね」

含み笑いを漏らした里美の後ろを、啓二が横切っていく。

こっちの方をちらとも見ないまま、ずんずんと奥へ進んでいく後姿を、今日子は目で追いかけた。

すっと伸びた背中からは、さっき感じた機嫌の悪さはどこにも感じられない。

それが逆に、無視されたみたいで。

今日子は、針でちくりと刺されたような痛みを覚えた。

「それにしてもさ、あんたたち、いつの間？」

啓二の姿が通路の先に消えた頃、観葉植物の植え込み越しに身を乗り出してきた里美の声に、今日子はハツとなった。ペアシートのことなど、すっかり忘れていたのだ。

「ラブいシートに座っちゃってさ。もしかして、昨日あたしが泰クンを急かしたからかな？」

「あは、うらやましいだろー？」

そう言ってじゃれつくように、泰は今日子の肩を抱き寄せてきた。

「シートは格安料金だから座ったんだけど、昨日の忠告は身に沁みたよ」

と、肩にまわした腕に力を込める。

それが、妙に異質な感触で。今日子は急激に身体が強張るのを感じ、そして次の瞬間には、その腕を振り払っていた。

突然の乱暴な動作は、きつとふたりを驚かせただろう。

泰の細い目が、めいっばいに見開かれていて。茶化してニヤニヤと笑っていた里美も、いまはぼかんと口を開けている。

今日子によって振り払われた泰の腕が、空に浮いたまま行き場をなくしていた。

「あ、ごめん。あたしここの慣れなくて」

慌てて弁解したけれど、泰の表情は硬いままだ。

「今日子はここの見えて案外お堅いからね。むやみに触ると痛い目見るよ！ ってなわけで、あたし行くね？」

すっかり雰囲気が悪くなった中、里美は取り成すような一言を告げて連れの後を追っていった。

泰は、振り払われた手を開いたり閉じたりして所在なげに振舞ったあと、ようやく身体の横に腕をおろした。

本来は、ムードを盛り上げるためのペアシート。  
しかしその趣旨に反して、今日子と泰の間には重い沈黙がたちこめていた。

席を移動したい気持ちは山々なのだが、さっきあんな態度をとってしまった以上、こちらからは切り出しにくい。

気まずい空気に嫌気がさしているだろう泰が、自発的に申し出てくれたらと、今日子は期待していた。

「さーて、食べよっか」

泰のビールと今日子のジントニック、その他注文した料理が運ばれだした頃、泰は、さっきのことは水に流すといった態度で、何もな

かったかのように振舞いはじめた。

そうになると、今日子もそれに従うしかなくて。前に並んだ料理をつつきながら、泰のお喋りに耳を傾けた。

彼は最近ハマっているネットゲームのことや、部品を買い集めてスベックの高いパソコンを組み立てたことなど、夏休みに入ってから  
の近況を順を追って話していた。

それらはどれも、所謂当たり障りのない話だ。

泰は沈黙を恐れているかのように、会話が途切れそうになると、違う話題を提供し続けていた。

やがて。

「今日子ちゃんさー？」

そう口にしたつきり泰は黙り込んだ。

どうやら、そろそろ本題に移ろうとしているのだろう。

泰は落ち着かない様子でおしぼりを手に取り、何度も指を拭い始めた。

今日子はいよいよ高まってきた緊張感に、ジントニックを一気にあ  
おった。

身体の内側が次第に熱くなって、少々酔っ払ってきたのがわかる。

今日子は酔いに任せて、彼が切り出してくるだろう告白を、つつぱねようと身構えていた。

その時。

「申し訳ございませんお客様、こちらにどうぞーっ！」

隣の広いテーブルに、集団らしい客が導かれてきて。

頭を下げた店員の向こうにある顔ぶれを見て、今日子は息をのんだ。

奥の個室エリアに一旦は移動したはずの啓二たちが、隣のテーブルへと連れてこられたのだ。

「あれ？ 今日子ちゃん、じゃない？」

聞き覚えのある声の主は新垣である。

新垣はあの日と変わらない爽やかな様子で、顔を見た途端「やつぱり！」と白い歯を見せた。

「久しぶりだね。って、そちら、カレシ？」

「え？ お久しぶりです。いえ、あの、友達ですよ！」

ふと、新垣の後ろに、啓二の姿が見えて。

同席する女の子の椅子を引いているのだろう。

自分には見せたことのない紳士的な対応に嫌でも腹が立ち、今日子

は作った笑顔がひきつるのがわかった。

新垣は顎に指をかけるポーズで、意味深に「ふうん？」と微笑み、

「隣、ちょっと騒がしいかもしれないけど、ゴメンね？」

と告げ、通路を挟んで隣に位置する席に座った。

今日子は曖昧に笑い、身体ごと泰に向き直った。

正面を向いていたなら、通路を挟んで斜め前に座る啓二について目がいきそうに嫌だったのだ。

「今日子ちゃん、あの人知り合い？」

思わぬアクシデントにより空気が乱されたからだろう。先ほどまでペアシートに充満していた緊張感も、跡形もなく消え去っていた。

かわりに、新垣を不審そうに窺う泰の目があった。

「あ、うん……」

里美のバイト先の人たちだよ、と一言付け加えようとした時、ポケットの携帯が震えた。

メール受信は、里美だ。

『ごめん、今日子！ 派遣のバイトのこと、泰クンに口止めして。バレたら停学になっちゃっよ』

まったく、しょうがないな　と、今日子は里美に目配せをした。泰に向き直り、耳元に口を寄せる。

「あのさ？　泰、ちょっと耳貸して」

「んー？」

けれど、事情の説明が半分過ぎた頃だろうか、突然泰が震え始めて

何かと思えば、

「ちよーつとたんま！　クッククク。ごめん今日子ちゃん、俺さ、耳弱いんだよね。なんつーか性感帯なわけ」

声も絶え絶えに、そんな言い訳をしてきて。

今日子はその後半部分を耳にした瞬間、沸騰したみたいに血が上り、泰に手を振り上げていた。

「あつ、あんた！　変なこと言わないでよ」

思いのほか大きな声が出たのは、きつと合コンでの王様ゲームを思い出したからだ。

今日子は大袈裟に頭を庇って逃げようとする泰の背中をひと叩きすると、ジントニツクの残りを全部あおった。

冷たさが喉を伝って流れ込むけれど、どくどくと脈打つ鼓動はおさまらない。

今日子は熱くなった頬を手の甲で押さえ、羞恥がすぎるのを待った。

「　　なーんか、超楽しそう。いいなあ、ペアシート」

不意に聞こえてきた声に顔を向けると、合コンの席にもいたケイという名の女の子がこちらを見ていた。

あの時と同じく啓二の隣に座り、左手を彼の肩に載せて寄りかかっている。

その様子が癪に障って顔をそむけた途端、背中から「じゃあ、俺と座るか！」と笑う新垣の声が聞こえた。

一瞬だけ目を掠めた啓二は、丁度天井を仰ぐようにしてビールを飲んでいて、表情を窺うことは出来なかった。

けれど　　と、今日子はジントニックのおかわりを店員に注文した。

けれど、どうせ満更でもないに違いない。

奴はそういう男なのだ。

## 24・あんなんか

3杯目のジントニックを飲み干した頃には、今日子の警戒心は相当に薄れていた。

それは、結局最後まで伝えることのできなかった里美の伝言や、隣に座る泰の肩や腕が密着していることを含め、何もかもについて、だ。

よく考えてみれば、どうでもいいはずがないのだが、つまりは酔っ払っていた。

そして4杯目がいま手元にあり、泰も同じような杯数を重ねている。

隣のテーブルからは賑やかな笑い声が波のように起こっては消え、その中に啓二の声が混じっているのが、今日子の耳にも届いていた。

何かのゲームをしているのだろう。

時折、一気飲みを急かす掛け声や、初体験の思い出話を披露する声が嫌でも聞こえてきて。テーブルがひとつ違うだけで、こんなにも場の空気が違うものかと、今日子はため息のぞる思いだった。

というのも、隣のテーブルが罰ゲームに盛り上がっているいま、いよいよ本題に入りそんな雰囲気は今日子たちのテーブルにたちこめているのだ。

なにせ、隣はゲームに夢中なのだ。

泰にしてみれば、その喧騒に紛れて、という気持ちがあるのかもしれない。

酒が入っているせいか、泰の瞳は濡れたように光っていて。少し汗ばんだ手のひらが、密着した膝の上で今日子の右手に重ねられていた。

もちろん今日子自身もそのことに気付いているのだが、酔っ払ったいまとなつては泰の手を振り払うような過敏さもなく。ただグラスを傾け、じつとしていた。

「ねえ、今日子ちゃん？」

泰は、今日子に比べればアルコールの耐性があるのかもしれない。目つきは若干とろんとしているものの、しっかりとした口調で話を切り出してきた。

「んー？」

「昨日、里美ちゃんが言ってたんだけど。合コンの人と怪しいかも、って本当？」

今日子は枝豆に伸ばしていた手を一旦止めて、泰を振り返った。

先ほど里美と泰のやり取りに出てきた？忠告？というのは、そのことだったのだろう。

ケーキバイキングを中断させた電話の内容を、どうやら里美は泰に話しているようだった。

「合コンに行った、なんて話も初耳だったんだけど。マジで今日子ちゃん、合コンなんかで知り合った男と連絡取り合ってたの？」

泰はポテトフライを口に放り込み、

「言っとくけどさ、今日子ちゃん。合コンは、基本、遊びだよ」と言った。

今日子は泰の手元から右手を引き抜き、ジントニツクのグラスを両手で持ち上げた。

瑞々しい緑のライムが、グラスの縁に刺さっている。

その皮の部分に目を落としているのに、視界の隅に入る啓二の姿がひどく気になっていた。

俯いたきり、何も返事をせずにいたせいかもしれない。

泰は苛立ったように今日子の腕を掴むと、目を合わせようとするみたいに、隣から覗き込んでくる。

その様子がやたら真剣そう。今日子は掴まれた腕の先にある泰へ、顔を向けた。

「持ち帰って、セックスできりゃラッキー。それが男の本音、ってやつだよ？」

「うん……」

実際、啓二がどういうつもりだったかは別にしても、新垣などは泰の言葉通りだったはずだ。

今日子は曖昧な返事をしたあと、いまも視界に入っている啓二の存在を意識しないようにして口を開いた。

「合コンは行ったけど、別に何も無いよ。里美が面白がって、大袈裟に言ってるだけだから」

もちろん、嘘だ。

良心が痛まないわけではないが、しかし啓二とは数時間のつき合いで終わったのだ。

無かったことにしてしまったほうが楽だし、これまでの経緯を細かく話すのも嫌だった。

泰は最初こそ疑っているような目をしてはいたけれど、その内「なんだ」と表情を和らげた。

「良かった。本当だったらどうしようかと思った」

ため息まじりの声は、安堵のあらわれだろう。

今日子は、そんな泰の様子に後ろめたさを感じて顔をそむけた。

その時だった。

隣のテーブルから、一段と大きな歓声がわいて。

ふと、視線をそちらに移すと、啓二とケイのキスシーンが目飛び込んできた。

まさか、と一瞬目を疑ったけれど。

まばたきをした後も、その光景はかわらなかった。

口唇が重なり合う瞬間、ふたりは示し合わせたみたいに瞼を閉じていた。顔を傾けて、引き寄せられるように、自然に。

目を吸い寄せられたのは、きっと今日子ばかりではないはずだ。

いくつもの視線が集まっているだろう中で、ふたりはゆっくりと時間をかけてキスをしていた。

その間今日子は目をそらせないまま、ふたりの様子をじっと見つめていた。

やがて、口唇が離れたあとの啓二は妙に頬が緩んでいて。含み笑いを浮かべた口元も、どこかデレデレしたように見えた。

「　　すげえな、キスしてるじゃん」

泰も一部始終を見守っていたのだろう。

感嘆とも、あきれともつかない声をあげて。それが今日子を我に返らせた。

「え？　あ、ああ。すごいね」

今日子は慌てて啓二から目を逸らすと、氷ばかりが目立つグラスを一気にあげた。

「あ、今日子ちゃんのグラス、空になっちゃったね」

乱暴にあおったせい、口の端から雫が垂れている。

今日子はそれを手の甲でぐいっと拭くと、店員を呼ぶべく、チャイムに手を伸ばした。

それはもちろん、追加を注文するつもりで、だったのだが。

「ねえ今日子ちゃん？ まだ飲むならさ、向こうのバーに行かない？」

伸ばした手を、即座に握られて。

今日子は自分の手を掴む日焼けした右手から、泰の顔へと視線をずらした。

この居酒屋に隣接するバーは、カップルのたまり場だ。

実際にそこへ入ったことなどなくても、それは誰しも知っていることだった。

外からは中の様子が窺えないように照明が落とされ、どことなく怪しいムードが漂っている。

合コンでも一組、また一組と、次々にメンバーたちが姿を消した場所だ。

そこへ誘われているということとはつまり、メールの返事を遠まわしに聞かれているのと同じなのではないか。

酔っ払って思考能力が低下しているとはいえ、今日子の胸には、確かにこのとき警鐘音が鳴り響いていた。

けれど。

「いいよ、行こうか」

そう返事してしまったのは、迂闊に返事をするべきではない、と今日子を戒める心の声よりも、もっと強い気持ちがあったからだ。

嫌でも啓二の姿が目に入るこの場所に、これ以上居たくなかった。

ペアシートから立ち上がったとき、酔いが足にきているのが自分でもわかった。

今日子は顔を伏せ、隣のテーブルの誰とも目を合わせないようにして、泰の後ろに続いた。

泰は当たり前のように今日子の分まで精算を済ませ、デニムのポケットに財布をしまっている。

そのままこちらを振り返ると、躊躇いの感じられない手つきで今日子の手を握ってきた。

今日子はぼうつと靄のかかる頭の中で、これじゃふたりは、誰の目にもカッパルに映るだろうな、と思っていた。

実際、泰の方はその気でいるに違いない。

そして今日子の方も、それは違う、と抗う気などなく、このまま状況に身を任せてみるのもいいかな、と諦めていた。

もう、うんざりなのだ。啓二のことで心を乱されるのは。

そんなことよりも、泰についていく方が、よほど楽だった。

ほどなく通路の先にベンジャミンが見え、バーへ続く曲がり角にさしかかった。

いままでは、ただ通り過ぎるだけだった曲がり角。

そこを初めて曲がったあと、今日子は急に視界が暗くなるのがわかった。

ペアシートに座っているときは、ただのオフホワイトに見えた泰のTシャツが、青白く浮き上がって見える。

それはライトのせいだろうか。

通路の天井から、青い色のライトがふたりを照らしていた。

やがて。徐々に闇が深まっていく通路も終わりが見えて、今日子たちはバーの入り口に辿り着いた。

入り口は、熱帯の樹々が両サイドからアーチをつくり、ジャングルのように鬱蒼としている。

すでに辺りは真っ暗で、目の前を歩く泰のTシャツだけが、道しるべのように光っていた。

今日子はあたりを見回し、周囲に目を凝らした。

けれど、まだ目が慣れないせいか何も見えず、ただ泰に導かれるままに足を進めていた。

その時だ。

「おいっ」

「え？」

背後からいきなり呼ばれたかと思えば、引っ手繰るように腕を掴まれて。その拍子に、泰に握られていた手がするりと離れた。

衝撃が強くて、転ばないように体勢を整えるのが精一杯だ。

そのまま強引に引きずられ、元の通路へ出る間際、一層強い力で引っ張り出された今日子は、壁にしたたか背中を打ちつけた。

もともと酔っ払っていたせいもあり、ふらつく足元では堪えきれない。

「痛っ……」

今日子は壁に背中を凭せ掛けたまま、ずるずると座り込んだ。

視界が急に翳ったのは、地べたに座りこんだせいだけではない。

目の前に誰かが立っているのだ。

顔を見なくてもそれが誰なのかくらいは、今日子にもわかっていただけけれど。

「ちょっと、何だよあんた。今日子ちゃん大丈夫？」

突然拉致された今日子を追い、バーから泰が飛び出してきた。

差し出されたその腕に掴まるうと今日子が手を伸ばしたとき、目の前に立つ啓二が泰の腕を叩き払った。

「うるせえよ、お前には関係ない」

パシンと濁いた音が通路に響いたあと、それを追いかけるように啓二の怒鳴り声が続いて。今日子は目的を失った手を引っ込めると、自分を見下ろす啓二へと顔をあげた。

啓二は身を屈めてこちらを見ていた。

視線が絡むと、間合いを詰めてきて。いつしか今日子の視界には、啓二しか入らなくなっていた。

嫌でも目に入る彼の顔は、気の強そうな上がり眉が少し寄せられて、間に皺を刻んでいた。

少年っぱさを残す瞳は、冷めたような、つまらない物でも見るような目つきで。

さつきケイとキスしていた口元は片側だけがやや上がっている。その口が開いたつぎの瞬間、押し殺した声が耳に届いた。

「どづいつつもりだよお前」

啓二はそう言うと、存在感たっぷりの眉を片側だけ上げた。

その様子は、返答を待っているというよりも、まるで脅しているみたいで。今日子は考えるよりも先に、口を開いていた。

「どづいつ、って。あ、あんたに関係ないじゃん」

呂律が回らないのは、酔っているからではない。

壁際いっぱいまで追いつめられたせい、心臓は破裂しそうなほど高鳴っている。

その怯えにも似た感情のせいで呼吸がうまくできないでいたのだ。

じいつと見据えてくる啓二の目から、逃げるように視線をそらした瞬間、走り去っていく泰の足が見えて。今日子はハッと我に返り、泰を呼び止めるべく手を伸ばしかけた。

なにも事情を知らない泰にとって、この状況は異常に違う。もしかすると、店員を呼びにいったのでは。そんな予感がしたのだ。

けれど。

「どこ見てんだよ」

泰に気を取られたのが、余計に啓二を煽ったのだろうか。

「関係なくねーだろが。何なんだよ、お前は。さっきから黙って見てりゃイチャイチャしゃがって。このバカ女！」

伸ばしかけた手を掴まれて、その痛さに今日子は歯を食いしばることにとなった。

啓二は、何か文句あるのか、とでも言いたげな面構えだ。威圧するみたいに上から見下ろしたまま手を離そうとしない。

今日子はここにきて、啓二の理不尽な責め立てに怒りがこみ上げていた。

去っていく泰を止めようとしたのは、店員を呼ばれたら都合が悪い  
と思ったからだ。

なのに、バカ女とまで呼ばれて。

今日子は腕を乱暴に振り払うと、床に手をつけて立ち上がった。そ  
して同じく立ち上がった啓二に向かって、顎を上げた。

「イチヤイチヤなんかしてないじゃん。それはあんたの方でしょー  
？」

いきりたった今日子の声は、普段より2割増しに大きなものとなっ  
たが、しかしその後半部分は上から被せるみたいなき啓二の声にもみ  
消された。

「はあ！？ オレは断じてそんなことはしてない。お前と一緒にす  
んな、つつの、バーカ」

啓二はバーカ、に合わせて、更に一步前へと踏み出した。まるで、  
威嚇するみたいに。

今日子はそれが悔しくて、ぐっと睨みつけていた。

一步も退くもんか と、そんな覚悟を踏ん張った足元にみなぎら  
せていたのだ。

けれど。

「おい、コラッ岡田ッ！ 人様に迷惑かけてんじゃねえよ」

そんな意地のぶつかり合いは、泰が呼んできたらしい新垣によって

中断させられた。

バタバタと落ち着かない足音に続き、横からぬっと腕が伸びて。啓二の身体が引き離されたあと、不安そうな目をした泰や里美、派遣の女の子たちの姿が今日子の視界に入った。

泰が、こちらを凝視している。

横顔にその視線を痛いほど感じながら、今日子は新垣の腕を振りほどこうともがく啓二だけを見ていた。

「うっせえ、放っとけ！ このバカ女とまだ話が終わってねーんだよ」

啓二はそう怒鳴る間も、今日子から目をそらさないままだ。それはまるで、先に目をそらしたほうが負けというルールでもあるみたい

に。

新垣を押しやると、啓二はまた今日子ににじり寄った。

「今日子、よく聞いとけよ？」

そして念を押したあとで、ぶちまけるように言った。

「オレはな、男にだらしない女は大っ嫌いなんだよっ！！」

一瞬、辺りがしんと静まり返るのがわかった。

周りには、ふたりを取り囲むいくつもの姿があるのに、誰ひとりとして微動だにしない。

その静寂が、尚更今日を追いつめていた。

今日子はずま先から頭のとっぺんまで恥ずかしさがつき抜け、身体の芯がカツと熱くなるのがわかった。

これではまるで、自分が男にだらしないみたいだ。

啓二は、間違ったことなど何も言っていないような顔つきで。相変わらず非難がましい目をこちらに向けたままだ。

今日子はわなわなと震え出す両手を握り締め、力を振り絞って吠えたてた。

「あたしがっ。あたしのどこが男にだらしないって言うのよっ！」

そしてふたりを取り囲むギャラリーの中　ケイの姿を認めると、彼女を指差して啓二をなじった。

「ケージの方こそ、あの子とキスしてたじゃん！　デレデレしちゃってさあ」

そうだ、啓二はキスをしていた。

そのことを持ち出したのは、今日子をだらしないと言った啓二に、一矢報いたい気持ちがあったからだ。

けれど。

今日子はそれを口にして初めて、自分がひどく傷ついていることを知った。

「バカ言ってるじゃねえよ。罰ゲームなんだから仕方ねーだろがっ」  
啓二が、さも当たり前だと言わんばかりに反論をしている。  
片眉を上げて、ふてぶてしい面構えで。

それを切り返して、もっとひどくあげつらってやりたいのに。  
ぶつけてやりたい文句なら、口の中にあふれ返っているのに。

今日子はそれっきり、声を出せなくなってしまった。

何か言おうとしても、喉が締めつけられたように苦しくて、言葉に  
ならないまま終わる。

だからせめて、射殺すくらいに睨んでやろうと顎をあげた。  
けれど。

「今日子、悪かったよ。もう泣くなっば」

やがて、おずおずと伸びてきた啓二の腕に、すっぽりと包まれて。  
今日子の視界は、再び啓二だけに閉ざされてしまった。

ふと鼻についた臭いは、昨日ボート小屋で嗅いだのと同じものだ。  
今日子は、気が付けばその胸にすがりつき、泣きじゃくっていた。

## 25・夜の公園

居酒屋の通路で派手な痴話喧嘩を披露したふたりは、じきにやってきた店員に苦情を申し立てられることとなった。

取り囲んでいたはずのギャラリィたちは、気を利かせたのか、それともバカバカしくなったのか、いつの間にやら消え失せている。

居酒屋を出ると、啓二は今日子の手を引いて、合コンの夜に通りがかった公園へと足を踏み入れた。

ペンキの剥げたジャングルジムがひっそりと佇む夜の公園は、寂れた印象で人気もない。

顔を上げると、夜空に浮かぶ丸い月が目に入った。

その脇の水銀灯には夏の虫たちが吸い寄せられ、飛び交っている。

昨日の雨に洗われた木々の葉は、月と水銀灯の光を受けて、夜なにくっつきりとした緑色の輪郭を浮かび上がらせていた。

「ここに座ってて」

丸太を組んだようなベンチに今日子を座らせると、啓二は砂場のそばにぼつと立つコーラの自販機へ、ひとり向かった。

けれど、小銭を投入したあとになって指が止まって。

啓二は自分が、今日子の何も知らないことに気付いた。

彼女は何が好きで、何が嫌いなのだろう。  
たったそれだけのことさえわからない。

なのに、大勢の見ている前であんな大喧嘩をするなんて　と、啓  
二には先ほどまでの自分がおかしく思えてきた。

悩んだ拳句、無難にオレンジジュースのボタンを押す。

鈍い音と共に落ちてきた缶を拾いあげ、啓二はベンチで待つ今日子  
を振り返った。

彼女は、月を見上げているようだった。

小さな頭。長い髪をまとめているせいか、今日は首の細さが目立つ。  
水銀灯の仄かな灯りに照らされた彼女は、顔も、喉も、むき出しに  
なった肩のラインも、そのすべてが不健康なほどに白く見えた。

啓二は、今日子の顔から胸元へと視線をずらした。

細いストラップに吊るされたキャミソールは、鎖骨の下まで広くあ  
いている。

前屈みになれば、きっと胸の谷間まで見えてしまうだろう。

ぴったりと身体の線に沿ってはりついた生地は、胸の下あたりで皺  
を作り、その上にある膨らみの重さを物語っている。

そんな様子を見るにつけ、啓二はまた怒りがこみあげてきた。

なぜ、今日子の服装にまで腹が立つのか、答えはいたってシンプルで。啓二はその理由に、とつくに気付いている。

今日子のことを好きになってしまったからだ。

好きだから、あのような薄着で知らない男とシートに座る姿を目にしたときは、不愉快極まりなかった。

それにしても、この厄介な感情はいつからなのか　と、啓二は記憶の糸を手繰り寄せた。

他の男と電話で話す今日子を見たときか。

それとも、ボート小屋で彼女が泣き出したときか。

花火大会や、合コンの帰り道はどうだったか。

やがて今日子がこちらに視線を移したのをきっかけに、啓二は考えるのをやめた。

考えても仕方のないことだ、いまとなつては。

確かなことは、もう引き返せないところまで、気持ちが高まっているということだけなのだから。

「ほら、飲めよ」

缶を差し出すと、今日子は大人しくそれを受け取っていた。

なのに、啓二が隣に腰を下ろした途端、間をあけるかのごとく隅に身体をずらした。

いまは缶を両手で握ったまま、俯き、黙りこんだままだ。パツと見た感じでは、起きているのかどうかもわからない。伏せたまつ毛が時折瞬いているのだから、起きてはいるのだろうか。

それにしても、つい先ごろまで啓二の胸にすがり、泣きじゃくっていたとは思えないほどの他人行儀っぷりである。

無言作戦を決めこんだふうの今日子に、啓二はいささか困っていた。

啓二の方も、実のところ女扱いに長けているわけではないのだ。

しかし、なにしろ昨日は喧嘩別れをしているふたりだ。未だに互いの連絡先さえ交換していない間柄なわけで。

今日こそは関係を進展させなければならなかった。

啓二は考えあぐねた拳句、今日子の気性を利用してみてはどうか、と閃いた。

頑張ったところで、新垣のように上手い口説き文句を出せるわけではないのだ。

それならいっそ、今日子を怒らせて、こちらを向かせる方が簡単だと思えた。

「もう一度言っけどな」

啓二はそこで一旦切ると、残りの文句を一気に吐き出すべく、息を吸い込んだ。

「オレは男にだらしない女は大嫌いだ。よく覚えとけよ？ それと、男に会うときは薄着をするな。それと、お前せつかく生意気に

生まれついたんだから、触られたら大声を出してでも抵抗しろ。やられっばなしになってんじゃねーよ」

「……あんた何の権限があってそんなこと言ってるの？ 関係ないじゃん」

どうやら、啓二の作戦は成功したらしい。

先ほどまでのしおらしさはどこへやら。

今日子はぐつと顎を持ち上げ、反抗的な眼差しをこちらに向けてきた。

「関係あるある。言いたいことなら山ほどあるぞ」

「関係ないってば！ あたしがどんな服を着ようが、あなたには一切関係ない」

夜も更けてきた公園に、ふたりの言い合う声が響いている。

その間を掠めるように、電撃殺虫器に飛び込んで死んでいく、虫の儂い音が鳴っていた。

今日子はつり気味の大きな瞳を見開いて、啓二をキッと睨みつけている。

「あんたって呼ぶなと何度も言ってるじゃねえか。大体お前は男の変態率を甘く見すぎてんだよ！ 気が強いのも結構な話だけどな、所詮女の気が強いなんて口ばっかじゃねえか」

「あんただって、ずっとお前って呼んでるじゃん。何が男の変態率よ。確かにあんたはそういう人間かもしれないけど、あたしの周り

は健全ですから！ 余計なお世話よ」

こんなはずではなかったのだが と、啓二は拳を握り締めた。

ホンの少し反応を引き出せば、それで良かったのだ。なのに、相手をしているうちに腹が立ってきて。

啓二は予定外の成り行きに危機感を覚えていながら、エスカレーターしていく喧嘩に終止符を打つことが出来ずにいた。

「あたしのことをとやかく言う前に自分自身を振り返ってみたら？ いい年して居酒屋でゲーム？ しかも同僚と？ バカじゃないの？ デレデレしてうれしそうにキスマでしちゃってさあ。あんたを見てると、確かに男の変態率は高いのかもと頷けるわ。とにかく、あたしがどんな格好をしていようがあんたには関係ないから！ 口出しするのはやめてよね」

今日子は早口でまくしたてると、つんとすました顔をしてそっぽを向いた。

頬を膨らませ、口唇を尖らせているのが、横顔からはっきりと窺える。

「はあ？ アホか、お前は。人が心配してやってんのに何て言い草だよ」

「そういうのがお節介だ、って言ってんでしょ。まったくうざいんだから」

「うざいだと？ 人の注意に少しは耳を貸したって罰は当たらないんじゃないねえのか」

「うーぎーいーうーぎーいーうーぎーい！ 関係ないじゃん。なん  
で口出してくんよ」

「ああクソ、うるせえ！ 好きだからに決まってんじゃねえか」

風が、そよいだ。

遊歩道に点々と植わった木々の葉が、擦れあってサラサラと音をた  
てている。

電撃殺虫器も、虫の断末魔の音を変わず響かせていて。

けれど。ふたりの周囲だけは、何かがつぽりと抜け落ちたような  
静寂が広がっていた。

ついさっきまで、さんざん憎まれ口を叩いていた今日は、電池が  
切れた人形のように動きを止めている。

ネコ科の動物を思わせる大きな瞳は、焦点がぶれることなく、くる  
んと上を向いたまつ毛も、微動だにしないままだ。

「好きだ」

ぷっくりと赤い口唇が、何か言葉を発しようとしたのか、少し開い  
た。

しかしそれは声になる前に、啓二が打ち消してしまった。

ホンの数秒だけ重ねた口唇は、勢いづいての不意打ち行為だったけ  
れど。

啓二は、とりあえず決めるべきところを決めた充実感に満たされて

いた。

今日子は驚きのあまり声も出せないのか、目をまん丸にして見開いている。

そんな彼女の男慣れを感じさせない反応も、啓二の気に入っているところだ。

内心ガッツポーズの啓二は、満足げに今日子を覗き込んだ。時間が止まったままの彼女に、ニツと微笑みかける。

その笑みが、魂の抜けたような今日子に、息を吹き返させたのかもしれない。

今日子は、瞬く間に紅潮していった。

鎖骨のあたりから、首へ、そして頬へと。

やがて完全に赤く染まった後は、額に汗まで浮かばせている。

その様子はまるで桃のように可愛らしく、啓二の目には映った。

なのに。

「あ、あつ、あんた何すんのよ」

今日子は全身の力を振り絞るようにそう言って、手の甲でぐいっと口を拭った。

わなわなと震える口唇は、照れているふうにはとても見えない。

むしろ、怒っているかのように見受けられる。

そしてそんな憶測を決定づけさせる一言が、続いて吐き出された。

「汚い」

予想外のきつい言葉に、啓二は思わず反芻していた。

「汚い？」

まさか、そんな言葉が返ってくるとは思ってもよらなかったのだ。

互いに好意を持っている。と、信じていただけに、今日子の反応は啓二に強い衝撃を与えた。

すっと立ち上がった今日子は、缶を握る手がわずかに震えていた。

呼吸が浅いのは、鼓動のはやさのせいだろうか。肩が、小刻みに揺れているのがわかる。

「だって」

そう言ったときり今日子は黙り込み、瞬きをくり返した。

「だって、何だよ？」

啓二もベンチから立ち上がり、何か言いよごんだままの今日子に向き合った。

促すと、今日子は反抗的な目つきで見上げてきて。

苦情を言い立てるような口ぶりで、先を続けた。

「だって、あの子とキスしてたでしょ？ 染るじゃん」

くだらない、と一笑にふすのは簡単だ。けれど、啓二にはそうできなかつた。

誰しも、かつては持っていたもの。

大人への階段をのぼる途中で、多くの人が捨て去ってしまう純粹さが、今日子の中には残っているのだ。

啓二は咄嗟に腕を伸ばし、今日子を抱きすくめていた。

「はなして！」

振りほどこうともがく力の強さは、本気のわりには力足らずだ。

意固地になっているのだろう。抵抗することで、啓二に怒りをぶつけているのかもしれない。

啓二は、暴れる今日子を抱きとめながら、どうするべきかを思索していた。

謝るか、謝らないか。謝らない場合は、どうすればいいのか。

けれど、ただ何となくではあるが、口先だけの謝罪が、この状況を好転させるとはとも思えなかつた。

「本当に嫌なら放してやるよ。今日子のこと、諦める」

最後の言葉は、ただの強がりだ。

しかし勝算はきつとある。と、啓二は確信していた。

それは、腕の中でもがき続ける今日子の、力の弱さゆえに。

「どうする？」

決断を迫ると、今日子はたちまち萎れた花のようになった。

返事をする気はないのか、うんともすんとも言わないままで。

そのくせ一切の抵抗をやめて、大人しく啓二の胸に額を押し当てている。

しばらくの後、シャツの胸元に湿った感触が伝わり、啓二は腕の力を緩めた。

上から見下ろすと、水銀灯の灯りを受けた彼女のまつ毛が、きらりと光っていた。

「今日子、機嫌直せよ」

啓二は背を屈めて視線を合わせると、今日子の下瞼に盛り上がっている涙に指を伸ばした。

今日子は口を開きはするが、何も声に出さないままで。その思いつめたような目が、彼女の複雑な心境を吐露していた。

啓二はタイミングを計り、つぎに今日子が口唇を開けた瞬間に、強く自分のそれを押し当てた。

腕の中の今日子は、一瞬身体を強張らせたけれど、その後は抵抗も逃げる素振りも見せなかった。

少々強引な仲直り策ではあるが、恋に不器用な啓二には、それが精

一杯で。

満月には少し足りない月が照らし出す中、ふたりは長いキスを交わしていた。

第1章 end .

2章目に続きます。

見上げる空は目が痛くなるほど青く、吹きつけてくる海風はドライヤーの熱風のごとく生ぬるい。

ジリジリと焼けつく太陽が焦がしたアスファルトの先には陽炎が立ちのぼり、日傘をさした女性の足元を歪ませている。

居酒屋で大喧嘩をしたあの夜から、1週間。

今日子はいま、啓二との約束の場所へ向かっているところだ。

啓二の長い盆休みも手伝って、この数日の間にふたりは急速に距離を縮めていた。

少年のような瞳をキラキラと輝かせながら、啓二は連日、海へ行く、釣りをしよう、と計画を立てる。

そんな計画につき合わされているうちに、彼の好みや口癖、ちょっとした仕草が今日子にもわかるようになっていた。

ビールはアサヒのスーパードライじゃないと飲まないとか、タバコはマルボロのメンソールだとか。

粒タイプのガムが好きで、味がなくなればそこに新しいのを追加して、古いのを吐き出さないとか。

仕事の話をするときはひどく真面目な顔になって、自分のことをワタシと呼ぶこととか。

他人にとってはどうでもいいことなのだが、今日子にとってはそんな一つ一つがとても大切で。

今日子は新たな発見をするたびにうれしくて、それを指でなぞるようにして覚えていった。

そんな幸せな日常の中でも、ふとした瞬間に思い出しては苦い気持ちになる火種が、今日子の胸の内にはくすぶっていた。

泰のことだ。

廊下で、教室で、いつも携帯片手に今日子を待っていた立ち姿。近寄ればニツと笑って、「今日子ちゃん」と呼ぶ声。

居酒屋で待ち合わせたあの日。

今日子が泣き止んだときには、泰の姿はどこにも見当たらなくなっていた。

悪気はなかったにしても、さんざん気を持たせていたのは事実なのだ。おまけに、もっとも最低な形で振ることになって。

気持ちには応えられないけれど、謝りたい。

けれど今更、こちらから連絡をとるのも気が引ける。

日が経てば経つほど連絡しづらくなるのはわかっているのだが、ああでもないこうでもない足踏みを続けているのが今日子の実情だった。

「おい、今日子ー！」

鬱々とした気分です歩いてるうちに、どうやら約束の場所は目前だったようだ。

今日子は自分を呼ぶ大好きな声に気付いて顔をあげた。

海岸沿いの道。その防波堤脇に停めた車の前で、啓二が手を挙げている。

彼は両腕を広げ“ホラ、来いっ！”というポーズで、駆け寄ることを遠まわしに催促していた。

啓二は、いつもこうだ。

彼の好きな映画の中に、男が主人公の胸を持ち上げて、くるっ一回転するシーンがある。

彼はそのシーンを再現するのが好きで、人目を憚らず今日子に要求してくるのだった。

今日子は自分にしか聞こえない声でしようがないなあと呟き、そこから助走をつけ、スタンバイOKな彼の腕目掛けて飛び込んだ。

瞬間、ぐっと持ち上げられた身体がふわりと舞った。

今日子は啓二の肩に両手をつき、眩しそうな瞳でこちらを見上げる彼に笑いかけた。

「よしっ、着地ー！」

童顔の彼は、Tシャツとデニム姿になればまるっきり若返ってしま

う。それは本人の最も気にしているところらしいので、口にはしないけれど。

今日子は車体に映ったふたりの姿を眺めては、違和感のなさにホッと胸を撫で下ろしていた。

啓二は知らないけれど、今日子の年齢は17歳。

その嘘を、今日子は夏休みの間だけつき通すつもりでいるのだ。

他人の都合で嘘をつかなくてはならないのも骨なのだが、それもこれも、派遣のバイトに勤しんでいる里美のため。

多少は良心が咎めるし、意地悪な啓二にガキ扱いをされる度に本当のことを口走りそうにもなるのだが。

けれど、隠し通すことを里美からも頼まれているし、啓二の人間性の問題もある。

仕事に対して真面目な啓二の言動を見るにつけ、とりあえず8月中はカミングアウトを避けたほうが無難だと、今日子も思うようになっていた。

それに、たかが年齢だ。

17歳だろうが、20歳だろうが、ふたりが恋人同士な事実は変わらないのだから。

「今日子？ 乗ってー」

ふと顔をあげると、啓二はすでに運転席におり、窓から首を出して今日子を急かしていた。

「ああ、うん」

すっかり今日子専用になった助手席は、車体の高さゆえに乗り込むのも一苦勞だ。

差し伸べられた手に掴まって引き上げられた途端、啓二は待ちかねたように口唇をあわせてきた。

これも毎度のことになっているのだが、彼は顔をあわせた端からキスをねだる。

お陰でせっかくグロスを塗ってきてても、すぐに舐めとられてしまうのが常だ。

啓二は丹念に舌を這わせ、やがて中に入りたそうに今日子の歯をノックした。

「あけて」

隙間から割り込んでくる舌は器用に今日子の舌を絡めとり、表面を擦り合わせてきて。そして交わる唾液は彼の好きなガムのせいで、やたらと甘い。

「ハイ、おしまい」

「もう、また！あたしの口はゴミ箱じゃないっていつも言ってるじゃん」

口唇を離す間際に、噛み終わったガムを押し込んでくるのもいつものことだ。

「うれしくせにー？」

「うれしくないってば」

「またまたあ」

啓二は鼻の頭に皺を寄せて笑うと、頭に掛けていたブルーのサングラスを目元に下ろした。

車を走らせながら啓二はカーナビをセットしていた。

市街を抜けて30分あまり。

行きかう車の数もまばらな国道を、車はゆっくりと西に進んでいる。

両サイドには青々と伸びた稲が、まだ収穫には早い首を重そうに垂らしている。

所々鳥避けの目玉がぶら下がり、風に大きく揺らいでいた。

カーナビが、目的地の近いことを知らせていた。

ディスプレイの右端に、赤色で大きく？ガラス工芸館？と表示している。

「ガラス買いに行くの？」

「まあ、そんなとこー」

横顔だけでそう言った啓二は、「それはそうと」と、違う話題を切り出してきた。

「今日子さー、オレ明日親に会いに行くけどお前どうする？」

思いもよらない話を、当たり前のように口にした啓二の声に、今日子は飲んでいたジュースを吹きだしそうになった。

まるでコントだ。けれど、笑っていられないほど心臓が高鳴っていた。

啓二は、どういつつもりなのだろうか。

どう考えてもそれは、親に会うか、と訊いているような気がして。今日子はそわそわと落ち着かない気持ちで、啓二の横顔を見やった。

「親に会ってこと？ それなら絶対無理だからね。無理無理無理無理急すぎる」

つっぱねる口調になったのは、内心の焦りが隠せなかったせいだ。

「何が急なわけ？」

案の定気分を害したのか、啓二は口元を歪ませ、不満げな様子だ。

どうして、そんな簡単なことがわからないのだろう。啓二は6つも年上なのに　と、今日子はため息をつかずにおれなかった。

1週間後とか1カ月後なんて話ではなく、啓二は明日だ、と言う。それでは準備期間が短すぎるために、ボロを取り繕う暇がないのだ。

今日子は、自分が年配の人から気に入られないことを、十分承知していた。

派手な身なりに、明るく染めた髪。

言葉遣いだって、丁寧にしたつもりでも、きっと粗相をするに違いない。

好きな人の親に会うのであれば、それなりの準備を整えてからでない、とても会えそうになんてないのだ。

出来ることなら、嫌われたくはないのだから。

今日子は不機嫌そうな啓二に、同じく不機嫌な態度で応えた。

「だからね、あたしだってケージのご両親に会いたくないわけじゃないけど。髪の毛黒くしたりだとか、そういう準備なしでも会えないの！ いまのままじゃ、嫌われに行くようなもんじゃん」

途端、

「あーうける。ガキの服装検査みたいだなー」

啓二は大声で笑い始めて。そのバカにしたような大笑いに、今日子はむっと口を尖らせた。

「何よ！ 何がおかしいの!？」

「今日子お前、その場限りのいい子ちゃんを演じるつもりなのかー？」

その通りだ。

その通りではあるのだが、それが世間の常識というものだ。今日子は信じていた。

「当たり前じゃん。あのね、どこの世界にチャラチャラした身なりで親に会う人がいるのさ！ ケージの方こそガキなんだってば」

絶対に間違えてなどいない。もう一言きつく叱ってやろうと、今日子が拳をかためたとき、

「へえ？ まあ心配いらねえよ。うちの親、ってか父親だけど。もう死んでるから」

淡々と語る啓二の声に、気が付けば今日子は、尖らせていた口をぽかんと開けていた。

「母親はもう再婚して新しい家庭を築いているから、会いには行けない。つまり墓参りだなあ」

正直なところ、啓二の告白は今日子にとって意外だった。

片親育ちの子は、いままで何人か見たことがあるし、今日子自身もそのうちのひとりだ。

特別珍しい話ではないにしても、そういう環境で育った子には、独特の雰囲気があつて。口には出さなくても、外側に滲み出ている気がする。

けれど、啓二が纏っている空気はひどく明るくて。恵まれた環境に育った者がもつ匂いすら感じられるのだ。

「お、お母さんはいつ再婚されたの？」

おずおずと問いかけると、啓二がちらつとこちらを向いた。サングラスの奥の瞳はよく見えないけれど、口元は薄っすらと笑みを含んでいる。

「オレのことを深く知りたくなってきたんだろー？」

「んもう。茶化すならもういい」

「そう怒るなって。母親が再婚したのはオレが中学3年生のとき。で、新居浜の高専ってわかる？」

わからなくて首を振ると、啓二はその気配を察したのか、前を向いたままで話を進めた。

「5年間行く高校 とうか、高校と短大がセットになった学校に進学したわけ。もちろんひとり暮らしでね。だから実質母親とは、中学卒業以来別世帯」

「そうなんだ……」

カーナビが、目的地の到着を告げていた。

行けども行けども水田ばかりが広がっていた国道の脇に、ガラス工芸館の大きな看板が見えていた。

本当はもっと身の上話を聞いていたかったのだが、どうやらこれで切り上げのようだ。

車はウインカーを右に出し、がらんとした駐車場に乗り込んでいる。

今日子はひとつ大きな息をつくど、シートベルトを外しにかかった。また、話の続きを聞かせてもらえる日が来るだろう　と、残念な気持ちのみこんで。

するど。

「で、どうすんの明日。行く？　行かない？」

急に啓二が、本題を蒸し返してきて。

「え？　ああ、どっちでもいいよ。ケージが淋しいなら一緒に行つてあげようかな？」

すっかり墓参りのことを忘れていた今日子は、それにつき合うだけという気安さも手伝って、茶化すような口ぶりで言った。

きつとムキになって反論してくるはず。

そう予想して身構えていたのだが、啓二には効果が無かったらしい。

「じゃ、決まりだな。明日は墓参り」

サングラスを上げた啓二はことのほか上機嫌で。鼻歌まじりにドアを開け、車の外へ飛び降りると、気持ち良さそうに伸びをしている。

今日子は少々腑に落ちないながらも、後に続くべく駐車場へと降り立った。

明日は墓参り。

丁度お盆の時期だ。

今日子にしてみれば異論などあるはずもなく、地味なデートに行くくらいのつもりでいた。

けれど。

「お線香買わなきゃね」

「一泊だけどなっ！」

タイミングよく、声が重なって。今日子は鼓膜が拾った不穏な文句を、即座に訊き返していた。

「え？」

蒸すような暑さの駐車場。

一歩前に行く啓二が立ち止まり、両手をポケットにつっ込んだままで振り返った。

きらりと、頭の上に掛けたサングラスが午後の日差しをはね返して。眩しさに目を細めた瞬間に、ちゅっと、音をたてて啓二が口唇を奪っていった。

「その時に」

啓二は口の片側を上げた笑い顔で、けれど、挑むような眼差しを向けていた。

「オレのことは深ーーーーっく、教えてやるよ！」

南風が熱を運んでくる。

熱く、強く、今日子の髪をなびかせて。

今日子は大きなうねりにのみこまれながら、ただひたすら、つま先立ちの足を踏ん張っていた。

一見ドライブインのように見えるその建物は、寂れた外観の印象とは違ってかわって、中は眩しく明るかった。

壁沿いにまだ絵が描かれていない透明な風鈴が干すように吊るされ、自動ドアから流れ込んだ熱風にいくつも、いくつも涼しい音を響かせている。

大きな窓からは容赦のない日差しが射し込んでいて。

吊るされた風鈴の丸みが光を集め、白木の壁をまだらに照らしていた。

顔を近づけてよく見ると、風鈴の形には色々と種類があるようだ。

楕円形や、釣鐘型、ストローのような長い棒が二、三本まとまっている物など様々で、覗くと透明なガラスの向こう側は魚眼レンズのように歪んで見える。

「いらっしやい」

店主だろうか。

人の良さそうな肥えた男は、そう言って足元のテーブルに腰を屈めた。

そこでは、小学生くらいの女の子と母親らしいふたりが、汚れた新聞紙を敷いたテーブルの上で一心に絵筆を走らせている。

今日は室内を見回し、壁に貼ってあるポスターで視線を止めた。

『手作り風鈴体験1200円から』

どうやらここは、そういう店であるらしい。

店の奥は釜になっっているのか、店内はやたらと暑い。なのに、不思議と耐えられる暑さで。

それは音のマジックとしか説明のしようがないのだが。人の動きが生み出すかすかな空気の流れが風鈴を震わせ、その音が暑さを和らげているようだった。

「これがいいな」

ぼんやりと風鈴を見て回っていた今日子の背後から、ぬっと啓二の腕が突き出て、壁に掛かった楕円形の風鈴を指し示した。

啓二は風鈴を取り外し、それを手に空いたテーブルへと歩いて行く。

絵を描くつもりなのだろうか。

いたずらに心を刺激され、今日子は彼の背後にまわりこんだ。熱心に絵筆を動かす彼が、どんな風鈴を完成させるのか見たかったのだ。

けれど、それは絵ではなくて。

「それ、お父さん？」

風鈴には今日子の知らない　でも、啓二とよく似た男名前が書かれてあった。

「そう。よし、出来た」

黒い絵の具で名前だけ書かれた風鈴は、揺らすと少し淋しげな音を鳴らした。

啓二は鼻の頭に皺を寄せて笑うと「お前にも作ってやるよ」と言い、同じ形の風鈴に、今度は絵を描き始めた。

けれど、

「……何それ」

その物体は真つ赤な塊にしか見えなくて。

「似てるだろー？ これ、今日子」

下手クソな絵に、啓二は「仕上げだ」と言って大きな目玉を描き足すと、その隣にKyokoと書いた。

「ホラ、出来た！」

きつと啓二の中では金魚のつもりなのだろう。

百歩譲ってそう見えなくもないのだが、今日子には冷やかしの類にしか思えなかった。

「出来た、って。全然可愛くないじゃん」

不満なのに。納得できないのに。啓二は不貞腐れた今日子の前に風鈴を吊り下げると、得意顔で笑っていて。

「ヒラヒラしてて、可愛いところなんてそっくりじゃん？ ホラね」  
そう言っただけ軽く揺すり、儂い音をちりんと鳴らした。

ヒラヒラしてて、可愛い。

そう言われると、嫌がらせのような汚い絵でも許せてしまうから不思議だ。

「ま、まあそういうことなら、いいかなあ？」

「だろ？ 持ってる」

今日子はそれを受け取ると、精算へ向かった啓二が背中を向けている間に絵筆を握った。

Kyokoの隣。空いているスペースにKeijiと書き込む。

ガラにもなく少女趣味だと自分でも思うのだが、そうすると下手な金魚にも愛着がわいてきて。今日子はその風鈴を、啓二の部屋に吊るそうと決めた。

このいたずらに、啓二は気付くだろうか。

気付けばいい。

そして、笑ってくれるとうれしい。

そんな想像にひとり頬を緩ませて、今日子は小さな幸せを噛み締めていた。

戻ってきた啓二の手には、白い箱が握られていた。



啓二はポケットをぐそぐそとかき回し、手の中に車のキーを放り投げてきた。

「うん」

啓二のランドクルーザーは、駐車場の一番奥。

黒い車体が日の光を反射して、きらりと輝いている。

今日子は金魚の風鈴を音が鳴らないように庇いながら、足早にそこを目指した。

## 28 元カノからの電話

元カノの好きだったジョージ・ウィンストン。

その着信音は未練がましくそのままにしていたわけではないが、聞こえた時は一瞬背筋が震えた。

着信、椎名舞子。

高専時代から4年間、啓二がつき合ってきた女性だ。

ともかく、着信音を変えなかったのは運が良い。と、啓二は車に乗り込む今日子の背中をちらりと見やった。

「もしもし?」

先日とは立場が逆だ。

男からの電話に逆上し、さんざん今日子を責めた日のことを思い出し、啓二は苦笑した。

『もしもし? わたし。啓二、元気だった?』

舞子の口調はふたりがつき合っていた頃のまま、まるで時間が止まっているようだった。

わたし、と言っただけでは気付かないかもしれないなんて、少しも思っていないみたいだ。

「ああ、久しぶりだな。お前は?」

『お久しぶり、元気よ』

「ふうん」

啓二は左耳を手のひらで押さえた。

国道を走りすぎていく車と、風の音に邪魔をされ、ひどく聞き取りづらいのだ。

ついでに言うと、舞子の様子がいつもと違うせいでもある。

4年間つき合ったキャリアがそう感じさせるのか、啓二は舞子の変調を何となく察していた。

一体どんな用件なのかはわからないが、暇だからかけてきたわけではない。

それは間違いない気がした。

『ねえ、啓二。いまから少し会えない？』

誘う言葉に、啓二の心が一瞬揺れた。

未練などとつくに捨てたと思っていたが、一度は結婚まで考えた相手なのだ。

拒む文句が、即座には出てこなかった。

啓二は知らず知らずのうちに、助手席で待つ今日子を目で追っていた。

今日子は風鈴を揺らして遊んでいるのか、ひとりで居るはずなのに微笑を浮かべている。

一瞬、目が合って。なのに、気のない素振りですらすとところが今日

子らしい。

つくづく舞子とは逆のタイプだ　と、啓二は思わず吹き出した。

「何の用だよ？　電話じゃ言えないのか？」

『時間はとらせないわ。会って直接話したいのよ。いつもの所で会いましょう？　駅前………』

珍しいな、と内心訝りながらタバコを啜え、啓二は風から身をよじるようにして火を点けた。

舞子はどちらかといえば大人しく、無理をしてまで自分の意見を押し通すタイプではない。

気乗りがしないながら、啓二が耳を傾けてしまうのは、舞子の声に何か差し迫った理由を感じ取ったからだ。

それともう一つ。

考え方次第では、会うことによって自分の気持ちがすっきりするかもしれない。

まったくないとは言いつれもない未練を断ち切るために、顔を見るのも悪くないかと思ったからだ。

「いいよ。じゃ、後で」

啓二は携帯をポケットにつっ込むと、今日子が待つ車へと駆け寄った。

ドアを開けた途端、中にこもった熱気がムツと流れ出てきて。エアコンひとつつけていないのかと、啓二は半ばあきれた目を今日子に向けた。

「暑すぎ。お前さー、エアコンくらいつけろよ」

「だって！ つけ方がわからないんだもん……」

「免許持ってねえのかよ。だっせー奴」

なにしろ真夏だ。

そう簡単にエアコンがエアコンとしての用を足すはずもなく、当分熱風を浴びることになるのは仕方ないのだが。

それにしても今日子は、免許を持たないばかりか、恐らく車に乗りつけてさえいないのだろう。

そう思うと彼女の世間知らずさが可愛くて、啓二はひとり息を漏らした。

アクセルを踏み込み、啓二はスピードを上げて市街へと車を走らせた。

来る時よりも混んでいる国道は、盆のためか他県ナンバーを多く見かける。

「今日子ー？」

ださいと言われただけで不機嫌になったのか、今日子は顔をそむけ、窓の外を眺めているようだ。

「今日子ちゃん？」

無視を決めこんでいるのだろう。顔を覗きこんでも、猫なで声を出しても、うんともすんとも言わない。

こんなところが今日子の可愛いところでもあり、厄介なところでもある。

赤信号に引つかかったタイミングで、啓二は今日子の肩を揺すった。

「今日子、ちょっと出かける用事が出来たからー」

「え！？ 仕事？」

途端に振り返った今日子は、ポーカーフェイスが吹き飛んでいて。寄せられた眉が、見開いた瞳が、歪んだ口唇が、淋しいと言っているようだった。

啓二は一瞬あつけにとられ、そして吹き出した。

「お前ホント可愛いなあ。うけるっ」

今日子はパツと見クールを装っている風だが、咄嗟の反応がやたらと子供っぽくて。

ここで笑ってはまた不貞腐れるかもしれないが、彼女の正直すぎる反応に、とても笑いを堪え切れそうになかった。

「だ、騙したの？」

「いや？ ちょっと仕事が入っちゃって」

これは必要な嘘だ。　と、啓二はタバコをもみ消した。それでも今日子の表情を見ると、罪悪感めいたものがわき起こった。

「お前、寮で待ってるよ。多分すぐに終わると思うから」

強すぎる西日が目に沁みて、啓二は頭に掛けっぱなしでいたサングラスを目元に下ろした。

「うん……」

小さな返事をポツリと漏らす今日子は、膝の上で風鈴を転がしている。その横顔を、啓二はちらりと見やった。

長い髪がエアコンの風に煽られている。尖らせた口唇や、落としたまつ毛がひどく淋しそうで。

そんな様子がサングラス越しにもはっきりと見えた。

いま運転中じゃなかったら、きつと抱いていたはずだ。

「淋しいんだろー？」

からかうと、今日子は途端にぶつくと頬を膨らませた。

「全然？　平気だよ」

「ホントにー？」

「本当だってば！　しつこいなあ。ホラ、前向いてないと危ないじゃない」

最後は犬を追い払うかのごとく振り払われたけれど。啓二は幸せな気分に関元を緩め、鼻歌を歌った。

夕暮れ時の市街は、赤いテールランプが川のように連なっていた。夕映えがオレンジ色にビルも人も染めて。

やがて車は川の流れにのみ込まれ、オレンジ色に溶けていった。

## 29・舞子と啓二

椎名舞子はコンパクトミラーを覗き込んでいた。

荒れのない口唇に引いた鮮やかなピンクは、かつて4年間つき合った彼が買ってくれた色だ。

8月中盤にさしかかった今日、舞子は以前から決められていた見合いに、朝から松山市まで出向いていた。

舞子の家は3代続く地方政治家の家系で、父の健三は現職の県議会議員である。

その父の知人が持ってきた見合いの相手は、地元ではそこそこ名の知れた某建設会社の若社長で、道後の老舗ホテルで両親もまじえての顔合わせがあったのだ。

見合いとは名目上のことで、談合にまつわる利権の話が主だ。見合いの件は顔を合わせる前から、特別な理由なしでは双方断らないと話がついていた。

しかし舞子は、その7つ年上の男と席を同じくする時間が長ければ長いほど、2ヶ月前に別れを告げた元恋人に会いたい気持ちがつのつて。

予定時間が終了した途端、はやる気持ちを抑えて八幡浜まで戻ってきたのだ。

舞子は、親からすすめられた見合いの相手に会って初めて後悔をし

ていた。

いくらその人となり立派でも、知らない男と結婚の約束をするのが、これほどむなししいとは思ってもよらなかったのだ。

いまの微妙な気持ちの揺らぎを、啓二に聞いてほしい。そしてできれば、やり直したい。

浅はかなのは重々承知しているが、この気持ちを受け止めて欲しい人は、啓二以外に思いつかなかった。

元恋人　　啓二との交際は、随分前から両親に反対されていた。

それにはいくつか理由があつて。彼の複雑な家庭環境や、原子力発電所勤務というリスクの高い職種。そんな、彼が身を置く背景が、両親の気に入るところではなかったからだ。

そして舞子自身も、それらに対して満足しているわけではなかった。家族関係は仕方がない。

しかし仕事の方は、それこそ口が酸っぱくなるほど反対してきた。

啓二と別れた直接の原因は両親の反対だったが、彼の仕事に対して舞子が不満に思っていた点も大きいのだ。

けれど、いま思えばそれは軽率だった。　と、舞子はコンパクトをバッグにしまった。

誰しも簡単に職をかえられるわけがないのだ。それよりも、もっと建設的な話し合いをするべきだった。

もし、いまからでも間に合うのであれば、啓二と前向きな話があった。

舞子は化粧室の丸い鏡に映る自分の姿を丹念に眺めた。

見合いのために朝から美容室でセットした髪は、まだ美しさを保ったままだ。

淡いピンク色のスーツは、オーダーで仕立てた麻の夏らしい装い。ピンクは啓二の好きな色でもある。

舞子はもう一度正面から、そして横からの姿をチェックし、薄暗い店内へと戻った。

その店はかつてふたりがよく通ったジャズ喫茶で、別れた場所でもあった。

もっぱらジャズを好むのは舞子の方で、啓二はつき合いで来ているようなものだったが。

舞子は店の奥　ふたりが指定席のように使っていたテーブルへと足を運んだ。

厚みのあるガラステーブルには、一輪挿しに赤いホオズキが首を垂れている。

カウンターから漂うコーヒー豆の香りや、壁にとめられた古いレコ

ードのジャケットも、以前と何ら変わらない様子で。

それを見るにつけ、舞子はふたりの関係を修復できるような気がしていた。

もっと言えば、最初から別れてなどいないような気さえるのだ。

2ヶ月前までの啓二は、舞子を深く愛してくれていた。

結婚しようとしていたくらいだ。別れを切り出したときは、何が起きたのかわからないという風だったのだから。

あれからまだ2ヶ月。

啓二の気持ちはまだ残っているはず。と、舞子は膝の上に置いた手を重ね合わせた。

啓二が店を訪れたのはそれからしばらくしてのことだった。

カランと入り口のドアが鐘の音を鳴らし、初老のマスターが「いらつしゃい」と声をかけた。

それに続き薄暗いカウンターの脇からひょっこりと懐かしい顔が覗いて、

「啓二！」

啓二の来店をいまかいまかと待ちわびていた舞子は、ようやく会えた喜びに、目が合った途端立ちあがっていた。

彼は顔なじみのマスターと一言二言交わし、その後舞子の待つテ-

ブルへと真っ直ぐに歩いてきた。

「久しぶりだな」

そう言ってどっかりと腰を下ろし、箱を揺すってタバコを啜える。  
そんな仕草一つが懐かしく、舞子は胸を締めつけられるような思いで見ている。

彼はあの時のままだ。

癖も、口調も、何一つ変わっていないと。

「なんだよ？ お前、立ち上がったちゃって」

「え？ ああ、そうね」

言われて初めて自分が立ちあがっていたのに気づき、舞子はそそくさと腰を下ろした。

ふたりは4年前、まだ学生だった頃に、所属サークルの学外交流で知り合った。

どこにでも転がっている平凡な出会いだ。

箱入り娘で真面目な性格の舞子と、苦労人でやんちゃな啓二とは水と油のようだったが、そのギャップが互いにとっての魅力で、気付けば4年もの間関係は続いた。

途中で何度か喧嘩もしたが、仲直りできぬほどの亀裂を作ったことはない。

今回のことも、きつと埋めあわせはきくだろう。

嫌いになって別れたふたりではないのだ。

きちんと順を追って話し、素直に気持ちを伝えれば、元のふたりに戻れるはず。

そう、確信していた舞子の足元をぐらつかせたのは、だしぬけの啓二の一言だった。

「で？ 話って何。急いでんだよ」

彼はタバコの煙が沁みたのが、眩しそうに目を細めてこちらを見ている。

その表情に険はない。

よく知っている仕草であり、口調だ。

しかし手短かに話を済ませようとする物言いに、この再会を歓迎していない雰囲気を感じられた。

「随分と急かすのね？ 久しぶりに会ったのに喜んでくれないの？」

「人を待たせてるんだ」

舞子は、アイスコーヒーにシロップを垂らす啓二の顔をじっと見つめた。

啓二は意識的にか、それともたまたまなのか、顔を合わせてからま

だ一度も表情を崩していない。

過去の啓二から考えると、こういうときの彼は「悪い！」と一言加えたり、おどけてなだめたりするのが常だったので、いまの硬さは舞子を不安にさせた。

「どうして」

まさか、思っていた以上に気持ちが離れているのだろうか。

不意にわきおこった憶測に言葉をのみこんだ舞子は、ふと、一つの賭けにでたくなった。

2ヶ月前までの啓二は、舞子のわがままを喜んでできているふしがあった。

わがままと言うより、甘えだ。

元々面倒見のよい性格ゆえ啓二は甘えられるのに弱く、舞子が急に呼び出したりすると、彼は必ずといって

「姫のためならたとえ火の中水の中」

とおどけ、そのたびに舞子を喜ばせてくれた。

ふたりにしかわからない、暗号みたいなものだ。

そんな過去のやり取りを思い出し、舞子は小さく息をつくとき、口角を上げてえくぼを作った。

「そう、ごめんなさいね？ 急に呼びつけて」

表面上は平静を装っているものの、テーブルの下では、膝の上で組んだ両手を痛いほど握りあわせていた。

お願い、言つて。

答え方次第で、あらかた啓二の気持ちは読みとれる。

お願い、啓二。

つい先ほど感じた違和感など、その一言で吹き飛ばはずだ、と。

けれど、

「いえいえ、どういたしまして」

祈るような思いで続く言葉を待っていた舞子の耳に届いたのは、求めていた文句ではなかった。

啓二はまだ長さの残るタバコをもみ消している。

陶器の黒い灰皿から消え残りの煙が青くのぼり、その向こうに、じつとこちらを見据える眼差しがあった。

テーブルに腕を載せた途端、啓二の腕時計がカツンと高い音を鳴らして

その音が、舞子を我に返らせ、直後激しい焦燥の渦に追い込んだ。

いま、自分は拒絶されたのだ。

きつぱりと。思ってもいない躊躇のなさで。

動揺と羞恥で何をどうしていいかわからないながら、すんでのころで舞子は取り乱す自分をおさえていた。

とにかく何か口にしないといけない。何か喋らなければ。

うるたえているのを気取られたくない一心で、舞子は当たり前障りのない言葉をさがした。けれど、焦れば焦るほど頭がまわらず、

「わたしね、今日お見合いだったのよ？ お相手は、啓二も名前くらいは聞いたことがあるんじゃないかしら。A建設の社長さんだったの。素敵でしょ？」

「優しい方でね、『お仕事は貴女の好きにされて構いませんよ』って言うって下さったの」

「学生時代はテニス部だったんですって。わたしもです、と話したら、じゃあ今度打ち合いをしましょう、って」

こんなはずではないのに、止めて欲しいのに、とどまることを知らない勢いであふれでて。

負け犬の遠吠えだとわかっていながら、舞子は心にもない文句を止められなかった。

やがて、

「舞子が幸せそうで良かった」

ずっと聞き役に回っていた啓二が、この店に来て初めての笑顔を見せた。

「オレも最近やっと運が巡ってきた感じだ。久々に楽しい毎日を送ってるよ」

啓二はそう言うと、両腕を高くつき上げ、気だるそうに伸びをしている。緩んだままの頬が、強がりではないことを物語っているように

舞子は息をのみ、ようやくの思いで「そう……」と返した。

最初に感じた違和感は、気のせいではなかったのだ。

啓二はあの別れを受け止めていて、もう前へ向いて歩いている。もしかしたら、そのそばには別の誰かだって。

舞子は、否定してくれたらいいと願いながら、胸にわいた懸念を口にした。

「彼女でもできたの？」

「うん」

啓二は拍子抜けするほどあっさりと頷いて、

「ガキみたいな子だけだね。でも楽しいんだ」

と言った。

こんな可能性があることを予測していなかったわけではない。もちろん、それなりの覚悟はしていたつもりだった。

しかし信じたくない思いが強すぎてどうにもできない。  
さっきまで混乱していた脳が急に活動を止めて、その途端、舞子は  
何も考えられなくなった。

「舞子の話は、つまり結婚するってことだよな？」

啓二は事も無げにそう言い、ガムを口に放り込んだ。

「ええ」

こう答える以外に他の対応が思いつかず、舞子は苦しまぎれに頷き、  
同時に、新しい彼女の存在を信じたくない気持ちから皮肉ってい  
た。

「啓二は結婚しないの？ あなた家族がないもんだからって、早  
く結婚したがつっていたじゃない？」

わたしと。とは言えずに口をつぐんだ舞子に、啓二は首の後ろを撫  
でて、何か考える素振りを見せた。

「うーん、どうかなあ」

その態度がどれだけ舞子を傷つけるか、きっと啓二は考えてもいな  
いだろう。

「結婚ねえ。まあ憧れるけど、でもカノジョ20歳だからなあ。日  
も浅いし」

やがて大きく息をついた啓二は、ふと思いついたように言った。

「そつだ舞子。お前、オレンちのスペアキー持ったままじゃね？あれ持っていたら返して欲しいんだけどさ」

舞子は胸の中で苦虫を噛み潰した。

返せばきつと新しい彼女に渡される。

そう考えるとバッグの中に入れたままのスペアキーを返す気には到底なれなかった。

「ああ、ごめんなさいね。いま持っていないの」

「じゃあ今度、郵送でいいからよろしく！」

そう言うと啓二は立ち上がり、これで話は終わりだとばかりに真っ直ぐにこちらを見下ろしてきた。

舞子の好きだった眼差しで。愛していた微笑を浮かべて。

「舞子、しあわせになれよ」

返事をしようとした声は、声にならないまま終わった。

舞子が言葉をなくしているうちに足音は遠ざかり、一度も振り返ることなく、彼はやがてドアの向こうへと消えていった。

別れ話をした日から2ヶ月。いまふたりの立場は、まるつきり逆だった。

飲みかけのアイスコーヒーが、コースターに水たまりを作っている。

その冷たさの残滓を睨み、舞子はひとり孤独を噛んだ。

### 30・途切れた会話

一方その頃、啓二の寮で留守番中の今日子は、携帯を前に心が揺れていた。

ディスプレイに浮かび上がった不在着信の名前。

不在着信1件、横山泰

居酒屋で待ち合わせた日以来、はじめてかかってきた泰からの電話は、マナーモードに阻まれて気付かなかった。

留守電にメッセージはなく、泰が直接話す以外を望んでいないのが何となく伝わってくる。

今日子のため息を漏らし、カーテンレールにぶら下がる風鈴を見上げた。

「掛けてもいい？」

話しかけても答えてくれるわけがないのだが、それはどこか啓二の化身みたいで。

悪事を見咎められているような心地がして、通話ボタンを押しづらいいのだ。

この不在着信をどう扱うか。

無視するか掛け直すかでさんざん悩んだ今日子は、掛ける方へ気持ちがちが傾いていた。

それは、今後も泰との縁を繋いでおきたいとか、そういう理由では

ない。  
謝りたかったのだ。悪気はなかったにせよ、気を持たせていたのだから。

それに、泰は自分の方から歩み寄ってくれた。

今後は無視されても仕方がないし、もう友達にも戻れないだろう、と半分諦めていた今日子にとって、この機会は泰に謝る最後のチャンスのように思えたのだ。

R r r r r r r r

R r r r r r r r

R r r r r r r r

5回だけ。5回鳴らして出なければ切ろう　そう思っていた。けれど。

『もしもし』

久しぶりに聞く泰の声は、感情の読み取れない抑揚のなさだ。電話の向こう側でどんな表情をしているのか、想像出来ない淡泊な声だった。

「もしもし……」

繋がりはしたけど、そこから言葉が続かなくて。今日子は棒立ちになっただま押し黙っていた。

ふと、回線の先で泰が身じろぎするのがわかった。

『久しぶりだね？　今日子ちゃん』

「うん……」

覚悟を決めて電話を掛けたはずなのに、満足に喋るのさえできない。おまけに、泰から気をまわされているようだ。

素直に謝って、カレシが出来たと言わなければいけないのに、なぜその位のことですまるのだろう　と、今日子は自分のふがいなさに顔をしかめた。

「泰、ごめんね。本当に」

電波を伝って響くのは、静寂の音だけだ。泰は何も返さないまま、聞いているのかどうかさえわからない。

今日子は携帯を耳に当てて、泰の返事を待ち続けた。

やがて、

裏の通りを車が走っていく音がして、そのあとで泰が深いため息をついた。

『そのごめんはさー、合コンの人は何でもないって嘘ついた件についての謝りだと受け取っておくよ!』

泰がやっと怒った。

でも口調はわざと不機嫌なふりをしているようにしか聞こえなくて、聞いた途端今日子は逆に申し訳ない気持ちになった。

「いっぱい謝らなきゃだね、あたし。ホントにごめんね」

不思議なものだ。

一度会話が続きとその後はいくらでも口がまわるようになり、今日子は何度もごめんねとくり返しては、目の前にいるわけでもない泰に向かつて頭まで下げていた。

『もついいよ！ 俺決めたんだー。今後は今日子ちゃんが早く別れるように願いながら、他の可愛い子も物色すんのー』

そう早口でまくしたてると、泰は小さく笑った。

泰らしい気づかいから零れる笑い声だった。

その後会話はお互いの近況へと移り、啓二の話になった。

さすがに彼のことについては詳しく話す気になれず、合コンで知り合ったことを除けば、今日子は自分からは口にしないでいた。

『何だ、うまくいってんだ？』 『あのうざい野郎と』 『ふーん』

泰はそんな調子で、意識的に悪ぶった口調でお喋りをしていたが、しかしいつ頃からか急に会話のペースが落ちて、何か考えるような間を置きだした。

元々が話の語り手になるタイプじゃない今日子だ。

泰が黙ると、自分も黙るしかなくて。何か言いよどんでいる泰の気配に、ただ耳をすましていた。

しばらくの後、

『あのさー』

泰がやっとなつぎの言葉を発したとき、今日子はもうひとつ別の音をひろっていた。

階段をカン、カン、と踏みしめる足音が近づいてくる。啓二の気配だ。

『俺ちよつと疑問つつか、不思議に思ってることがあるんだけど。あいつ、今日子ちゃんが高校生って知ってるの?』

ためらうような泰の声は、焦って気が動転した今日子の耳には届かなかった。

「ごめん！ もう切らなきゃ。マジでごめんね、また掛ける」

早く切らないと、また啓二に怒鳴られてしまう。

今日子はすぐそこまで迫った足音に急かされて、上から被せるように告げると、泰の返事も待たないまま通話を切った。

ドアから姿を現した啓二は、出掛けたときとどこか様子が違うように見えた。

疲れているだけかもしれないが、いつもの陽気さがない。

「おかえり、ケージ」

玄関先まで出迎えた今日子の脇を素通りして、啓二は部屋へ入っていく。

その後ろをついて行きながら、今日子は、まさか泰と電話していたのがばれたのではと不安になった。

先に謝ろうかとも思うが、もし疲れているだけだったら　と思うと踏ん切りがつかない。

今日子は啓二の機嫌を窺うようにちらちらと視線を投げかけ、無表情な背中に声をかけた。

「ケージ？」

おそろおそろ呼びかけた瞬間、啓二は夢から醒めたような顔をしてこちらを振り返った。

「……ケージ？」

いつもとは違うその様子に、もう一度名前を呼ぶと、啓二は返事をしないまま近づいてきた。

そして目の前で立ち止まり、がっくりと膝をつき、今日子の腰を掻き抱くように腕を回してくる。

「ちよっ、コラー！」

驚いて軽くもがいた今日子を、啓二のくぐもった声が制した。

「今日子、しばらくこうしてて。頼むから」

「え、」

頼りなげな声に抵抗を封じられた今日子は、自らものろのろと膝をつき、啓二と高さをあわせた。

しがみつくと啓二を息づめて見る。

きつく眉根を寄せて、何かに耐えるような表情。

そこには見慣れた啓二の怖いもの知らずな強さは感じられない。

「……………どうしたの？」

尋常じゃない様子に、今日子は無意識に啓二の背中を撫でていた。

それが安らぎを与えたのか、啓二は体重をあずけ、一層無防備に身体を委ねてきて。

やがてその重みを支えきれなくなり、今日子がバランスを崩したのと同時に、ふたりは床へ倒れこんだ。

ふと、身をよじって頭上を見上げた。

青いカーテンのひだの波間に、赤い金魚が泳いでいる。

### 31・ゆびきり

どのくらいそうしていただろうか。

わからないけれど、目に見えない何かから、啓二は身を守っているようだった。

首をよじり、彼を見つめる。

途端、ボサボサの髪に頬をくすぐられ、今日子はこそばゆさに目を細めた。

ふわりと独特の臭いが鼻をつく。整髪料と汗のまじった、啓二の臭いだ。

のしかかった身体はやっぱり重く、今日子は身動きさえ満足にとれないでいた。

「ケージ、何か嫌なことでもあった？」

今日子の肩におでこを擦りつけ、啓二は首を横に振った。大きな息をつくと、

「長くやってきた仕事が終わったんだ」

と言う。それっきりまた黙り込み、身じろぎもしない。

仕事。

短期アルバイトの経験しかもたない今日子には、啓二が抱え込んだ仕事のストレスなんて、まったく想像もつかなかった。

けれど、ともかく啓二は癒しを求めている。

しかも、癒し系的要素などひとつもない、自分に対して。

それはとても甘く、痺れるような感情を今日子の胸に芽生えさせて母性本能とでもいうのだろうか。今日子はただ、頼られたことがうれしかった。

止まっていたエアコンのファンが、沈むような音をたてて回り始めた。一瞬だけ、部屋の灯りが薄暗くなる。

覆い被さる啓二のうなじを、蛍光灯の灯りが照らしている。汗が滲んでいるのか、生え際がきらりと光っていた。

今日子は背中にまわしていた手を伸ばして、彼のボサボサの髪を撫でた。

小さな子供をあやすように。或いは、褒め称えるように。

「よく頑張りました。ケージは偉い子」

その口にした途端、啓二が瞬きをしたのがわかった。首筋を、彼のまつ毛が軽く掠っている。

「今日子、いつになく優しいな」

肩口に、くぐもった声。カットソーの繊維を縫って、啓二の吐息が肌に沁みこんできた。

ふと、のしかかっていた重みが和らいで、啓二が重心を移したのがわかった。

密着していた身体が浮いた瞬間、もたげた顔が傾いて、口唇を塞いだ。

ほんの数秒で離れた口唇は、しっとりと濡れている。

奥二重の瞳は、いつもより瞼の線がくつきりと刻まれていた。

失礼な。いつも優しいのに！

そう言い返すつもりが、言葉は喉にはりついたまま出てこなかった。

吸い込まれそうな瞳が、鼻先の擦れあう距離にある。曇りのない眼差しに、今日子は声を奪われていた。

被さってきた口唇は、今度は深く。無理にこじ開けた隙間から、ガム味の舌が侵入してくる。啓二の舌先が上顎を掠めた瞬間、ぞくりと震えが背筋を走った。

息つく暇もないキスに、今日子の意識は飛ぶぎりぎりのところを彷徨っていた。

それを急に引き戻す感触が、胸に落ちて。

「ちよっ！」

アブナイ気配を感じ取り、今日子は性急に啓二の頭を引き剥がした。目だけを下に向けると、胸を、大きな手のひらが包み込んでいる。

「なっ、何してんの？」

訊かなくてもわかりきっているのに、気が動転した今日子は、とんちんかんな質問を発していた。

パツと啓二の手を掴み、もう片方の手で乱れたカットソーを元に戻した。

気付かないうちに、胸の上までたくし上げられていたのだ。

啓二はきよとんとした表情で、身づくろいする今日子を見下ろしていた。けれど、その内に今日子の手首を掴みなおしてきて、

「だって、ホラ。大きくなっちゃったし」

あるうことが、今日子の手を股間へと導いていった。

「いやーっ！ 変なモン触らせないでよっ」

妙な感触に、パツと手を引っ込めたけれど。全神経がそこに集中したかのごとく、手のひらに硬い感触が残った。

今日子は手のひらを握ったり開いたりしながら、こびりついた感覚を追いやるようにした。

いまのは事故、何かの間違いだ、と胸の中で何度も言い聞かせて。

なのに、啓二の方はてんで変わらない素振りで、

「ひでえ反応だなあ。よく見ると可愛いんだぞー？ 見る？」

そう言って、デニムのジッパーに指を掛け、いまにも下ろそうとし

ている。

「やめてよ！ 変なモン見せないで！ バカっ！ この変態！」

あたふたと身をよじり、今日子は這うようにして逃げ出した。

ガンガンと鳴り響く鼓動は一向に治まらず、頬が火照っているのが自分にでもわかる。

啓二はジッパーに掛けた手を身体の横に戻し、少年のような瞳を大きく見開いていた。

呆気にとられたみたいに、ぽかんと口を開けて。

瞬きもせず、見つめて。そして訝るような声を、今日子に投げかけてきた。

「もしかして、お前処女？」

「……」

その質問には答ええないで、今日子は啓二を見返していた。息を止めて、ぐっと拳をかためたまま。

カチカチと時を刻む音がやけに大きく感じるのは、互いに牽制しているせいだろうか。

耳をすませば、鼓動の音さえ聞こえそうだった。

「マジで？」

先に沈黙を破ったのは、啓二の方だ。

何がおかしいのか、両手を叩き合わせて笑い出し、苦しそうに喘いでいる。

「まだ何も答えてないのに……」

強がりから出た言葉は、けれど中途半端に終わった。

どれほどイキがったところで、処女である事実が覆ることはないのだから。

「今日子、お前最高だな。お陰でブルーな気分が吹っ飛んだ」

啓二は何もかもお見通しだと言わんばかりに寝転んで、笑いをかみ殺している。

その度に震える背中が無性に小憎らしくて。今日子は口唇を尖らせて、広い背中を睨みつけていた。

「今日子」

不意に、肘を枕にして啓二がこちらを振り返った。生意気そうな笑顔、顔を、顔全体に浮かべたままだ。

「オレはいま運命を感じたよ。そうかー、処女か」

意味のわからない宣言をする彼は、緩んだ口元から白い歯を覗かせている。

その冗談めかした言い草は、今日子の不快感を煽った。

なにしろ、啓二は6つも年上なのだ。

先ほどの手馴れた様子を振り返ると、そういう経験も数多くあるの  
だろう。

今日子の知らないところで、知らない誰かと。

そんな啓二から見れば、自分はただの子供と映るのかもしれない。

けれど、だからと言って笑わなくてもいいじゃないか、と今日子は  
不貞腐れた声を出した。

「どうせガキだと思ってるんでしょ？」

つんとすまして顔をそむけると、視界の隅に啓二が起き上がるのが  
映った。

「違う、ってば。まあ聞けよ」

そう言っただけで啓二は胡坐をかき、今日子の頬を両手で挟んだ。

そして覗き込むように視線を合わせ、おでこをくつつけてくる。

「これはきつと、本当に新しいスタートなんだ」

「スタート？」

ぷつと吹き出した啓二の息が、頬にかかった。悪巧みを思いついた  
みたいに、軽く瞼を瞬かせて。

まだ茶化すつもりか、と思わず肩を怒らせたけれど、その後が続く  
啓二の声に、今日子は虚を衝かれた。

「まあ、それはいいさ。とりあえずオレは腹を決めたからお前も覚

悟しろ」

「覚悟って……」

今日子は、思わずごくりと唾を飲み込んでいた。

意味不明ながら、何か重大なことを告げられるような気がしたのだ。

啓二の瞳がゆっくりと閉じられて、再び開いた。

「もちろん、抱かれる覚悟だ」

「……」

いま返事をしたら、声の上擦ってしまいそうで。今日子は自分を見る真剣な眼差しに、応えることが出来なかった。

「明日まで待つてやる。いいな？」

けれど、啓二は曖昧な態度を許さないのか、返答を迫って。真っ直ぐなよどみのない視線を、真正面からぶつけてくる。

「じゃ、じゃあ」

予感通り上擦った声を、今日子は軽く咳払いをして誤魔化した。本当は、逃げ出したいほど胸が高鳴っていた。

「じゃあ、ケージ。あたしがそれしたら、もう他の人としないうって約束する？」

啓二が求めた答えはイエスカノーの二択だったのに、気が付けば今日子は、問いかけに問いかけで答えていた。

わかっている。それはきつと、啓二の過去への不快感が口走らせたのだ。

バカなことを言っている、とすぐに思い直し、今日子は口唇を噛んだ。

見えない過去にヤキモチを焼く。

そんな独占欲が自分の中にあることを、白日の下にさらしてしまったのが恥ずかしかった。

けれど。

「いいよ。その代わりにお前が浮気したら、ロープでぐるぐる巻きにして海に放り込むよ？ 言うておくが、オレ様の半端ない独占欲を舐めるなよ？」

彼は今日子の子供じみたヤキモチを笑うでもなく、挑戦的な眼差しを向けてきて。

今日子はふつと胸が軽くなった気がして、ふたりの鼻先に小指をつき出した。

「いいよ？ じゃあ約束ね？」

啓二の視線が、白い指先に留まる。直後、日焼けした小指が絡んできて。

もし赤い糸というのが本当にあるなら、この指と繋がっていたらいい

い。

そう祈って、今日子はぎゅっと小指に力を込めた。

### 32・温かいなか

翌日は朝5時の約束で寝不足の目を擦りながらの出発になった。

空はつつすらと茜色に染まり、海もはるか遠くまでピンク色に波打ち、眠いことだけを除けばロマンティックな旅立ちの朝だった。

今日子は助手席のシートにもたれて海を眺めながら、家を出る前、久しぶりに会話をした母親のことを思い返していた。

「何してるの？」

急に背後からぬつと顔を覗かせた母は、まだ酒が抜けきっていない充血した目で、今日子をぼんやりと見つめていた。

スナックを閉めてから、時間がまだ浅かったのかもしれない。化粧を落とした白い顔に、薄くて細い眉が不健康そうだった。

母親とはいえ、今日子を産んだのが20歳の時だ。

まだ40にも届かない母は、ホステスとして現役である。

いまは営業後の疲れが顔にでているが、女性としての美しさを十分保っている若さだ。

「お母さん……、お弁当作ってんの」

目だけを向けて答えると、母は「ふうん」と鼻から抜けるように言

い、ダイニングの椅子に腰掛けた。

夏休みの早朝から、今日だけの分には多すぎる量の弁当を作っていることに、いつつつ込みをいれられるのかと、今日子は落ち着かない気持ちでいた。

「あんだ最近楽しそうよね。何かあったの？」

「え？」

振り返ると、母はタバコをくゆらせながら、眩しそうに目を細めている。

今日子は、子供の頃から母が好きではなかった。

クラスメイトから、「篠原さんのお母さんきれいよね」とよく褒められもしたが、良いことといえばそれくらいだ。

年がら年中酒臭く、参観日や入学式、卒業式には派手な身なりで姿を見せる。

店の客と顔をあわせれば、そこが娘の晴れの席であっても営業活動に精を出す。

そんなデリカシーのなさをうとましく思うことが多々あった。

今日子をそっくり大人にただけの面立ちは、まるで未来の自分をそこに映し出されているよう。あんな風にはなりたくない、と中学校にあがる頃にはとっくに思うようになっていた。

母の方も、娘に関心などないのだろう。

高校受験のときなど、合格発表が終わったあとになって、「あんだ、どこの高校へいくの?」と聞いてきたほどだ。

進路について口を出すわけでもなく、多少夜遊びがすぎても叱られることはなかった。

そんなわけだから、いま突然寄越された母からの言葉に、今日子は内心驚いていた。

ここ半年近く会話らしい会話などしたことがないのに、楽しそうだなんて言われるとは思ってもいなかったのだ。

「ニコニコしてるじゃない? いつも」

と、母は並べたおかずを手を伸ばした。

「……そう?」

「これ、上手に出来てるね。ご飯が食べたくなってきたわ」

どうせおかずは余るのだ。今日子は座ったままの母に一膳、ご飯をよそって差し出した。

さっさと食べて、はやく自分の部屋に戻って欲しい。

そう思っていたのだ。

「カレシでも出来た?」

「えっ!?!」

後になって思えば、この時の反応はいささか大袈裟だったかもしれない

ない。母は眉の薄い生気に欠けた顔をうれしそうに綻ばせ、「当たり前でしょ？」と言った。

「な、何で？」

「楽しそうに見えるって、さっきも言ったでしょ。……ねえ、これ、玉子焼きが甘いんだけど」

「ああ、そう。甘くしてあるの」

本来、家での味付けは塩味なのだが、今日は啓二の好みに合わせてお菓子のような甘い玉子焼きにしてあるのだ。

母はそれについて、それ以上何か言うわけでもなく、黙って箸を動かしていた。今日も無言のまま、弁当箱につめ続けている。

やがて。

「カレシ、今度紹介してよ」

と、母は言った。

母が、何を思ってそんなことを口にしたのかはわからない。

単なる気まぐれなのか、娘のカレシを見てみたい好奇心からなのか。

けれど、能天気にもそう切り出してきた母に、今日子は激しい苛立ちを覚えた。

紹介なんて出来るわけがない。

一年中酔っ払い、媚を売り続けている母親の存在は、今日子にとって恥部以外の何物でもないのだ。

おまけに、啓二は社会人である。

母に紹介なんてしようものなら、客としてスナックに誘わないとも限らない。

そう勘ぐらせるには十分な恥を、いままでこの人にはかかされてきたのだ。

どの面下げて紹介しろなどと言うのか、と喉元まで出かかった言葉を、今日子は無理矢理のみこんだ。

母は、昼間はずっと寝ている。

たまに起きていることがあっても、ガウンや寝巻きのままボーっとしているだけだ。

見せられるものか、と今日子は頬を硬くした。

海岸沿いの辺鄙な道に、ぽつんと灯ったスナックの看板。

店の外まで漏れるカラオケの音や、バカ笑い。

酒臭い、自分とそっくりな顔をした母親。

啓二と会う日はいつも帰るのが夜になり、その都度彼は家まで送ろうとしてくれた。

けれど今日子は、啓二が送ると言う度に、わざと家から遠い場所まで車を降りていたのだ。

それはもちろん、啓二にだけは知られたくない一心のことだ。

何ひとつ、見られたくない。あれもこれもすべて。

「今度ね」

今日子は辛うじてそう答えると、弁当箱を抱えて自分の部屋へ駆け戻った。

徐々に頭をもたげてくる反発が、声になってしまつ前に、その場を離れてしまいたかった。

「今日子ー？」

ぼんやりとしているうちに、茜色だった空は、今日も晴天確實と言わんばかりに青みを増していた。薄く広がった雲間から、早くも眩しい朝日が差し込んでいる。

「お前眠いんだろ？ 寝てていいよ」

啓二の運転する車は、これから高速に乗ろうとしているようだ。緑色の標識が指す方向へ、ウインカーのランプが点っていた。

「あたしが寝たら、ケージもつられて眠くなんない？」

ブルーのサングラス越しに、啓二の瞳が瞬いた。口の端をあげてニツと笑っている。

「大丈夫だから」

そう言って今日子の頭をくしゃっとかき混ぜると、啓二は

「起こしてやるから寝るよ」

「うん……」

瞼を閉じると、深海を漂うような眠気が急激に襲ってきた。

甲高い隙間風の音を聞くのを最後に、今日子の意識はぶつつり途絶えた。

それからふたりは車ごとフェリーに乗り換え、片道6時間かけて、啓二の生まれ故郷の島へと辿りついた。

愛媛県で一番大きなその島は、古くから神の島と呼ばれ、長い間魚類を獲ることが罰当たりとされてきた。

そのせいか、いまも漁業は盛んではなく、島民の多くが塩産業で生活をしている。

言わずとしれた過疎状態のその島は、同じく過疎の田舎町に住む今日子の目にも、更にのんびりとした風景に映った。

啓二のどこかひょうひょうとした人間性は、そんな島育ちが所以なのかもしれない。

ふたりは、島の商店街で小さな花束と線香を買った。

日差しはジリジリと焦がすようだったけれど、からりとした暑さで汗がべたつく感じではない。

大きな建物がないせいか、絶え間なく強い風が吹いているのだ。

それがやたらと心地よく、ふたりは車の窓を全開にして風を楽しん

でいた。

「いい風ー。気持ちいいっ」

「だろー？　ここは風で電気おこしてるくらいだからな」

風が窓から窓へと吹き抜けていく。その度に頬に掛かる髪を、今日子は耳に掛け直していた。

「今日子、意外とこういうの平気なんだな」

啓二が、こちらを垣間見てからかうような声を出した。

「何が？」

「？あたしの髪がグシャグシャになるでしょ？　窓閉めてよ！？つていかにも怒りそうなタイプに見えるもん」

訊いた途端、頬を膨らませ、似てないモノマネをされたのには腹が立っただけだ。

でも内容は的を射ている　と、今日子は苦笑いした。

学校やクラスメイトたちの間で、スカした女だと噂されているのを、今日子はよく知っていた。

友達を家に呼びたくないから、一線引いた付き合いを心がけていたのもある。

でもそれ以上に、自分が女子から避けられるタイプだというのは、嫌でも自覚せざるをえなかった。

グループ行動をとるときには、必ずひとりあぶれていたのだから。

そんなわけだから、里美の存在は貴重だ。

色々な噂を耳にしたらどうにも、わけ隔てなくつき合ってくれり。本当は、普通の子だつてことを、わかってくれり。

折角ここまで遠出してきたのだ。

里美には、何かお土産を買つて帰りたい と、また髪を耳に掛け直したとき、啓二の呟き声が風に流されてきた。

「でもオレ、お前のそういうところ好きだよ」

「え？」

今日子は訝つて、隣の啓二を振り返つた。

他人から誤解されやすいタチの、一体どこがいいというのか。

啓二のことだから、どうせまたバカにして、からかっているのだらう、と今日子は口を尖らせた。

けれど。

「遊んでそつなのに、真面目だつたり。強がつてるくせに、すぐ泣いたり」

啓二は、こちらを見ない。前を向いたままで、ひとり言みたいに続けている。

その横顔を、今日子は息をするのも忘れて見入つていた。運転席の窓から入り込む強い南風が、髪を乱すのも構わずに。

「そんな所がたまらなく可愛い。今日子らしいな、と思う」

カーラジオが正午を告げ、ニュースが始まった。

太平洋高気圧の影響で、日本全国真夏日だとアナウンサーが喋っている。

お盆の今日は帰省客でどこも込み合っていて、夏休みを海外で過ごす人の数も、過去最高だと言っている。

「なんだよ!? こっち見るなっ!」

怒った声でそう言われるまで、今日子は彼の横顔をじっと見つめ続けていた。渋面を正面に戻す間際、少しだけ赤らんでいる頬が見えた。

「ケージ、ありがとね」

今日子は、俯いてそう呟くのが精一杯だった。

一番気にしていた所を好きだと言われて、柄にもなく感動してしまっていたのだ。

運転席から、大きなごつごつした手が伸びてきて、手の上に重ねられた。

その大きな手のひらから、体温と一緒に、温かい何かが沁み込んでくるのがわかった。

優しさ、とか。愛しさ、とか。

そういつ、気持ちか。

それを確かめたくて指先をぎゅっと握り込むと、同じくらいの強さが返ってきた。

商店街を抜けた先に、水平線が見える。

その空との境目に、眩しく白い光の粒が輝いていた。

### 33・墓参り

島の南西らしいその崖つぷちには、上空に一羽のカモメが飛んでいた。

丈の伸びたシロツメクサが帯状に群生し、あたり一面が緑色に染まっている。

どこからかタネが飛んできたのだろう。1ヶ所だけ黄色い花をつけた草が生えていた。

崖の際には、錆びた柵が申し訳程度にあるばかりで、そこから海面を覗き込むと、足がすくむほどの高さがあった。

風のせいかわ、瀬戸内海とは思えない激しさで波が打ちつけ、白い泡を浮かべている。

その、なんだかサスペンスドラマにでも登場しそうな崖つぷちに、啓二の父親の墓はあった。

ぽつん、と。注意しないと、見落としてしまいそうなささやかさで。

「カノジヨ連れてきたよ」

啓二は開口一番、墓石に向かってそう話しかけた。

まださほど古くない墓石の側面には、日付と、啓二とは一文字違いの名前が掘り込まれている。

どうやら彼の父親は、彼が小学生の頃に亡くなっているらしい。

啓二は墓前に花を供え、線香を立てると、跪いて手を合わせていた。それにならって、今日子も彼の父親の冥福を祈った。

目を閉じると、打ちつける波の音に紛れてカモメの鳴き声が聞こえた。

車が、砂利を踏みしめながら通りを走る音がする。蒸気の漏れる気配で、それがバスであるのがわかった。

目を開けて隣を見ると、まだ啓二は瞼を閉じたままだった。

なかなか顔をあげないその横顔を、今日子はこっそりと窺った。耳をすませば、父親との対話が聞こえそうな神妙さだった。

やがて。

祈りに終わりを告げた彼が、昨日作った風鈴を墓にかけた。まるでオリンピックのメダルを授与するみたいに。

強い浜風に翻弄される風鈴は、右に左にと大きく揺れているのに、不思議と音が出なくて。手に取ってみると、割れないように細工したのか、透明のテープが貼りめぐらされていた。

風鈴の下では、線香の白い煙が生まれたはなから風に干切られている。

今日子は、色々と聞いてみたいことを胸に秘めながら、口に出せないでいた。

自分にとって父親の話がタブーであるように、彼にとっても同じかもしれない。

そう思うと、黙る以外なかった。

「あー、疲れた」

突然、手前に広がるシロツメクサの上に、啓二がごろんと寝転がった。大地と一体になって、全身で太陽を受け止めるみたいに。

「腹減った。飯食おうよ」

顔だけをこちらに傾けた啓二の、前髪が揺れている。無邪気な物言いが、甘えた子供みただった。

その後ふたりは、墓の前で弁当を広げた。日差しを遮るものがない、炎天下の中で。

食べている最中も、終わったあとも、会話は無い。

啓二が寝転んでいる間は、今日子は四葉のクローバーを探し、啓二が起き上がると、今日子も手を休めた。

やがて。

啓二はこのこの空気を満喫出来たともいうみたいに、「よし」と掛け声をあげて起き上がった。そして再び父親の墓前に座り、小声で何かを語りかけ、最後に墓石を手のひらで擦った。

「行こうか」

振り向いた啓二は、吹っ切れたような笑顔を見せて手を差し伸べて

きた。

今日はその手に自分の手を重ね、引かれるままに歩き出した。

助手席のドアを開ける前に、もう一度今日子は墓を振り返った。

音の鳴らない風鈴が、風をまとって揺れている。その丸みを帯びた縁が、午後の日差しをきらりと反射していた。

「いまの場所に、子供の頃オレが住んでいた家があったんだ」

車を発進させたあと、バックミラーを見上げて啓二が言った。

「え？」

ガラス越しに振り返ったけれど、崖はすでにカーブの向こう側で。切り取られた海と、窓に映った自分の顔が見えるばかりだった。

墓から遠ざかるにつれ、ようやく啓二はぼつりぼつりと少年時代の思い出話を語り始めた。

あの場所で、両親が民宿をやっていたこと。

ひとりっ子で、遊び相手がいなかったこと。

お父さんは風が好きで、紙飛行機を作るのが上手だったこと。

「その風好きが高じてさ、まだ巷では珍しかった家庭用の風力発電機を買ってきたらしいんだ。小型の、屋外に取り付けるやつを」

彼の啜えたタバコの煙が、風にのまれて吹き飛んでいく。

それを目で追いながら、今日子は啓二の声に耳をすましていた。

「発電機さえあれば、もし停電になつたとしても、民宿一軒分の電力が賄えるはずだから。って」

タバコの先に、溜まつた灰が首を傾げている。

それに気付かないのか、啓二は灰を落とすでもなく啜えたままだ。今日子は慎重にタバコを抜き取ると、灰皿でもみ消した。

「オレが小学5年生の時に、とても大きな台風がきたんだ。その日は学校が昼で終わって、家に早く帰るように注意されたのを、いまでもよく覚えているんだけど。夜になつていよいよ本番かつて時に、停電になつたのさ。真夏で、すごく暑くて」

啓二は、そこで黙り込んだ。

海岸沿いの道は一車線の下り坂で、左手には海が広がり、右手は木が生い繁る林になつていた。

木漏れ日がフロントガラスにまだらの影を落とし、ボンネットの左の角が眩しく光っている。

やがて啓二は、古ぼけた建物の脇に車を停めた。

えんじ色の屋根に、黒ずんだクリーム色の壁。木造平屋建てと思われるその建物の入り口には、墨汁の滲んだ木の看板がかかつていて、  
? x x 地区公民館? と書かれていた。

「懐かしいな。ちょっと降りようか」

そう啓二に促され、今日子は公民館に降り立った。

爪先立って中を覗いたが、公民館には人の気配が感じられない。窓はカーテンがきっちり閉じられ、駐車場の入り口には鉄の鎖が掛けられている。

自動販売機でジュースを買い、ふたりは入り口の段差に腰掛けた。駐車場を囲むブロック塀の、濃い影が地面に落ちている。そこにうずくまる猫を啓二の視線は捉えていた。

けれど、身を起こした猫がゆっくりとその場を離れたあとも、啓二の視線は動かなくて。

彼がそこにはない何かを見ていることが、今日子を不安にさせた。手を伸ばせば触れられる距離にいるのに、まるで啓二が遠くにいるみたいだった。

ケージ、と呼びかける前に彼が口を開いた。

「とにかくその夜、うちの父親は発電機を見てくると言って、懐中電灯片手に外へ出たらしい。そして、さっきの墓があつた場所で吹き飛ばされて、海に落ちた。死体はあがらなくて、だからあの墓には何ひとつ入ってないんだ」

缶の表面に浮いた結露が、手のひらを濡らしていた。

啓二は缶を開けないまま、またタバコを啜っていた。濡れた手のひらで庇うようにして火を点け、煙を吐き出している。

「まだ聞く？　つてか、オレのこと知りたい？」

やっとこちらを向いた啓二は、強気な口調とは裏腹に、眼差しが揺れていて。

それを見た瞬間、今日子はその首に抱きついていった。強く、しがみついていた。



### 34・恋の虜

頬に当たる啓二の首筋から、どくどくと脈打つ鼓動が伝わってくる。

汗ばんだ肌から、熱が沁みてくる。

それが妙に愛しくて、胸が締めつけられそうだった。

しばらくの間、啓二はされるがままになっていたが、やがてやんわりと今日子の腕を引き剥がし、「この場所だったんだ」と言った。

「停電して、避難命令が出て、オレは母親に連れられてこの場所に避難したんだ。父親が落ちたらしいのに、助けるのもかなわないまま」

啓二は首を伸ばし、公民館の閉ざされた窓をじっと見上げていた。

「公民館の中は、座るのもやっとなほど空気がなくて。真夏だといふのに窓も開けられない、停電しているからエアコンも使えない、ものすごく蒸し暑くて、いやな臭いがしてさ。真っ暗闇の中で、行方知れずの父親を思って、一晩中眠れなかったさ」

元々が子供っぽい啓二だ。

暗い部屋の中で、膝を抱えて座る少年の彼を、今日子は容易に想像することができた。

じっと息をひそめて、母親と寄り添って、怖さや、やりきれなさや、無力な自分への怒りや、そんなものと闘っていたのだろうか。

眼を閉じると、窓をガタガタと震わせ、空き缶がアスファルトを転がっていく。そんな台風の音までもが聞こえるようだった。

今日子は、墓と、そこにぶら下がった風鈴を思い返した。

そして、紙飛行機を飛ばして遊ぶ、楽しげな親子の姿を思い描いた。

あの風鈴は、目に見えない風を父親に見せたくて、掛けた物だったのだろうか。

「その日のことが、ひどくトラウマになっていてさ」と、彼は言った。

「いまでも台風は苦手だし、怖いし、特に停電が大嫌いなんだ。そんなわけで、オレはあの日この場所で、電気屋になると心に誓った」

「え？」

突然の展開に振り返ると、啓二は口の端をあげてニツと笑っていた。その瞳は、さっきまでとは打って変わってやんちゃな光を宿している。

「おかしいだろー？ 『将来の夢は？ 目標は？』 って聞かれた時に、同級生が野球選手と答えるところを電気屋って答えてたんだ。本気で」

「停電が怖いから？」

「そう、停電が怖いから」

そう言つと啓二は、今日子の腰に腕を回し、引き寄せてきた。

「いまになって思えば、たとえオレが電気屋になっても、台風の停電は直しようがないんだけど。その頃はそんなこと、知りもしないからさ」

「で、なれたの？ 電気屋に」

何気なく出た問いかけに、啓二は「はあ？」と気の抜けた返事をした。

そして今日子を抱く腕をパツと離れたかと思うと、目をまん丸にさせて、

「なっってんじゃん！ ってか、名刺やっただろー？」

今日子は合コンの日に渡された名刺のことを思い出した。確か、あれは

「あれ捨てちゃった……」

破いたことは秘密にしておこう。

そう思いながら上目遣いに見ると、啓二は口を尖らせて、「しょうがねえなあ」と不満げな様子だ。

「まあいいや。お前今後も、男からもらった名刺やケー番は全部捨てる」

まったく、ついさっきまで辛い思い出話をしていたかと思えば、もうヤキモチである。

しょうがない人。とそう思うのに、啓二のヤキモチはどこかこそば

ゆくて。

「わかったな？」と口唇を寄せてくる彼の、声も、仕草も、今日子にはすべてが愛しかった。

公民館をあとにしたふたりは、やや西に傾いてきた太陽の下、砂浜に降り立った。

めいっぱい両腕を広げた水平線。きらりと日差しを照り返した波が、眩しく目を刺してくる。

渴いた砂は熱を孕んで、足の裏や指の間をジリジリと焼くようだった。

ジーンズの裾を膝までまくりあげ、ふたりは波打ち際を歩いた。片手にサンダルをぶら下げて、もう片方の手を繋いで。

生温い波が寄せては引き、引いては寄せる。その引き際に、踏みしめた砂ごとごとっそり持っていかれる感覚を楽しんでいた。

啓二の、普段は真っ黒に見えるボサボサの髪が、茶色に透けている。突風に煽られて、Tシャツの背中が大きく膨らんでいた。

沖合いに白い灯台がぽつんと立っている。

眩しさに目を細めると、上空に白い鳥が飛んでいるのが見えた。

青と白の二色だけで構成された風景は、いつか夢の中で見たポストカードみたいだ。

今日子は足を止めて、しばらくその光景に見入っていた。

「 隙ありっ！」

それは声の方が早くて。

「もっっ」

振り向いた途端、今日子はバシャッと海水を浴びるハメになった。

声をあげてはしゃぐ啓二は、いたずらっ子みたいに意地悪く笑っている。手のひらにすくった海水を、尚も今日子めがけて浴びせかけようとしていた。

放たれた瞬間、飛沫は大きく弧を描き、虹色にきらめいた。

今日子はサンダルを放り投げ、仕返しとばかりに啓二へ海水をぶちまけた。

彼の薄いピンク色のＴシャツが、まだらに濃い色へとかわっていく。

もっとなず濡れにしてやる！

そう意気込んでいたのに。屈みこんだ拍子に波に足をさらわれて、今日子はその場に倒れこんだ。

「今日子！」

手を引かれて立ち上がった時にはもう遅く、キャミソールはぴったりと肌にはりつき、裾からも、髪の毛の先からもボタボタと雫が滴っていた。

「あーあ、びしょ濡れ……」

すっかり濡れネズミになった今日子は、頬にはりついた髪を払い、耳に掛け直していた。

ふと、急に啓二が大人しくなつて。

目を上げると、熱に浮かされたような眼差しが自分を見下ろしていた。

日頃冗談ばかりを言う口唇は、ほんの少し開いたままで

「ケージ？」

名前を呼ぶと、啓二の手がゆっくりと動いた。

ためらうように近づいてくる長い指は、今日子に振り払う余裕を与えているみたいだ。

やがて指先が脇腹にそっと触れたとき、瞬間、今日子はなぜだか泣きたくなつた。

目頭が熱くなつて、ぎゅっと喉が締めつけられる。そこからこみあげてくるものを、今日子は慌てて飲み下した。

濡れそぼつた黒いキャミソール越しに、熱が伝わる。

まるで磁力でもあるみたいに、じんじんと伝わる痺れが一層今日子を息苦しくさせていた。

髪の前から滴る雫が、落ちるペースを緩めた頃、ようやく啓二の指は遠のいていった。

咄嗟に顔をあげると、変わらない瞳がそこにあった。自分を見つめる、穏やかな眼差しが。

逃げたらダメだ。そう覚悟して、今日子は啓二を見つめ返した。

身体の横に下ろした手が震えている。  
それを握りこむのが、精一杯だった。

### 35・シーサイド××

そこは？シーサイド××？という、ありがちな名前のラブホテルだった。

枯れかけた椰子の木が等間隔で植わり、風にはためく垂れ幕には？休憩3800円宿泊5900円から？と書かれている。

宿泊の予約を取っていなかったふたりは、空いているホテルを探して右往左往するハメになった。

けれど、お盆のシーズン中に都合よく空いているホテルなどあるはずもなく。

結局、いくつもあるラブホテルの中から、このホテルを選んだというわけだ。

「すまん！ オレ最初はひとりで来るつもりだったからー」

そう、申し訳なさそうに手を合わせる啓二は、なんだか可愛くて。今日子は怒る気も失せて、ぷつと吹き出してしまった。

初めて入るラブホテルは、ガランと静まり返っていた。

フロントらしい場所は無人で、カラオケの部屋を選ぶのと同じように、壁沿いに部屋のパネルが表示されている。

電気がついていないパネルは現在使用中という意味なのだろうか。

それでは、この建物の中で、いま6組サマがあれやこれやして、そして自分たちは7組目なのか、などと思いつき、今日子は自分の妄想に羞恥を覚えた。

「行こうか」

啓二の声に顔を上げると、彼はニツと笑って手を差し出していた。

この手を掴めば、もう引き返すことは出来ない。一瞬、そんな思いが胸をよぎった。

引き返す必要なんてない。後悔なんて、するわけがない。一瞬でも不安に思った自分を振り切るようにして、今日子はその手を握り締めた。

部屋は5階にあった。

薄暗いエレベーターには、いかにも冷凍食品らしいピラフやカレーの写真が並び、？朝食セット350円？とワープロ打ちされたポスターが貼られている。

エレベーターを降りた先は絨毯敷きの廊下が続く。

そのつきあたりに、ルームナンバーが強く点滅している部屋が見える。

ラブホテルに入ったのはこれが初めてだけれど、教えられなくても、そこがふたりの部屋だというのは予想がついた。

啓二が、肩に担いだ荷物を背負い直している。

彼はまるで、海でも山でも、運転中の高速道路でも洋風居酒屋でも

変わらないような仕草で。ひょうひょうと鼻歌でも歌いだしかねないほどリラックスしているように見えた。

ガチャリ と、ドアノブを回すと、突如眩しい陽が目を刺した。

部屋の壁紙や家具は、元々はオフホワイトが基調なのだろう。

けれど、西向きの窓から射し込む夕陽が、いまは部屋中をオレンジ色に染めていた。

それはともかく。

とうとう、部屋にふたりきりだ。

そう思うと、今日子の胸の内ではにわかに緊張が高まってきた。

理由の一つに、以前里美から借りた漫画がある。

初体験を描いたその漫画には、いまと同じシチュエーションが出てくる。

ホテルの部屋に入り、主人公の女が荷解きをしていると、突然背後から抱きすくめられ、例の行為がスタートするのだ。

よせばいいのに、ついそのストーリーを思い出し、今日子は壁に背を向けて屈みこむと、啓二の動向を窺いながら荷解きを始めた。

啓二は窓際のソファにどっかりと腰掛け、携帯の充電プラグをコンセントに差し込んでいる。

どぎまぎしている今日子とは違い、どこも変わった様子はない。

やがて啓二はこちらの視線に気付いたのか、身体ごとこちらに向き直った。

逆光が、視界を邪魔している。

盛大な西日が射し込んでいるせいで表情はなにも読み取れなかった。

「風呂に入る順番決めようぜー。一緒でもいいけど」

この調子では、漫画のようなドラマティック展開は起こりそうにない。

いつもと変わらない啓二だ。

ホツとしたというか、残念というか。両方当てはまる微妙な感情を  
持て余しながら、「じゃんけん決めてる？」と今日子は答えた。

今日子がバスルームから出たとき、先にあがっていた啓二は誰かと  
電話で話しているようだった。

白いTシャツに、紺色のハーフパンツ姿で。今日子も部屋着のセツ  
トだ。

お互いまるで、家でゴロゴロしているのと変わらない格好をしてい  
た。

自分のことを「ワタシ」と呼んでいるから、きっと電話の相手は会  
社の上司だろう。

実のところ少しばかり緊張していただけに、今日子は肩すかしをく  
らったような気がした。

そのくらい部屋の中は自然で、とてもラブホテルの一室とは思えな

い普段通りの空気が流れていた。

今日子はペットボトルの水を飲みながら、テーブルに置かれたテレビのチャンネル表を手を取った。

愛媛県に属する島とはいえ、ここは広島県に近い。

表には2県分の局名が書かれ、今日子の住む八幡浜では映らない番組も多かった。

ちらつと啓二を振り返ると、彼は時折「はい、はい」と返事をしながら、メモ用紙に何か書きつけている。

構ってもらえないから退屈だ、というわけではないが、仕事の話はまだ終わりそうにもない。

音量さえ絞れば、通話の邪魔にはならないだろうと思えた。

今日子はチャンネル表を手にしたまま、テレビの方を向いた。

しかし

ええと、テレビ広島は25CHだから　と、リモコンで電源を入れたのも束の間。

「ああ……ダメえっ。こんな所でっ」

と、女の喘ぎ声が大音量で流れ出し、それに続き画面には半裸の女と、平凡そうな男の絡みシーンが映し出された。

一瞬凍りついたあと、慌てて電源を落としたけれど、時すでに遅し。

振り返ると、啓二は必死に笑いを堪え、「いえ、違います。誤解です、本当に」と上司に弁解している。

頬が、ありえないほど熱い。

消え入りたいほどの羞恥に、身体中から汗が噴き出ている。

いますぐにでも謝りたいけれど、ここで声をあげれば更に波紋を広げるだろう。

そう思うと下手に謝ることもできず、今日子はオロオロと、テレビの前を行ったりきたりしていた。

しばらくの後、「では、失礼します」と通話を終えた啓二は、携帯の電源を切った途端、ベッドに寝転がり大笑いを始めた。

「お前、ホント最高だなつ。すっげえ焦った、マジうけるっ」

そんなに笑わなくてもいいのに、と軽い反発を覚えながらも、ただうな垂れるしかなくて。

「ごめん……、あたし、もう一生テレビなんて見ない。もうヤダ」

今日子は沈黙したテレビを横目で睨みつけ、大きなため息をついた。

やがて、

「今日子」

ひとしきり笑い終えた啓二が、上体を起こして名前を呼んだ。

頭を垂れたままの今日子に、おいで、と手を差し伸べている。

さんざん笑われたから、素直に従うのは癪に障る。

そう思うのに、今日子は磁力に引き寄せられたかのごとく、ベッドに乗りあがった。

鎖骨の下まで伸びた髪は、半濁きのせいで真っ直ぐに垂れている。

啓二は仰向けに寝転んだまま、上に跨る今日子の髪に指を絡めていた。

毛先を引っ張られるたびに、軽い刺激が根元に走る。

それがひどく心地よくて、今日子はされるがままに委ねていた。

「手はここに。直に触れられてると落ち着くんだ」

シートの上につっ張っていた手を掴まれて、Tシャツの中へと啓二に導かれた。

初めての彼の素肌。

その熱くて滑らかな肌触りと、一呼吸ごとに上下する命の感触を、今日子は手のひら全体で愛しんだ。

脇腹に指を滑らせると、啓二の眉根が苦しげに寄って。直後、今日子の下にある一部が急速に硬さを増し、跳ねるみたいに太ももに当たるのがわかった。

びくり、と思わず身体が逃げ出しそうになったけれど、それよりも啓二が上体を起こす方が早かったようだ。

掻き抱かれた腕に、身体の内はやすやすと奪われた。

「怖い？」

耳元で、低い声が囁いている。

くすぐったくて首をすくめると、逃げた先まで追いかけてきて、そっと耳たぶが含まれた。

たまらず肩に頬を寄せると、啓二の肌の匂いが鼻を掠めた。

大きな肩の向こう側に、暮れる直前の夕陽が、窓から射しているのが映った。

「怖い？」

もう一度、今度ははっきりと声が響いた。

口を開けば、気持ち声をに出してしまいそうで。今日子はきゅっと口唇を噛み締めると、夢中で首を横に振った。黙って、振り続けた。

啓二の熱い手のひらが、髪から肩へ下りていく。きつく瞼を閉じると、血管が赤く透けて見えた。

「今日子」

名前を呼ばれて、今日子はゆっくりと瞼を開いた。

そこには、いつもより大人びた啓二の顔があった。まつ毛の1本まで見えるほどの、至近距離に。

「好きだ」

重なった口唇から、情熱が注がれた。

隙間なくあわさった肌と、腕の強さが、胸の中の恐怖心を追いやっていく。

目を閉じる間際、肩の向こうに葡萄色の空が見えた。ふたりの影が長くのびて、壁に揺らめいていた。

### 36・彼の恋人(前書き)

携帯電話からアクセスされた皆さまへ。

今回はあとがきに目を通されますよう、お願いいたします。

### 36・彼の恋人

携帯電話を握る手のひらに、じつとりと汗が滲んでいた。

登録ダイヤル1を押すだけで繋がるその相手へ、舞子は電話をかけられないままためらっているのだ。

あの喫茶店で最後に会った日から2日、見合い相手との結婚話は、舞子のあずかり知らぬ所で着実に進められていた。

こちらの都合も聞かないうちに、親同士の間で勝手に約束がとりつけられる。

何もかもが、セッティングされたあとに報告されるだけ。

このままでは、瞬く間に結婚までのレールが敷かれるだろう。そして、啓二とやり直す機会は二度と巡ってこない。

舞子は、単にこの状況から救われたいと願っているわけではない。

親の手によって着々と進められていく結婚の下準備を見るにつけ、いまになって自分の気持ちと真摯に向き合うようになっただけのことだ。

共に未来を築く人。それは、舞子にとって啓二以外に考えられない。

何を今更、都合が良すぎる、と言われるだろう。それは舞子だって

百も承知である。

けれど啓二が語った？新しい彼女？の存在を、どうしても舞子は信じられなかったのだ。

もし彼の強がりが生んだ作り話だったら？

舞子の見合い話に対するあてつけだったら？

都合のいい思い込みだ、と冷静に諭す自分がいる。

それでも、あるかどうかもわからないわずかな可能性にしがみつき、舞子は期待せずにいられないのだ。

未練がましいと言われてもいい。希望を捨てきれなかった。

舞子は大きく息を吸い込み、ゆっくりと時間をかけて吐き出した。指の関節をほぐすようにギュツと手を握り締め、じわりと緩める。

1

このボタンを押すだけでいいのだ。それだけで繋がるのだから。

いよいよ舞子がボタンを押そうと覚悟を決めたそのとき、ドアの向こう側に擦れるような物音と気配がした。

「舞子さん？ いいかしら？」

ドアを緩くノックする音。続いて母の柔らかく、芯の強い声が聞こえた。

「はい」

舞子の家では、幼い頃より親兄弟といえども敬語で話す。

知らない人の耳には情の薄さを覚えるかもしれないが、当人同士にとってはこれが当たり前の日常だった。

母はゆっくりとドアを開き、そして滑り込むように部屋へ入ると、背中を見せてドアを閉めた。

黒いサマースーツを着ているせいか、手に持つ水色の封筒が浮いたように見える。

舞子の目も、自然とそこへ注がれた。

「舞子さん」

名前を呼ばれ、舞子は母の口元に目をやった。

母は機嫌の善し悪しを口元の皺に出す癖があり、それであれば今日は一ご機嫌らしい。

「先方とはお話がいい方向に進みそうで、お父様も安心してらしたわ。良かったわね？ いい方で」

先方とはもちろん、父の利権がらみで紹介された婚約者のことだ。

「はい……」

確かに、悪い人ではない。

外見も教養も申し分なく、おまけに舞子のキャリアを尊重してくれ

る、今時の？理解ある男？だと言える。  
そして父にとつても？いい方？には違いないだろう。

舞子は、そんな皮肉な思いを噛み締めながら、再び母の手にある封筒に目をやった。

『有限会社飯塚調査事務所』とその封筒の右下には印字され、中央に大きく父の秘書の名前が書かれている。

「舞子さん、悪く思わないでね。お父様が舞子さんのためを思って、あの　あなたが交際してらした男性のことを調べたの」

「えっ？」

母はゆつたりとした動作で何枚かの書類を抜き取り、舞子へと差し出した。

「わたしも安心したわ。舞子さん、きちんと関係を整理されてて」

舞子は手にしたA4サイズの書類に目を落とした。

そこには啓二の家族構成、職場での評判、この1ヶ月の行動が事細かに綴られている。

上段にはクリップで写真が挟まれ、それが何枚も重なっていた。

「これは……」

そう声に出したきり、舞子は言葉が続かなかった。

まさか、父が未だに啓二の素行を洗っているとは。

別れた、終わった、と報告してから2ヶ月も経つのに。

つまりそれは、父が、娘である自分を最初から信用していなかったことを裏付けていた。

そして今も二人の仲を疑い、監視しているということだ。

嘘をついていようものなら、否応なく終わらせる方向にもっていくつもりだったのかもしれない。  
いや、きつとそうだ。

そこには何か、どうやってでもあの縁談をまとめたいと思う、そんな父の思惑が感じられた。

娘のため？ そんなわけがない。

どうせ政治資金と票集めのために決まっている。

舞子はいつの間にか、書類を持つ手にぎゅっと力を込めていた。爪のあたりが白くなるほどに。

「でもね、良かったわよ舞子さん。その方も、身の丈にあった方とおつき合いされているようよ？ 人には縁というものがあるの」

そう言って母は、封筒の中から最後の一枚かもしれない写真を取り出し、それを舞子へとつき出した。

よく見なくてもわかる。4年間も一緒にいたのだから。

そのシルエットはまぎれもなく啓二。そして啓二が、女と抱き合っ  
て口づけを交わしている。

「ね？ 舞子さん、しつかりと新しいスタートを切って頂戴」

口元だけで笑う母は、弾むような声で言った。

「もう、この方と会ったりはしないのよ？ おわかりでしょう？

先方もあなたのことを調べている可能性だってあるのよ」

母は、きつと何もかも知っていて、それを見越して釘を刺しているのだ。

見合いの日に、逃げるようにしてこの町に帰ったことも。そこで誰を呼び出したのかも。

そして二度とそんな気が起こらないように、こんな写真を見せているのだろう。

舞子は母の目を見つめ、続いてつま先に目を落とした。

真夏でも、家ででも絹のストッキングをはく。そんな母のつま先を見ていると、それが自分の身を置く場所の象徴のように思え、舞子はやり場のない怒りがふつふつと胸にこみあげるのを感じた。

どうしてこんな家に生まれてきたの？

どうしてこんな目に遭わなければならないの？ 自由を制限されて、監視されて。

こんな親でさえなければ、最初から別れなど切り出さなかった。

こんな家にさえ生まれなければ、きつといまも一緒にいたはずなのだ。

舞子はやるせない思いに、ぐっと眉を寄せた。

眼を閉じれば啓二とすごした日々が鮮やかによみがえり、切ない胸を駆け巡った。

いつも待ち合わせをした行きつけの喫茶店。

誕生日やクリスマスに二人でよく顔を出したレストラン。

彼の部屋で過ごしたひととき。その指も、声も、笑顔も。

そんなかけがえのない思い出は、すぎ去った過去として片付けられるだけで、二度とこの手に取り戻すことはできないのか。

「じき、お昼よ。一緒にいただきましょうね」

そう言い置くと母は静かに舞子の部屋を後にした。階段を降りていく、ひた、ひた、と擦れるような音が遠ざかっていく。

その足音を聞きながら、舞子は手の中の書類を皺が寄るほど強く握り締めた。

震える指先から、ひらりと一枚、啓二の写真が床に落ちていく。

表になって落ちたそれは、母が言うところの「身の丈にあつた相手とおつき合いをしている」彼だ。隣には自分じゃない誰かが寄り添っている。

彼は、本当に前へ歩き始めていたのか。

別れて2ヶ月しか経たないのに。

もしかしたら、と思い描いていた可能性は、ひとりよがりな妄想にすぎなかったのだ。

舞子だって、本当は薄々わかっていた。心の中では。

けれどそれを形にして見せられると悔しくて、はがゆくて。齒と齒の間から恨みごとが漏れるのを、堪えることなどできなかった。

ぼやけた視界の中に、写真の女が滲んで映る。

かつて舞子がいた場所に、とってかわったように居座っている女だ。

「結婚ねえ。まあ憧れるけど、でもカノジヨ20歳だからなあ」

そんな風に新しい彼女との未来を語った啓二の声がよみがえり、舞子は腰を屈め、落ちた写真を手にひろった。

これが、新しい彼女。

その姿は、どこかで見たことがあるような気がした。

けれど栗色の長い巻き毛にほっそりとした身体は、今時街中で見かける若い女に多いタイプで。単に、雑誌で見た誰かに似ているだけかもしれない。

顔を傾けて口唇を重ねる顔は、啓二の陰に隠れてよく見えなかった。

つき合っている頃、彼は舞子の黒くて長い髪をいつも褒めてくれた。その髪に似合う髪留めを、いくつもプレゼントしてくれた。

写真の女は、そんな自分とは似ても似つかないタイプで、舞子の面影を求めて選んだ彼女とも思われなかった。

本当に、本当にもう終わってしまったんだ。

「啓二」

名前を声に出すと、舞子は辛うじて抑えていた理性のたがが外れ、膝からがくりと崩れ落ちた。

「こんな物！」

そして手の中にある、彼の明るい未来をひねり潰すと、壁に向かって思い切り投げつけた。

それは濁いた音をたて、本棚の裏に落ち、ただのゴミへと姿を変えた。

### 36・彼の恋人（後書き）

「ここまで」「らしく。」「におつき合い下さった皆さま、本当にありがとうございました。とっくにございました。

作者の五十崎由記といます。

今回はご報告がてら、あとがきを書き残すことにいたしました。

さて、この作品は本来であれば全72話。

2008年の2月に、こちらのサイトで完結した長編恋愛小説ですが、同年の3月に受賞し、その後出版社との契約により、本文の半数を削除しなくてはなくなりました。

よって、こちらのサイトには36話までしか掲載できません……。

本当に申し訳ないです。

わたしとしては、できれば全文公開したいのですが、こればかりは相手のある話でもあり、なかなか思うようには……というのが現状です。

中途半端に終わらせてしまうこと、重ね重ね申し訳ないです。

ただ、こちらの作品は、2008年に単行本で、又2010年に文庫本としても発行されております。

図書館に足を運んでいただければ、そこにある可能性が高いですし、もちろん本屋さんでも同様です。

もし続きをくという方がいらっしやれば、是非、そちらの方で楽しんでいただけたらと思います。

最後に、37話以降の主なあらすじを書き、あとがきにかえさせていただきます。

ありがとうございました。

### 後半のあらすじ

興信所からの写真に引っかけりを感じた舞子は、やがて啓二の恋人が今日子である事実をつきとめる。

今日子を20歳だと思いこんでいる啓二と、年齢を偽ったままの今日子。

この点につけ込み、舞子はふたりの仲を引き裂こうと画策するが、それが失敗に終わるやいなや、次には啓二の勤務先に乗りこんで、彼が淫行罪の容疑者であることを暴露する。

一方、今日子の保護者である母親に、啓二を告訴するよう説得するが……

注：淫行罪は17歳以下の青少年に性的行為を働いた場合、適用さ

れる条例の一つ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6798c/>

---

らしく。

2010年10月15日20時12分発行